財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第32集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）

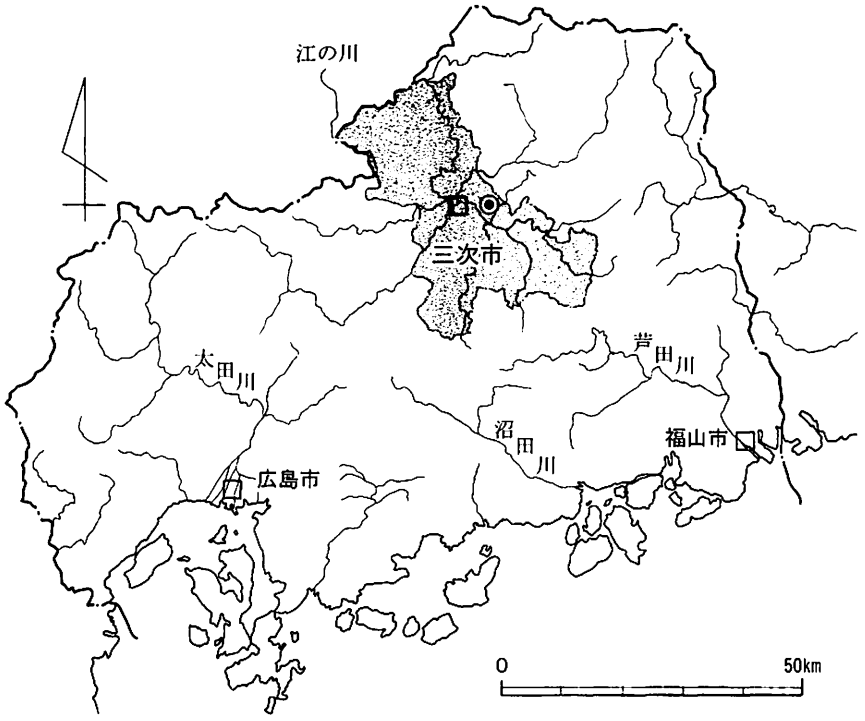
権現第１～３号古墳

２０１０

財団法人　広島県教育事業団

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）

権現第１～３号古墳

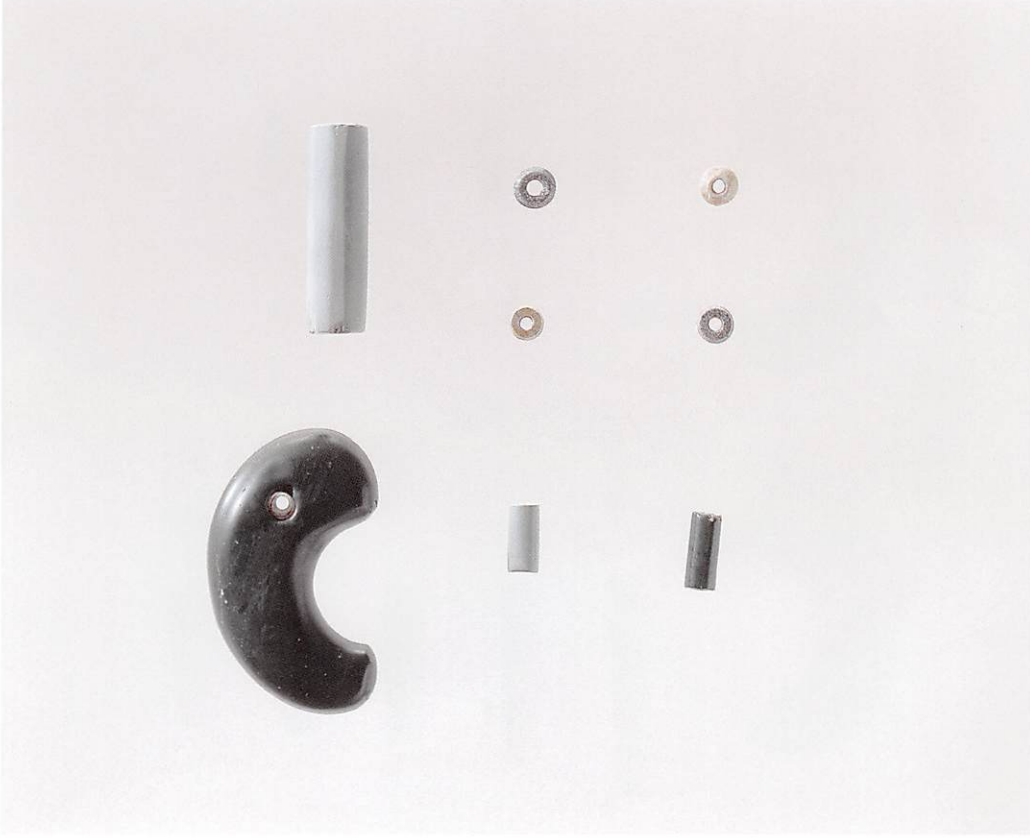


三次市位置図（◉は古墳群を示す。）

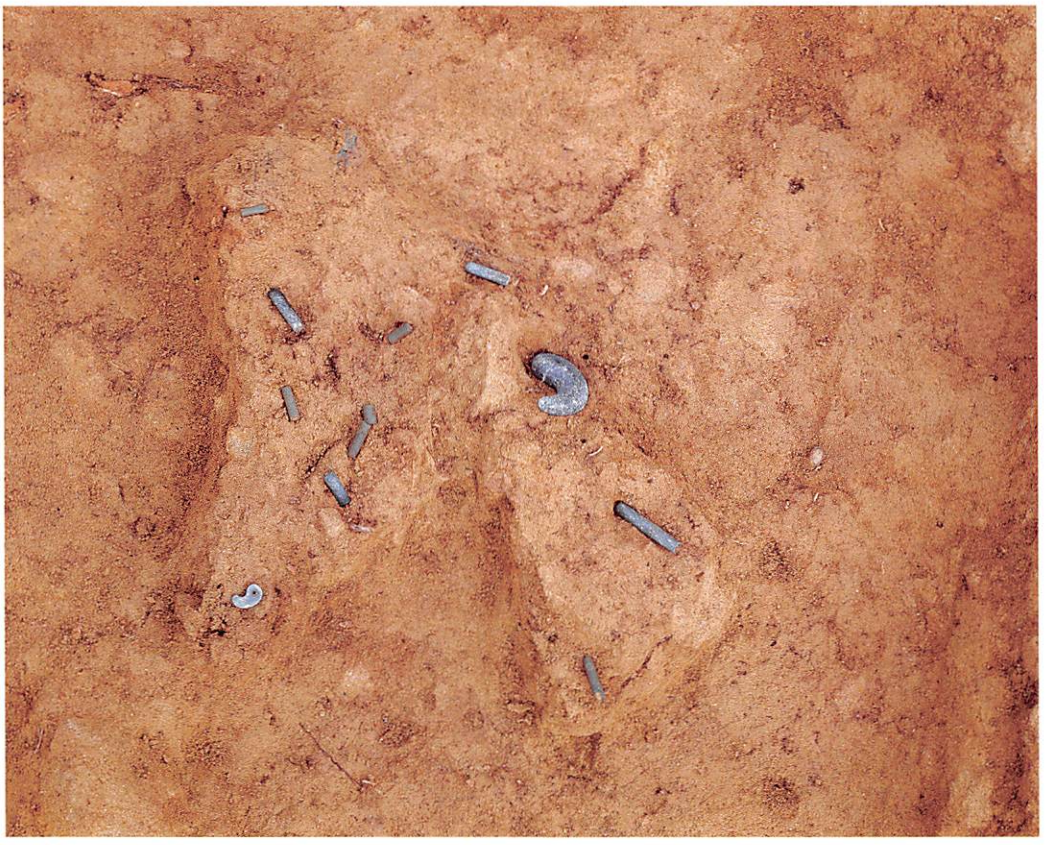
２０１０

財団法人　広島県教育事業団

ａ　権現第１～３号古墳全景（空中写真，南から）



ｂ　権現第２号古墳ＳＫ１・４出土玉類



ａ　権現第３号古墳ＳＫ２玉類出土状況（南から）

ｂ　権現第３号古墳ＳＫ１・２出土玉類

例　言

1　本書は，平成17（2005）年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る権現第１～３号古墳（三次市向江田町権現所在）の発掘調査報告である。

2　発掘調査は，日本道路公団中国支社（現　西日本高速道路株式会社中国支社）との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。

3　整理作業・報告書作成は，日本道路公団中国支社（現　西日本高速道路株式会社中国支社）及び国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。

4　発掘調査は，梅本健治，伊藤実（現　広島県立歴史民俗資料館）が担当した。

5　出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は，梅本が中心となって行った。

6　本書は，梅本が執筆・編集した。

7　本書で使用した遺構の略号はＳＫのみで，権現第１号古墳では「中世土坑」，権現第２・３号古墳では「古墳の埋葬施設」を示す。

8　図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。

9　本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

10　第２図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（三良坂）を使用した。

11　権現第２・３号古墳出土の玉類及び箱式石棺の石材は，考古地質学研究所　柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。

12　埋葬施設の副葬品の位置の説明における左右は被葬者から見て，である。

13　遺物実測図の縮尺は，鉄器＝1:2，勾玉・管玉・有孔楕円形玉・棗玉＝2:3，臼玉＝1:1である。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… (1)

Ⅱ　位置と環境 …… (4)

Ⅲ　調査の概要 …… (13)

Ⅳ　遺構と遺物 …… (14)
　1　権現第1号古墳 …… (14)
　2　権現第2号古墳 …… (17)
　3　権現第3号古墳 …… (31)

Ⅴ　まとめ …… (49)

巻頭図版目次

巻頭図版1　a　権現第1～3号古墳全景（空中写真，南から）
　　b　権現第2号古墳ＳＫ1・4出土玉類
巻頭図版2　a　権現第3号古墳ＳＫ2玉類出土状況（南から）
　　b　権現第3号古墳ＳＫ1・2出土玉類

挿図目次

第1図　中国横断自動車道尾道松江線路線図 …… (3)
第2図　権現第1～3号古墳周辺遺跡分布図（1:25,000） …… (5)
第3図　権現第1～3号古墳周辺地形図（1:2,000） …… (13)
第4図　権現第1号古墳調査前地形測量図（1:200） …… (14)
第5図　権現第1号古墳墳丘測量図（1:200） …… (15)
第6図　権現第1号古墳墳丘土層断面実測図（1:60） ……折込み
第7図　権現第1号古墳ＳＫ1実測図（1:40） …… (17)
第8図　権現第2号古墳調査前地形測量図（1:200） …… (18)

第９図　権現第２号古墳墳丘測量図（1:200）……（19）
第10図　権現第２号古墳墳丘土層断面実測図（1:60）……折込み
第11図　権現第２号古墳ＳＫ１実測図（1:30）……折込み
第12図　権現第２号古墳ＳＫ２・３実測図（1:30）……（25）
第13図　権現第２号古墳ＳＫ４実測図（1:30）……（27）
第14図　権現第２号古墳ＳＫ５実測図（1:30）……（28）
第15図　権現第２号古墳出土遺物実測図（1:1，2:3，1:2）……（30）
第16図　権現第３号古墳調査前地形測量図（1:200）……（31）
第17図　権現第３号古墳墳丘測量図（1:200）……（32）
第18図　権現第３号古墳墳丘土層断面実測図（1:60）……折込み
第19図　権現第３号古墳ＳＫ１・２実測図（1:30）……（35）
第20図　権現第３号古墳出土遺物実測図（1:1，2:3，1:2）……（37）

表目次

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧……（２）
第２表　権現第２・３号古墳埋葬施設一覧……（38）
第３表　権現第２・３号古墳出土遺物一覧……（39）
第４表　広島県内の主な前・中期古墳（立地・主軸）……（41）
第５表　広島県内の玉・刀子・鎌を出土した主な前・中期古墳……（43）

図版目次

図版１　a　古墳群全景（空中写真，南から）
　　b　同上（空中写真，南東から）
図版２　a　第１号古墳全景（調査前，北から）
　　b　第１号古墳全景（北から）
　　c　第１号古墳全景（空中写真，東から）
図版３　a　第１号古墳墳丘土層（東西方向東半，南から）
　　b　第１号古墳墳丘土層（東西方向西半，南から）
　　c　第１号古墳墳丘土層（南北方向北半，西から）
図版４　a　第１号古墳墳丘土層（南北方向南半，西から）
　　b　第１号古墳ＳＫ１（東から）

図版４　c　第２号古墳全景（調査前，北から）
図版５　a　第２号古墳全景（北から）
b　第２号古墳全景（空中写真，東から）
c　第２号古墳墳丘（南から）
図版６　a　第２号古墳墳丘土層（東西方向東半，南から）
b　第２号古墳墳丘土層（東西方向西半，南から）
c　第２号古墳埋葬施設群全景（検出時，北から）
図版７　a　第２号古墳ＳＫ１（北から）
b　同上（礫床検出状況，東から）
c　第２号古墳ＳＫ２（西から）
図版８　a　第２号古墳ＳＫ３（東から）
b　第２号古墳ＳＫ４（蓋石，北から）
c　同上（蓋石，東から）
図版９　a　第２号古墳ＳＫ４（棺内，北から）
b　同上（棺内，東から）
c　第２号古墳ＳＫ５（蓋石，北から）
図版10　a　第２号古墳ＳＫ５（蓋石，東から）
b　第２号古墳ＳＫ５（棺内，北から）
c　同上（棺内，東から）
図版11　a　第３号古墳全景（調査前，東から）
b　第３号古墳全景（南から）
c　第３号古墳ＳＫ１・２（北から）
図版12　a　第３号古墳ＳＫ１（西から）
b　同上（南から）
c　同上玉類出土状況（西から）
図版13　a　第３号古墳ＳＫ２（西から）
b　同上（南から）
c　同上玉類出土状況（東から）
図版14　第２・３号古墳出土遺物

Ⅰ　はじめに

権現第１～３号古墳の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本事業は，本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって，山陰，山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連帯構想を推進し，本圏域の産業，経済及び文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与しようとするものである。

日本道路公団中国支社（以下，「道路公団」という。）は，平成12（2000）年３月，当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて，広島県教育委員会（以下，「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い，平成13（2001）年８月事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。県教委は平成15（2003）年11月に当該箇所の試掘調査を実施し，権現第１～３号古墳の存在を確認した旨を平成16（2004）年２月23日に道路公団に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と道路公団は協議を重ねたが，設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。道路公団は，平成17（2005）年２月４日付けで県教委あてに「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し，県教委は同年２月16・17日付けで道路公団あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。道路公団はこれを受けて，同年３月10日付けで財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下，「教育事業団」という。）に権現第１～３号古墳（1,300㎡）の調査依頼を行なった。道路公団と教育事業団は同年４月１日付けで委託契約を結び，教育事業団は同年７月11日から11月11日までの約４か月間発掘調査を行った。なお，10月８日には三次市教育委員会と共催で遺跡見学会を開催し，125名の参加があった。

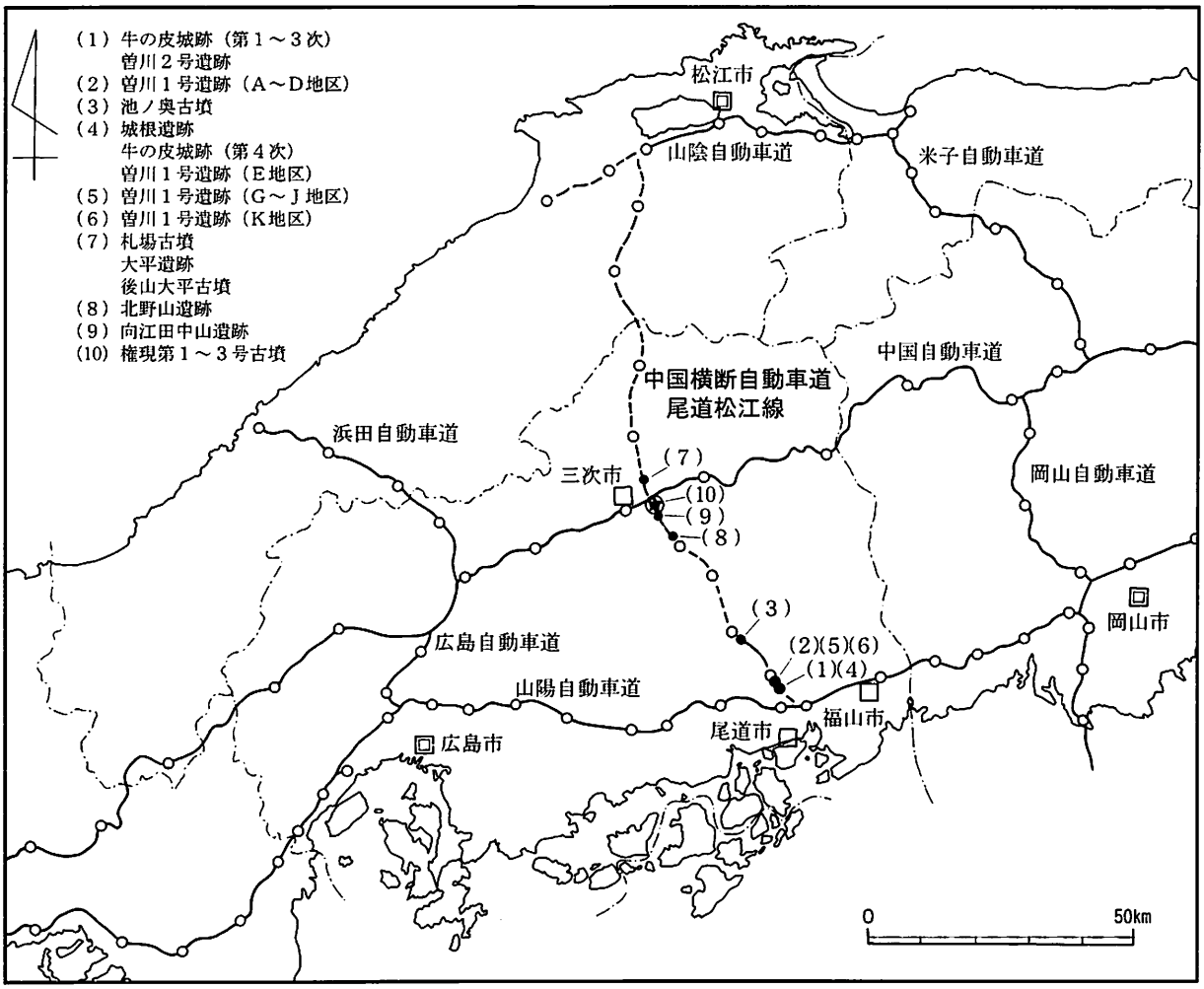
本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

なお，中国横断自動車道尾道松江線建設事業は，平成17（2005）年10月１日の日本道路公団の解散に伴って西日本高速道路株式会社に引き継がれ，平成18（2006）年度からは国土交通省に承継された。発掘調査にあたっては，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所，西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所，三次市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺　跡　名		地区名	調査期間	所在地	時　期	内　容
（1）	牛の皮城跡（北郭群）	第１次	畝状竪堀群	平成15年１月20日～３月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中　世	城　跡
		第２次	１～４郭	平成15年７月７日～10月31日			
		第３次	西竪堀	平成15年11月10日～11月28日			
	曽川２号遺跡			平成15年１月20日～３月７日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
（2）	曽川１号遺跡	Ａ地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年１月17日	尾道市御調町大町字曽川	弥生時代～中世	集落跡
		Ｂ地区	旧・Ｐ２第一調査区	平成15年４月７日～５月23日			
		Ｃ地区	旧・Ｐ２第二調査区				
		Ｄ地区	旧・Ｐ１	平成16年１月６日～２月５日			
（3）	池ノ奥古墳			平成16年８月23日～10月28日	世羅郡世羅町宇津戸字天神	古墳時代後期	古　墳
（4）	城根遺跡			平成15年１月27日～３月７日	尾道市御調町大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡（北郭群）	第４次	５郭	平成18年１月30日～２月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中　世	城　跡
	曽川１号遺跡	Ｅ地区	旧・Ｐ４	平成15年12月１日～12月19日	尾道市御調町大町字米田	縄文時代後期～中世	遺物包含層
（5）	曽川１号遺跡	Ｇ地区	旧・Ｐ３	平成16年６月７日～８月６日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		Ｈ地区	旧・Ｐ３側道				
		Ｉ地区	旧・Ｐ４側道				
		Ｊ地区	旧・Ｐ２	平成17年１月11日～３月４日			
（6）	曽川１号遺跡	Ｋ地区		平成17年４月11日～７月１日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
（7）	札場古墳			平成17年11月21日～平成18年１月27日	三次市後山町字札場	古墳時代後期	古　墳
	大平遺跡			平成19年6月25日～10月５日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳					古墳時代後期	古　墳
（8）	北野山遺跡			平成18年７月３日～８月４日	三次市吉舎町敷地	平安時代	仏教関連の施設跡
（9）	向江田中山遺跡			平成18年４月17日～６月23日	三次市向江田町中山	飛鳥時代	集落跡
(10)本書	**権現第１～３号古墳**			**平成17年７月11日～11月11日**	**三次市向江田町権現**	**古墳時代中期**	**古　墳**

(報告書)
(1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川2号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 2005年
(2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曽川1号遺跡(A～D地区)』 2006年
(3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』 2007年
(4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡　曽川1号遺跡(E地区)　牛の皮城跡(第4次)』 2008年
(5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曽川1号遺跡(G～J地区)』 2008年
(6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曽川1号遺跡(K地区)』 2008年
(7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 札場古墳　大平遺跡　後山大平古墳』 2009年
(8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』 2009年
(9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡』 2010年



第1図　中国横断自動車道尾道松江線路線図((1)～(10)は報告書番号を示す。)

Ⅱ　位置と環境

権現第１～３号古墳は広島県北部の三次市向江田町に所在する。三次市は平成16（2004）年４月に旧三次市・旧双三郡（作木村・布野村・君田村・三和町・三良坂町・吉舎町）・旧甲奴郡甲奴町の１市４町３村が合併してできた，49km×31kmと北西－南東方向に長い市である。三次市域は，地形的には広義の三次盆地を中心に北は中国脊梁山地の一部を形成する備北山地に含まれる大万木山山塊と吉備高原面の作木高原，南から南東にかけては吉備高原面の世羅台地及び甲奴高原によって構成される。中心の三次盆地面（標高150～450m）は東西約40km，南北約25kmの県内最大の盆地で，中国脊梁山地の南側に連なる中央盆地列に含まれる。この盆地に四方から流れ込む江の川水系の神野瀬川・西城川・馬洗川・可愛川が盆地中央で集まり，西流して盆地西方の江川関門を経て日本海に流れ下る。権現第１～３号古墳はこの三次市域の中央部東寄りに位置する。

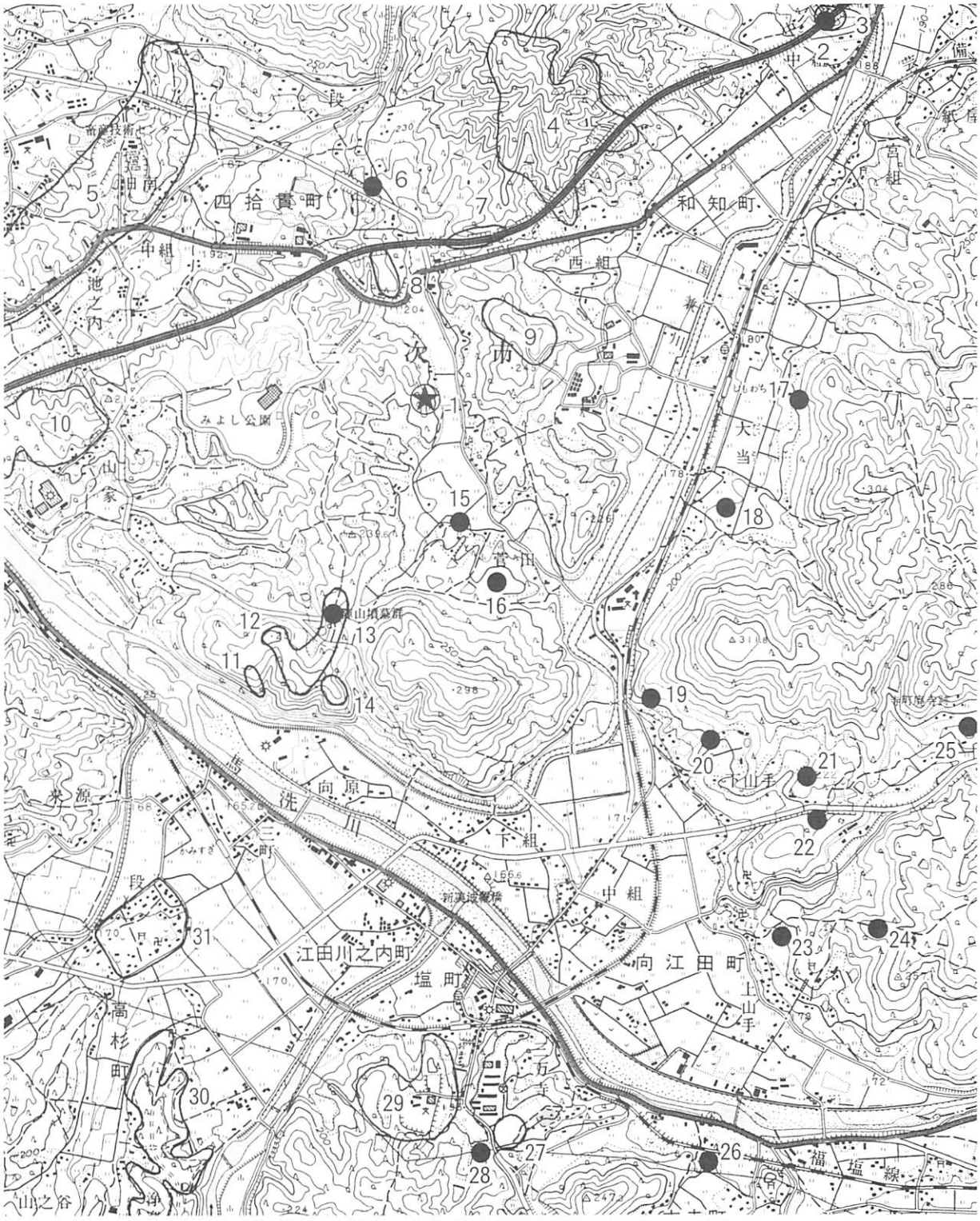
三次市は陰陽を結ぶ交通・政治・社会・文化の要衝で，史跡矢谷古墳・史跡寺町廃寺跡や約4,000基を数える古墳をはじめとする数多くの文化財が残されている。ここでは，権現第１～３号古墳が存在する向江田町周辺を中心に旧三次市域の歴史的環境についてみていくことにしたい。

旧石器時代　馬洗川南岸の下本谷遺跡[1]（西酒屋町），同北岸の段遺跡[2]（四拾貫町）・和知白鳥遺跡[3]（和知町）で旧石器包含層の調査が行われている。古代の三次郡衙跡として著名な下本谷遺跡では，郡衙跡の北西側の丘陵頂部（配水池地点）などから姶良Tn火山灰（ＡＴ）の降灰に先行する時期のナイフ形石器を含む石器群を検出した。段遺跡と和知白鳥遺跡はひと連なりの丘陵上にあり，ＡＴ降灰に先行する石器が出土している。

縄文時代　松ヶ迫Ｂ地点遺跡[4]（東酒屋町）では縄文時代早期の，平面楕円形で小型の竪穴住居跡を検出した。柱構造は明確でなく，楕円押型文土器（深鉢）やスクレイパーが出土した。松ヶ迫Ａ地点遺跡[5]（東酒屋町）・緑岩遺跡[6]（南畑敷町）では丘陵尾根線上で前者が６基，後者が29基の長方形土坑を検出した。底面に円形のピットを掘り込んだ深い土坑で，動物狩猟用の落とし穴と考えられる。

弥生時代　前期のものとしては，高蜂遺跡[7]（南畑敷町）の竪穴住居跡がある。浅く小型の円形住居跡で，床面には無数の小柱穴が存在する。住居内からは，多くの石鏃・石錐や未成品・剥片・チップとともに，縄文時代晩期の突帯文土器と弥生時代前期初頭の甕が出土している。高平Ａ号墓[8]（十日市南町）は３基の埋葬施設（土坑・木棺）が並列する積石墓である。松ヶ迫Ｄ地点遺跡[9]（東酒屋町）では木棺墓・土坑墓10基を検出し，１基からは碧玉製管玉18点が出土した。

弥生時代中期の遺跡では，集落跡として塩町遺跡（大田幸町）・高平遺跡群が，墳墓として四拾貫小原遺跡[10]（四拾貫町）・陣山遺跡[11]（向江田町）・宗祐池西遺跡[12]（南畑敷町）・殿山墳墓群[13]（大田幸町）がある。塩町遺跡は10軒以上の竪穴住居跡などから広島県北部の弥生時代中期後半の標識土



第２図　権現１～３号古墳周辺遺跡分布図（1:25,000）

1	**権現第１～３号古墳**	2	羅漢遺跡	3	古城山城跡	4	国広山城跡
5	四拾貫古墳群	6	段遺跡	7	上四拾貫古墳群	8	和知白鳥遺跡
9	南山城跡	10	山家古墳群	11	大仙大平山第21・22号古墳	12	陣山古墳群
13	陣山墳墓群	14	陣山城跡	15	深茅遺跡	16	向江田中山遺跡
17	大当瓦窯跡	18	河原田２号遺跡	19	瀬戸越南古墳	20	箱山古墳群
21	野稲南古墳群	22	下山手第４・５号古墳	23	上山手廃寺	24	宮の本第24号古墳
25	寺町廃寺跡	26	新宮山城跡	27	塩町遺跡	28	重岡山遺跡
29	勇免古墳群	30	浄楽寺・七ッ塚古墳群	31	高杉城跡		

器となっている塩町式の壺・甕・鉢などが出土した。高平遺跡の第２号竪穴住居跡は中期中ごろの２本柱の円形住居跡で，鍛冶作業との関連性が考えられている。四拾貫小原遺跡では標石・配石をもつ土坑墓５基に石列が伴う。このほかの墳墓は土坑墓などを埋葬施設とする四隅突出型墳丘墓で，いずれも四隅の突出が弱いか不明確なもので，弥生時代中期後半頃とされる。

弥生時代後期の集落跡としては住田遺跡[14]（三若町）・帰海寺谷遺跡[15]（海渡町）・井上佐渡守土居屋敷遺跡[16]（畠敷町）など，墳墓としては大仙大平山第21号古墳下層遺跡[17]（向江田町）・同第22号古墳下層遺跡[18]（同）・陣床山遺跡[19]（三若町）・花園墳墓群[20]（十日市南町）・矢谷墳丘墓[21]（東酒屋町）などがある。竪穴住居跡は平面円形で，主柱は２本・４本と５本以上の多柱穴のものがある。大仙大平山第21号古墳下層遺跡・同第22号古墳下層遺跡・陣床山遺跡は，いずれも古墳墳丘築造に先行する墓坑群で，前２者は箱式石棺や石蓋土坑が主体で，ガラス製小玉・鉄器が出土している。後者は木棺墓・土坑墓計11基で構成される。なお，大仙大平山第22号古墳下層遺跡の墓坑群は２基の土器棺墓を含み，その甕の特徴から後期前半頃のものと考えられている。花園墳墓群は弥生時代後期頃の墳丘墓２基と溝で区画された６つの墓域からなる墳墓群で，箱式石棺・石蓋土坑・木棺・土坑など検出した墓坑の総数は400～500基を数える。矢谷墳丘墓は弥生時代終末期の四隅突出型墳丘墓で前方後方形を呈し，木棺墓８基など計11基の埋葬施設が存在する。周溝からは墳丘上に立てられて墓葬祭祀に用いられたと思われる多量の土器群が出土し，これらのなかには山陰的な鼓形器台や壺などとともに吉備地域から運び込まれたと考えられる特殊器台・特殊壺があり，注目される。

古墳時代　この時代の遺跡としては古墳，集落跡などがある。

前半期の古墳としては，下山手第４・５号古墳[22]（向江田町），四拾貫小原第８[23]・19号古墳[24]（四拾貫町），上四拾貫第４・６・10号古墳[25]（同），四拾貫太郎丸第２号古墳[26]（同），宗祐池西第20号古墳[27]（南畑敷町），畑原開山第９号古墳[28]（大田幸町），上定第25号古墳[29]（同），大久保第５号古墳[30]（西酒屋町），酒屋高塚古墳[31]（同），大坂第６号古墳[32]（同），花園第19・20号古墳[33]（十日市南町），鞍ヶ谷北第１～３号古墳[34]（青河町）などがある。大半は５世紀～６世紀前半頃のもので，４世紀代に遡る古墳でその内容が明確なものは現状では殆どない。これらの多くは直径10数ｍの円墳の墳頂部に東西軸の埋葬施設２～３基を南北に並列させている。埋葬施設は竪穴式石室・箱式石棺・粘土槨・木棺・土坑といった竪穴系のものである。副葬品は竪穴式石室や粘土槨は鏡・鉄剣・鉄斧・鉄鏃・刀子や玉類など質・量ともに比較的豊富だが，箱式石棺・土坑などは小型の鉄製農工具（鎌・刀子など）＋玉類を主とした質量ともにやや劣るか全くもたないものが多い。副葬品が比較的豊富な古墳としては，大久保第５号古墳（粘土床＋割竹形木棺），酒屋高塚古墳（竪穴式石室２基），四拾貫小原第19号古墳（粘土槨３基），上四拾貫第６号古墳（木棺），四拾貫太郎丸第２号古墳（竪穴式石室）などがある。

下山手第４・５号古墳は馬洗川北岸の丘陵上に円墳（第４号古墳）と長方形墳（第５号古墳）が並んで造られている。時期的に先行する第５号古墳（４世紀末～５世紀初頭）は墳頂部に３基の箱式石棺を築き，第４号古墳（５世紀前半～中葉）は墳丘中腹と裾に葺石を２段めぐらせ，墳

頂には中心主体の木棺墓とその頭部側に軸を直交させて小型の箱式石棺を築いている。このほか，第４号古墳の墳丘斜面や墳丘裾，両古墳の間などに石蓋土坑・木蓋土坑計６基を築いている。鞍ヶ谷北第１～３号古墳は可愛川東岸の丘陵端部に築かれた５世紀～６世紀前半築造の円墳３基で，いずれも墳丘中腹に葺石がみられる。第１・２号古墳は墳頂に東西軸の埋葬施設２基（箱式石棺・木棺墓）を南北に並列させている。第３号古墳は東西軸の箱式石棺１基を築く。上定第25号古墳は美波羅川西岸の丘陵上にある５世紀末～６世紀初頭に築造された径11mの円墳で，墳頂に東西軸の竪穴式石室を，墳丘裾などに竪穴式石室や小型箱式石棺３基を築く。墳頂部の埋葬施設からは鉄鏃・鉄刀が，周溝からは滑石製双孔円板が出土した。５世紀～６世紀中葉頃に築造された大坂（だいさか）第６号古墳では，円筒埴輪片を敷いた石棺状の埋葬施設の床面から土製小玉28点が出土した。

横穴式石室を埋葬施設とする古墳は当地域では６世紀前半～半ば頃には出現したとみられるが，調査例はいずれも６世紀後半以降に築造されたものである。陣床山第５[35]・６号古墳[36]（三若町），寺側（てらがわ）古墳[37]（同），大仙大平山第22号古墳[38]（向江田町），札場（ふだば）古墳[39]（後山町），久々原（くぐはら）第10号古墳[40]（西酒屋町），高平第１・２号古墳[41]（十日市南町），宗祐池西第21号古墳[42]（南畑敷町），岩脇大久保第１号古墳[43]（粟屋町）などがある。丘陵尾根斜面に立地し，等高線に並行に開口するものと尾根端部に立地して尾根線に直交する方向に開口するもの（石室が横方向に開口するもの）が多く，丘陵尾根端部に立地して尾根線の方向に開口するものや斜面に立地して等高線に直交する方向に開口するもの（石室が縦方向に開口するもの）は少ない。床面に敷石を施すもの（陣床山第５・６号古墳，札場古墳，寺側古墳），須恵器の杯蓋・杯身などを敷き並べるもの（大仙大平山第22号古墳，久々原第10号古墳など），棺台石と一定数の鉄釘の出土から木棺の存在が窺えるもの（久々原第10号古墳，高平第１・２号古墳，宗祐池西第21号古墳，岩脇大久保第１号古墳）がある。なかでも，寺側古墳は敷石と立石で箱式石棺状の埋葬区画を７つ設けており注目される。

古墳時代，特に前・中期の集落跡の調査例は少ない。三段畑遺跡[44]（糸井町）では古墳時代初頭の６本柱の円形住居跡を検出した。帰海寺谷遺跡（海渡町）は大きく蛇行する美波羅川東岸の低丘陵上にある５世紀初頭～６世紀初頭頃の集落跡で，一辺４m程度の方形住居５軒を検出した。２本柱のものと４本柱のものがある。前者のうちのＳＢ４は６世紀初頭の竪穴住居跡で，当地域では最古の部類に入る造り付けのカマドをもつ住居である。馬洗川南岸の丘陵に立地する高蜂遺跡では，丘陵頂部の平面方形の竪穴住居跡３軒はいずれも２本柱構造で５世紀後半に建てられ，南斜面の平面長方形の住居跡３軒はいずれも造り付けのカマドをもつ４本柱の住居で，６世紀後半に建てられたと考えられる。水田地帯に立地する深茅（ふかがや）遺跡[45]（和知町）では，４本柱の方形住居跡４軒と２本柱の長方形住居跡１軒を検出した。６世紀後半以降の竪穴住居跡は一辺４～５mの平面隅丸方形・方形・長方形で，主柱は４本を中心に２本や無柱のものも存在する。また，多くの住居には造り付けのカマドがみられる。大歳（ださい）遺跡[46]は可愛川に注ぐ板木川南岸の丘陵裾に立地する６世紀中葉～７世紀中葉の集落跡で，鍛冶滓・製錬滓を出土する住居があり，周辺に製錬炉の存在が想定される。山手遺跡[47]は美波羅川西岸の丘陵裾の水田地帯にあり，６世紀後半の竪穴住居

跡の１軒は焼失家屋で，壁溝上に板石を掛け渡している。６世紀後半の竪穴住居跡３軒を検出した緑岩遺跡では１軒の住居跡から鍛冶炉を検出している。松ヶ迫遺跡群は丘陵斜面に築かれた６世紀から７世紀代の長期間に亘り営まれた大規模な集落跡である。Ｂ・Ｆ地点[18][19]はいずれも丘陵斜面を階段状に削平した平坦面に竪穴住居跡や掘立柱建物跡・建物状遺構などを多く築いている。いずれも頻繁な建て替えを行っており，住居や建物の総数は30～50軒程度と多いが，同時存在した住居はほぼ６～８軒程度と中程度の集落規模である。なお，矢谷墳丘墓の近くの丘陵斜面では，６世紀後半の須恵器窯跡２基とこれに付設する工房的性格の住居跡状遺構２軒を検出した[50]。

古代　三次の地名が史料に現れる最古の例は，天平５（733）年に成立した『出雲国風土記』飯石郡条である。旧三次市域周辺には古代の三次郡（５郷）・三谷郡（５郷）・高田郡（７郷）が存在するが，「和名類聚抄」によれば，これらのうち三次郡上次・下次・播次郷，三谷郡三谷・江田郷，高田郡粟屋郷などが旧三次市域に含まれる。

古代の遺跡としては，官衙跡・寺院跡・窯跡などがある。県史跡下本谷遺跡[51]（西酒屋町）は三次市街地の南に広がる丘陵上に立地する官衙跡で，古代三次郡の郡衙跡と考えられている。７世紀後半～９世紀代の四時期にわたる変遷がみられる。コ字状に並ぶ建物群が想定され，正殿とみられる中心建物は四面庇建物→二面庇建物→側柱建物と変遷するが，基本的な建物配置はあまり変わらなかったと考えられている。寺院跡では史跡寺町廃寺跡[52]（向江田町）と上山手廃寺跡[53]（同）がある。寺町廃寺跡は馬洗川北岸の丘陵地帯の小支谷奥南斜面に立地する。仏教説話集『日本霊異記』記載の三谷寺にあたるとされ，西に金堂，東に塔，その背後の中央に講堂を配した法起寺（ほっきじ）式の伽藍配置が想定される。多量の瓦塼類や三彩が出土し，７世紀後半～末に創建されたと考えられる。この南西1.2kmの馬洗川北岸の段丘上に立地する上山手廃寺は，西に金堂，その北東に講堂を配する伽藍配置で，多量の瓦塼類や三彩（盤）などが出土した。７世紀末頃に創建されたとみられる。この上山手廃寺と寺町廃寺は同笵の軒丸瓦の存在，伽藍配置・基壇規模・基壇構造などの類似など多くの共通点をもつことから，三谷郡の大領層を施主に同一の設計・施工管理のもとに造営された可能性が高い。なお，馬洗川支流の国兼川東岸の丘陵斜面に築かれた大当（だいとう）瓦窯跡[54]（和知町）は，奈良～平安時代の寺町廃寺に瓦を供給した瓦窯と考えられている。

羅漢（らかん）遺跡群[55]（和知町）は国兼川西岸の丘陵尾根上に立地する11世紀代の祭祀遺跡で，正方形の石敷遺構を検出し，緑釉陶器（耳皿）などが出土した。岡西Ｆ地点遺跡Ｉ地区[56]（上志和地町）では平安時代中期頃の木棺墓を検出している。

中世　三次盆地周辺にはその実態が判明する公領・荘園は殆どない。当地域の中世の歴史は，三次郡の三吉（みよし）氏，三谷郡の広沢氏（のち和智（わち）・江田（えた）氏）の両氏の動向にほぼ現されているが，それも南北朝期以降に限られ，鎌倉時代の当地域の様子は殆どわからない。鎌倉幕府の御家人である武蔵国広沢氏は，12世紀末～13世紀前半に三谷郡ほぼ全域を所領化したと考えられる。そして，『とはずがたり』の記述によって，鎌倉時代末期の14世紀初頭には三谷郡和知（わち）郷・江田郷周辺に居住し，すでに和智・江田両氏を分出していたことが確認できることから，13世紀後半頃には武蔵国から三谷郡に移住していたとみられる。和智氏は南北朝時代に拠点を和知郷から南の平松山（ひらまつやま）

城・南天山城（吉舎町）に移している。和智氏は1333（元弘３）年の後醍醐天皇挙兵に際して三吉氏・江田氏らとともに馳せ参じているが，その後室町時代にかけて尊氏方（幕府方）と直義・直冬方（南朝方）の間で離合を繰り返す。やがて，所領の「三谷西条」（三谷郡西半の和知郷・江田郷あたり）の地をめぐり幕府と対立するものの，最終的には幕府方に転じている。三吉氏については，出自や鎌倉時代以前の動向は不明で，南北朝期以降歴史の表舞台に現れ，旧三次郡の比叡尾山城（畠敷町）を拠点として活動する。当初は和智氏同様，反幕府的な動きをみせるが，やがて幕府方となり15世紀代には幕府奉公衆に名を連ねるようになる。その後，三吉氏・和智氏は15世紀末の応仁･文明の乱やその後しばらくは，江田氏や山内・宮氏らとともに備後北部（内郡）の国人衆として備後国守護山名氏に属して芸備地域や播磨地域などを転戦するが，やがてこの山名氏を取り巻く状勢が泥沼化するなか，芸備地域に西から大内氏が，北から尼子氏が進出してくる。三吉氏・和智氏・江田氏はほかの備後国人衆と同じく，尼子氏と大内氏との間で離合を繰り返す状況が続く。そして，1527（大永７）年に当地域を主戦場にした尼子氏と大内・毛利氏の激突が起こる（和智細沢山合戦）。この戦いで，和智氏は尼子氏から大内氏方に転じ，江田氏は大内方，三吉氏は尼子方に与したとみられる。この戦はかなり激しいもので，戦火は三吉氏の比叡尾山城下にまで及んだ。その後，郡山合戦で尼子氏を敗走させた余勢をかって，大内氏は出雲遠征を行うがここで富田月山城の攻略に失敗し，これを機に急激に勢力を衰退させる。一方，大内氏に代わって芸備地域における盟主化への道を開いた毛利氏はやがて大内氏，尼子氏を滅ぼして中国一円の領主となり，三吉氏・和智氏はその家臣団に組み込まれることになる。

中世の遺跡としては，山城跡・居館跡・祭祀跡などがある。山城跡としては，比叡尾山城跡（畠敷町），比熊山城跡（三次町），旗返山城跡（三若町），高杉城跡（高杉町），加井妻城跡[57]（粟屋町），陣山城跡[58]（和知町），古城山城跡[59]（同）などがある。比叡尾山城跡は三吉氏の居城で，主郭から南に長く階段状に郭を連ね，谷を隔てた東側にも南北に細長く並ぶ小郭群が存在する。石垣・土塁や竪堀・堀切が配置され，井戸・門跡なども残る。南麓には今市・五日市などの地名が残り，家臣の館跡も存在し，城下町の体をなしていたと思われる。三吉氏は戦乱が厳しくなった戦国末期には居城を西方の比熊山城に移している。この城跡は三次町の北に聳える山塊の頂部に築かれたもので，東西方向に長い巨大な主郭を中心にした郭の配置で，主郭の東には南北に連なる小郭群，北には東西方向に延びる未完成の郭群が配されている。主郭の一角には高さ３ｍの天主台的な小郭や祭祀的な遺構が存在する。旗返山城跡は1553（天文22）年，毛利氏によって滅ぼされた江田氏の居城で，北流する美波羅川西岸の山頂部を中心に築かれている。北を除く三方が急峻な斜面の要害の地で，頂部に北・西に土塁を設けた主郭を築き，ここから南～南東方向にＬ字状に郭を連ねている。主郭の北に続く鞍部には堀切と竪堀を複雑に配する。高杉城跡はやはり1553（天文22）年，毛利氏によって滅ぼされた祝（武田）氏の居城で，馬洗川南岸の水田地帯に築かれた平城である。現状は知波夜比古神社境内の平坦地とこれを取り囲む土塁・堀を残すだけだが，元は三重の空堀で囲まれたより広い範囲が城域であったと考えられている。加井妻城跡，陣山城跡，古城山城跡はいずれも中国自動車道建設に伴ってその一部が発掘調査されている。加

井妻城跡は北流する可愛川に西から支流上村(かむら)川が流入する合流点の南岸の急峻な丘陵端部に築かれた15世紀後半～16世紀代の城跡で，三吉氏が領地の西端に築いた「界詰(かいづめ)」の城と考えられている。城は南から北に延びる丘陵尾根上に階段状に郭を連ね，最高所の郭は背後（南側）に土塁を介して直線的な堀切を設けている。最下段の７郭は最大規模の郭で，４～５軒分の建物や柵列の存在が想定されている。小規模な建物２棟が想定される９郭では，飛礫とみられる握り拳大の河原石の集積や野鍛冶の存在を窺わせる多量の鉄滓の出土がみられた。陣山城跡は南流する国兼川西岸の丘陵尾根端部の頂部を中心に築かれている。最高所の主郭（１郭）の中央に建物１棟と西辺に簡易な土留めとみられる石列がある。その北西側にある２郭は土塁をもち，建物２棟が存在する。２郭の北西側には尾根鞍部を断ち切るように堀切４条と竪堀２が設けられている。この城については，西の国広山を中心に広範囲に存在する山城遺構の一部と考え，和智細沢山合戦時に尼子方が在陣した城郭群の一部と考えられる。この１km東の丘陵端部に位置する古城山城跡は，堀切・土塁で画した範囲に３つの郭を階段状に配している。自然地形を利用した単純な縄張りで，広沢氏が武蔵国から移住してきた頃の築城の可能性がある。

井上佐渡守土居屋敷跡[60]（畠敷町）は比叡尾山城の南東１kmの低丘陵端部に築かれた館跡で，一部が発掘調査され，掘立柱建物跡１棟・井戸・溝・堀などを検出した。山崎遺跡[61]（大田幸町）は美波羅川西岸の低丘陵に立地する古代～近世の集落跡で，Ｂ区で中世の掘立柱建物跡６棟，井戸跡２基の他に埋納土坑を検出した。この埋納土坑は平面楕円形の浅いもので，内部から土師質土器・皿20数点，古銭27点と墨書をもつ径10.8cmの円札２枚に挟まれた和鏡（蓬莱鏡）１枚が出土した。円札には円符，呪符，符録，人名，干支，梵字など多種多様な内容の墨書がなされており，この埋納土坑は何らかの呪術行為に関わるものと考えられている。

註

（1）広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』 1980年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第２次発掘調査概報』 1981年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第４次発掘調査概報』 1983年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第５次発掘調査概報』 1984年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第６次発掘調査概報』 1985年
三次旧石器文化研究会『下本谷遺跡の基礎的研究』 2007年

（2）平成18・19（2006・2007）年度に財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

（3）註（2）に同じ。

（4）広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「Ｂ地点遺跡」『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』1981年

（5）広島県教育委員会「緑岩遺跡」『緑岩古墳』 1983年

（6）註（5）に同じ。

（7）広島県教育委員会「高蜂遺跡」『緑岩古墳』 1983年

（8）広島県教育委員会「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第９集　1971年

（9）広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「Ｃ・Ｄ地点遺跡」『松ヶ迫遺跡群発掘調査報

告』 1981年
(10) 四拾貫小原発掘調査団『四拾貫小原』 1969年
(11) 三次市教育委員会『陣山遺跡』 1996年
(12) 三次市教育委員会「宗祐池西遺跡」『宗祐池西遺跡』 2000年
(13) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター「殿山墳墓群の調査」『大判・上定・殿山』 1987年
(14) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター「住田遺跡」『県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1997年
(15) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター「帰海寺谷遺跡」『県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1997年
(16) 三次市教育委員会『井上佐渡守土居屋敷跡』 1998年
(17) 三次市教育委員会「大仙大平山第21号古墳」『大仙大平山第21・22号古墳』 2000年
(18) 三次市教育委員会「大仙大平山第22号古墳」『大仙大平山第21・22号古墳』 2000年
(19) 陣床山遺跡群発掘調査団「陣床山土壙墓群」『陣床山遺跡群の発掘調査』 1973年
(20) 三次市教育委員会『史跡花園遺跡－調査と整備－』 1979年
三次市教育委員会『史跡花園遺跡－第二次調査と整備－』 1980年
(21) 註（9）に同じ。
(22) 三次市教育委員会『下山手第４・５号古墳』 1994年
(23) 三次市教育委員会『三次市四拾貫小原第８号古墳発掘調査概報』 1974年
(24) 四拾貫小原発掘調査団「第１号古墳」『四拾貫小原』 1969年
(25) 広島県教育委員会「上四拾貫古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 1978年
(26) 本村豪章「備後三次市太郎丸古墳調査報告」『古代吉備』第４集　古代吉備研究会　1961年
(27) 三次市教育委員会「宗祐池西第20号古墳」『宗祐池西遺跡』 2000年
(28) 本村豪章「備後三次市畑原開山９号古墳」『古代吉備』第５集　古代吉備研究会　1963年
(29) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター「上定古墳群の調査」『大判・上定・殿山』 1987年
(30) 広島県教育委員会「大久保遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2） 1979年
(31) 広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』 1983年
(32) 大坂遺跡発掘調査団『大坂遺跡』 1985年
(33) 花園古墳群発掘調査団『花園古墳群』 1976年
(34) 広島県教育委員会「鞍ヶ谷北古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2） 1979年
(35) 陣床山遺跡群発掘調査団「陣床山第５号古墳」『陣床山遺跡群の発掘調査』 1973年
(36) 陣床山遺跡群発掘調査団「陣床山第６号古墳」『陣床山遺跡群の発掘調査』 1973年
(37) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『寺側古墳』 1995年
(38) 註（18）に同じ。
(39) 財団法人　広島県教育事業団「札場古墳」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（７） 札場古墳　大平遺跡　後山大平古墳』 2009年
(40) 広島県教育委員会「久々原第10号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2） 1979年
(41) 註（8）に同じ。
(42) 三次市教育委員会「宗祐池西第21号古墳」『宗祐池西遺跡』 2000年
(43) 三次市教育委員会「岩脇大久保第１号古墳」『岩脇大久保第１号古墳・岩脇大久保遺跡』 1991年

(44) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『三段畑遺跡』 1990年
(45) 1984年に三次市教育委員会などで構成される調査団により発掘調査が実施された。
(46) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『大歳遺跡』 1994年
(47) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター「山手遺跡」『県営ほ場整備事業（川西東部・南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1997年
(48) 註（4）に同じ。
(49) 広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「F地点遺跡」『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』 1981年
(50) 註（9）に同じ。
(51) 下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡－推定三次郡衙跡の発掘調査報告－』 1975年
広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』 1980年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第2次発掘調査概報』 1981年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第3次発掘調査概報』 1982年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第4次発掘調査概報』 1983年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第5次発掘調査概報』 1984年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第6次発掘調査概報』 1985年
(52) 三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第1次発掘調査概報－』 1980年
三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第2次発掘調査概報－』 1981年
三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第3次発掘調査概報－』 1982年
(53) 広島県教育委員会『上山手廃寺発掘調査概報』（1） 1979年
広島県教育委員会『上山手廃寺発掘調査概報』（2） 1980年
広島県教育委員会『上山手廃寺発掘調査概報』（3） 1981年
(54) 三次市教育委員会「大当瓦窯跡の調査」『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第3次発掘調査概報－』 1982年
三次市教育委員会『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第4次発掘調査概報－』 1983年
(55) 広島県教育委員会「羅漢遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 1978年
(56) 三次市教育委員会『岡西G地点遺跡Ⅰ地区・岡西F地点遺跡Ⅰ地区発掘調査報告書』 1996年
(57) 広島県教育委員会「加井妻城跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2） 1979年
(58) 広島県教育委員会「陣山城跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 1978年
(59) 広島県教育委員会「古城山城跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 1978年
(60) 註（16）に同じ。
(61) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『山崎遺跡』 1994年

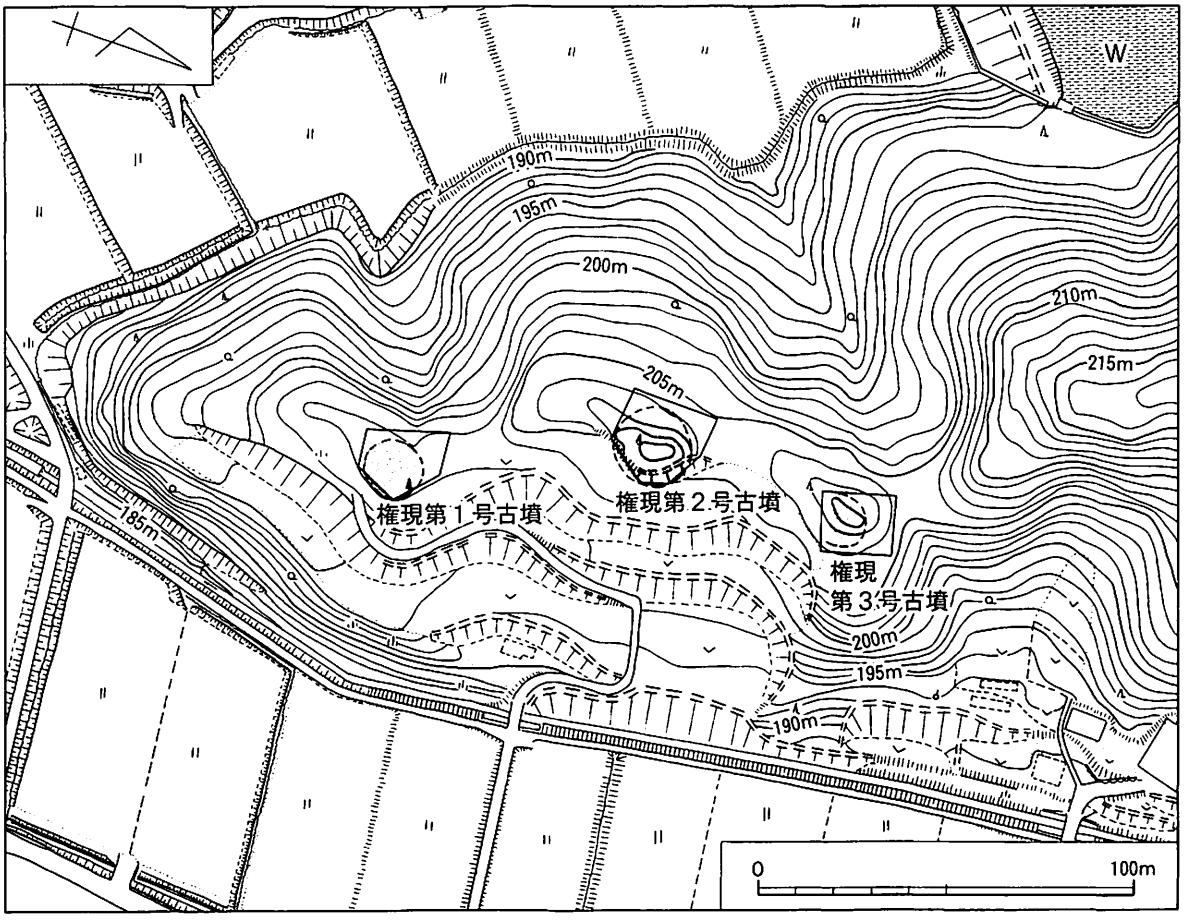
参考文献

・広島県双三郡　三次市史料総覧編集委員会『広島県双三郡　三次市史料総覧』第五篇　広島県双三郡　三次市史料総覧刊行会　1974年
・広島県『広島県史』地誌編　1977年
・広島県『広島県史』中世　通史Ⅱ　1984年
・三次市『三次市史』Ⅰ　2004年
・三次市『三次市史』Ⅱ　2004年

Ⅲ　調査の概要

権現第１～３号古墳は三次市向江田町字権現に所在する箱式石棺を埋葬施設とする古墳である。三次市中央部の，東から西に流れる江の川水系馬洗川北岸に位置する。古墳群は，幅100～300mほどの狭小な平野部を東に望む北から南に細長く延びる丘陵頂部に８基築かれており（標高204～210m，水田面からの比高約20m），第１～３号古墳は南半の丘陵先端側に立地する。

調査は，各古墳の墳丘に十字に土層観察用の畦を残して行った。南端に位置する第１号古墳は径14mほどの円墳で，周溝はもたない。埋葬施設は墳頂部に空けられた中世頃の攪乱坑によって失っていた。第１号古墳の北50mにある第２号古墳は径20mと規模の大きな墳丘をもつ円墳だが，やはり周溝をはじめ外表施設はもたない。墳頂部に計５基の箱式石棺が築かれており，最大規模のＳＫ１は礫床をもつ。ＳＫ１・４からは小型鉄器（鎌・刀子）や玉類（勾玉・管玉・臼玉）が出土した。第２号古墳の北36mに位置する第３号古墳は墳丘が明確ではないが，径10m程度の円墳の可能性がある。墳頂部で小型の箱式石棺２基を検出した。これらからは刀子や玉類（勾玉・有孔楕円形石製品・管玉・棗玉・臼玉）が出土した。



第３図　権現第１～３号古墳周辺地形図（1:2,000）（アミ目は古墳を示す。）

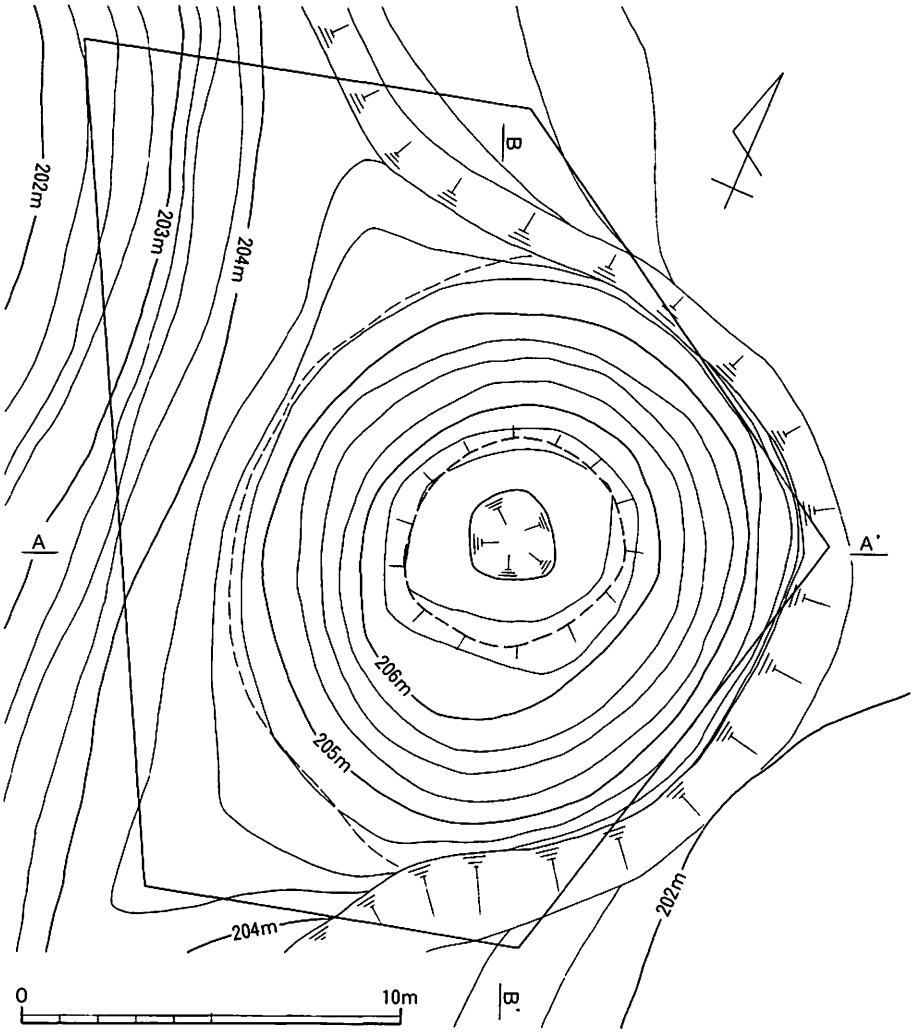
Ⅳ　遺構と遺物

1．権現第１号古墳

（1）立地と調査前の状況（第３・４図，図版１ａ・１ｂ・２ａ）

権現第１号古墳は丘陵南端の頂部に立地する，径13m，高さ（現状）２mの円墳である（標高204～206m）。古墳が存在するあたりの丘陵頂部は幅20～30mとごく狭い（標高204m）。丘陵南端までは６mと近く，周辺の水田からの高さは13～20mである。

調査前の状況は山林で，明確に円形の墳丘を捉えることができた。墳丘の西側を細い山道が北側の第２号古墳に向かって延びており，その西側にはやや急な斜面が水田面へとのびている。一方，墳丘の東辺は後世の開墾によって１m以上掘削され，畑地とされていた。墳頂部は径５～６mの平坦面で，中央には一辺2.2m，深さ70cmほどの方形の盗掘坑が存在した。この盗掘坑については，地元の古老の話によれば，昭和30年代頃に掘り反されたもので，刀や焼き物などがみつ



第４図　権現第１号古墳調査前地形測量図（1:200）

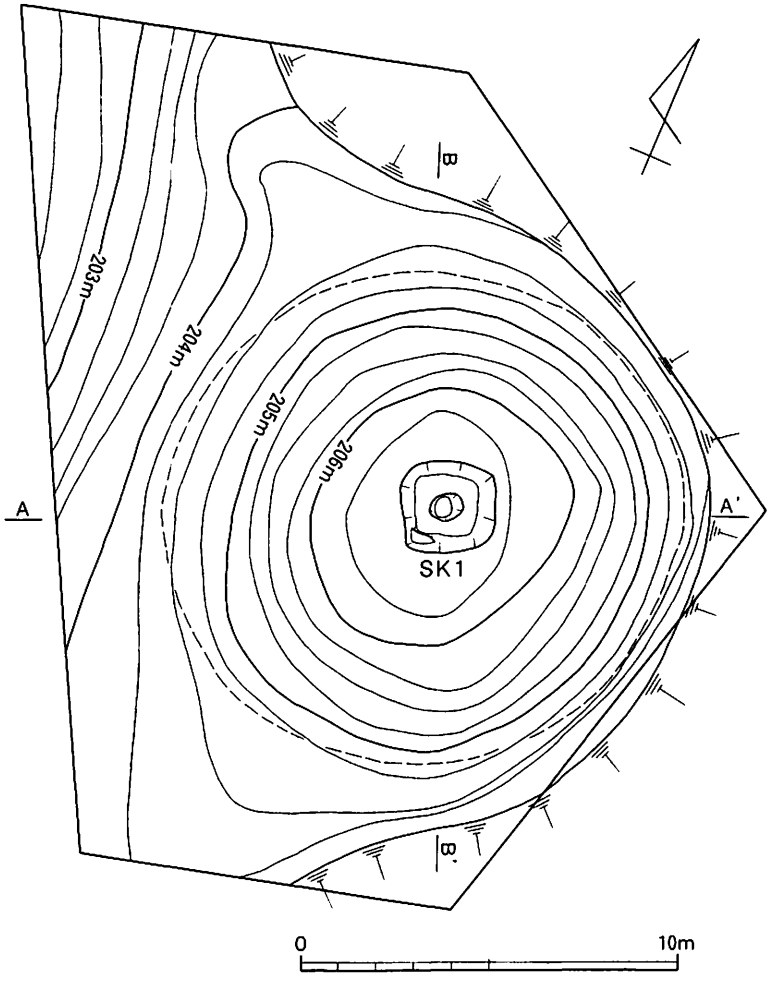
かった，と云う。

（2）墳丘（第４～６図，図版２ｂ・２ｃ・３ａ～４ａ）

厚さ数～10数cmの表土を除去すると，墳頂部を中心に東西7.8m，南北6.8mの範囲に密に小円礫が堆積する状況がみられた。礫は数cm大の扁平気味の円礫で，この礫層（厚さ20～30cm）の下に墳丘が存在した。

本古墳には周溝や葺石など墳丘に伴う外表施設は存在しない。旧地形の丘陵頂部を削平して設けた基盤の上に盛土を行って墳形を整えたものである。盛土は現状で厚さ（最大）90cmで，盛土下には旧表土（暗褐色土，厚さ６～27cm）が東西12.9m×南北11.3m（現状）の範囲にほぼ安定してみられる。このことから，第１号古墳の墳丘は標高205.5mのあたりを頂部とする旧地形の丘陵上に盛土して築かれたことになる。

盛土に使われた土壌は，色調的には色の薄い淡黄褐色土（盛土Ⅰ），山吹色の明黄褐色土（盛土Ⅱ），暗黄褐色土（盛土Ⅲ）が主体で，土質的には白色土・黄色土・明黄色土などの小ブロックを多く含む盛土Ⅱ・Ⅲとあまり多く含まない盛土Ⅰに分けることができる。盛土Ⅰ＝８・８′・９・

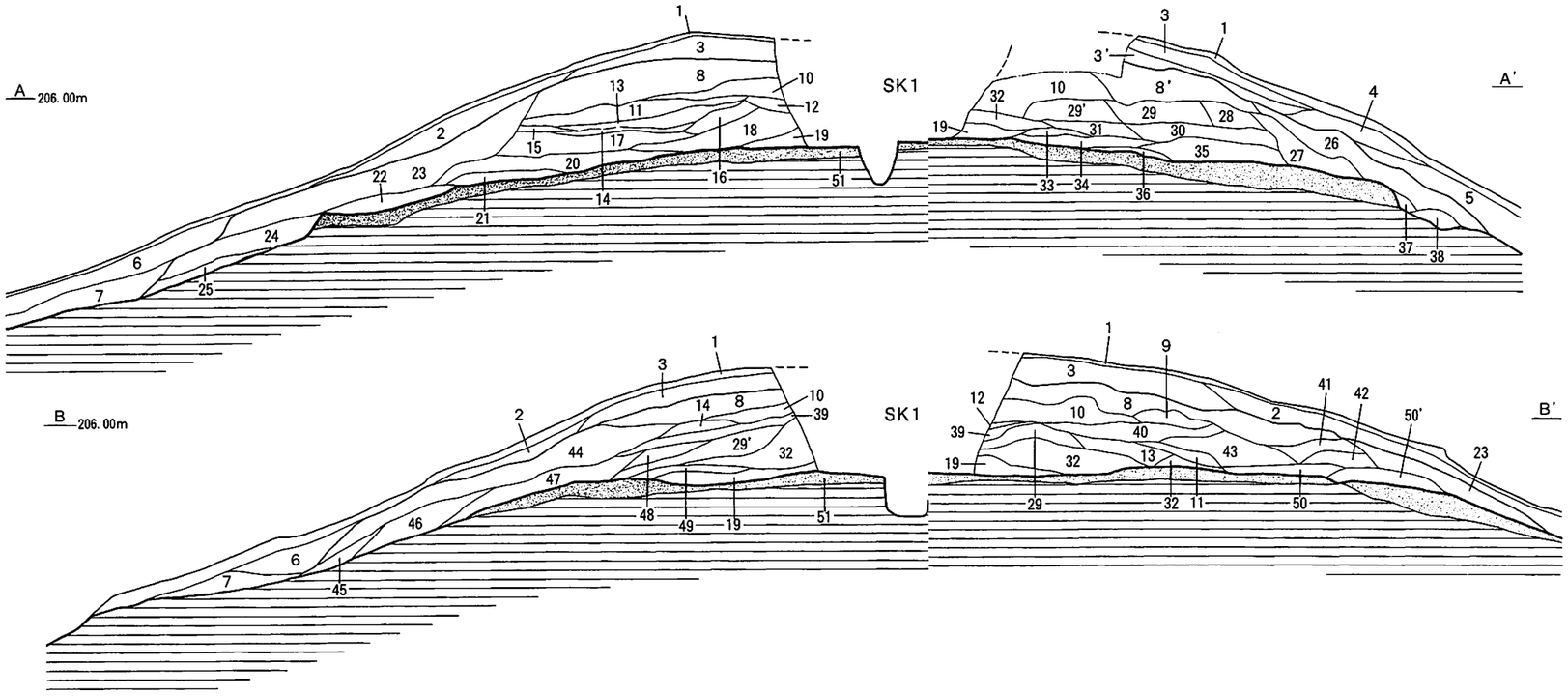


第５図　権現第１号古墳墳丘測量図（1:200）

16～18・35・36・48層，盛土Ⅱ＝10・13・19・29′・32・39，盛土Ⅲ＝11・14・20・21・28・30・31・33・34・40～43・49・50がそれぞれ該当する。墳丘中央の旧表土の基盤の上に盛土Ⅱを主体に一部盛土Ⅲ・Ⅰを互層状に挟み込むように積んで，径6.3m，厚さ0.7mの小山状の核を形成し，それを覆うように墳丘外寄りに盛土Ⅲを土手状に盛る。ただ，この墳丘の核の周縁に被覆するように行われる土手状の盛土は，第２号古墳のようには顕著ではなく，墳丘南側を中心にみられるものの，その他ではそれほど明確ではない。これら盛土Ⅱ・Ⅲを主体とする墳丘中・下層の盛土の上面は緩やかな曲線を描き，水平ではないが，これらの上に盛土Ⅰが被覆され，恐らく埋葬施設の構築が行われたと考えられる。また，墳丘斜面は一定の厚さの暗黄褐色土で覆われ，墳丘の築成が完成する。墳丘の核を形成する盛土Ⅱは，第２号古墳の墳丘の最上層に被覆された盛土Ａと酷似する明るい山吹色的な明黄褐色土で，盛土Ⅰは第２号古墳の盛土Ｂ，盛土Ⅲは同じく盛土Ｃに土質・色調が酷似している。盛土に使われた土は全体として粒子が細かくサラサラとし，色調も比較的精美である。これらのことから，これらの土が無作為に採取されたものではなく，良好な土質・色調の土壌をある程度意識的に選別して採取し，これらを盛ったものと考えられる。これら盛土に用いられた土壌の多くが，旧表土の暗褐色土の下位にある明黄褐～灰白色土を主に採取したものであることは，盛土に多少に拘らず含まれている黄色土・白色土・明黄色土の小ブロックの存在からも明らかである。そして，墳丘直下に旧表土が安定して残存することから考えて，盛土用の土が墳丘の周囲，特に尾根線上を中心に恐らく１m程度掘り下げて採取されたもので，この土木行為が一方で墳丘の基壇の形成をも兼ねたものであることが分かる。後述するように，中世後期における墳頂部の改変によって一定度の墳丘の損壊が考えられ，盛土の厚さは現在では１mにも満たないが，この地山掘削によって確保された墳丘基盤の上に盛土することで，墳丘の高さは南北の墳裾から1.67～1.77m，東西の墳裾から2.1～2.27mと２m程度，すなわち盛土の実際の厚さの２倍以上に高くみえたことであろう。

（３）ＳＫ１（第７図，図版４ｂ）

第１号古墳の埋葬施設は墳頂部における後世の削平によって失っており，検出することはできなかった。墳頂部の中央には１辺２mほどの方形の盗掘坑が空いており，この盗掘坑の下には平面的にほぼ同規模の方形の土坑（ＳＫ１）が存在した。盗掘は恐らくこのＳＫ１の上半を掘り返したものと考えられるが，盗掘坑の底からさらに50cmほど掘り下げるとＳＫ１の底面に達する。ＳＫ１の少なくとも下半の埋土は古墳の墳丘上に堆積していたものと同じ扁平な小円礫が隙間なくぎっしりと詰まった暗黄褐色土である。このことから，墳丘上の礫層はこのＳＫ１から盗掘時に掻き出されたものの再堆積である可能性が考えられる。ＳＫ１の底面にはほぼ全体に細かい炭が敷き詰めてあるものの，南西隅を除く三方の隅には炭が存在しない部分がみられた。熱を受けた形跡はまったく認められないことから，ＳＫ１内部で焼成は行われていないと思われる。坑底面中央には東西92cm，南北66cm，深さ40cmの平面楕円形の下部土坑があり，内部には炭や小円礫は存在しなかった（下部土坑の検出面にも炭は敷かれていない）。このＳＫ１の規模は，上面で東



1　表土（黄褐色土）
2　淡黄褐色土
3　淡褐色土（小礫密）
3′淡褐色土（小礫疎）
4　淡褐色土（3層に酷似。小礫は含まない）
5　淡褐色土（3・4層に似るが，締まりがある）
6　黄褐色土
7　暗黄褐色土

墳丘盛土

8　淡黄褐色土（白色土小ブロック含む。Ⅰ系統）
8′淡黄褐色土（Ⅰ系統）
9　暗黄褐色土（Ⅰ系統）
10　淡黄褐色土（白色土小ブロック多く含む。39層と酷似。Ⅱ系統）
11　淡黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。Ⅲ系統）
12　淡黄褐色土
13　黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。29′層に似る。Ⅱ系統）
14　暗黄褐色土（白色土小ブロック含む。Ⅲ系統）
15　明黄褐色土
16　明黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック含む。Ⅰ系統）
17　暗黄褐色土（黄色土小ブロック含む。Ⅰ系統）
18　黄褐色土（白色土小ブロック含む。Ⅰ系統）
19　明黄褐色土（白色土・明黄色土小ブロック多く含む。32層と酷似，やや色がうすい。Ⅱ系統）
20　暗黄褐色土（黄色土小ブロック多く含む。50層に近い。Ⅲ系統）
21　暗黄褐色土（黄色土小ブロック多く含む。20・50層に近い。Ⅲ系統）
22　暗黄褐色土
23　黄褐色土
24　暗黄褐色土（22層に似る。）
25　暗黄褐色土
26　暗黄褐色土
27　暗黄褐色土（26層より黄色味強い）
28　暗黄褐色土（30・31層に似るが，ブロックは含まない。Ⅲ系統）
29　淡黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック含む。Ⅰ系統）
29′黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。13層に似る。Ⅱ系統）
30　暗黄褐色土（白色土小ブロック多く含む。28・30層と酷似。Ⅲ系統）
31　暗黄褐色土（白色土小ブロック多く含む。28・30層と酷似。Ⅲ系統）
32　明黄褐色土（白色土・明黄色土小ブロック多く含む。19層と酷似。Ⅱ系統）
33　暗黄褐色土（白色土小ブロック多く含む。Ⅲ系統）
34　暗黄褐色土（白色土・明黄色土小ブロック多く含む。Ⅲ系統）
35　淡黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック含む。36層に近い。Ⅰ系統）
36　暗黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック含む。35層に近い。Ⅰ系統）
37　淡黄褐色土
38　暗黄褐色土
39　淡黄褐色土（白色土小ブロック多く含む。10層に酷似。Ⅱ系統）
40　暗黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。Ⅲ系統）
41　黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。42層に酷似。Ⅲ系統）
42　暗黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。41層に酷似。Ⅲ系統）
43　黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。41層に酷似。Ⅲ系統）
44　黄褐色土
45　暗黄褐色土（軟質，崩落土か）
46　暗黄褐色土
47　暗黄褐色土
48　暗黄褐色土（黄色土小ブロック含む。Ⅰ系統）
49　暗黄褐色土（黄色土小ブロックやや多く含む。Ⅲ系統）
50　暗黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。20・21層に近い。Ⅲ系統）
50′暗黄褐色土

51　旧表土（暗褐色土）

「墳丘盛土」は大きく3系統に分けられる。
Ⅰ系統＝淡黄褐色土（8・16～18層などで，墳丘上部にある。）
Ⅱ系統＝暗黄褐色土（10・13・19層などで，墳丘中央の中・下層にあたり，白色土・黄色土などの小ブロックを多く含む。）
Ⅲ系統＝暗黄褐色土（11・14・20・21層などで，盛土Ⅱに互層状に挟み込まれるとともに，墳丘周縁寄りの中・下層を形成する。）

0　5m

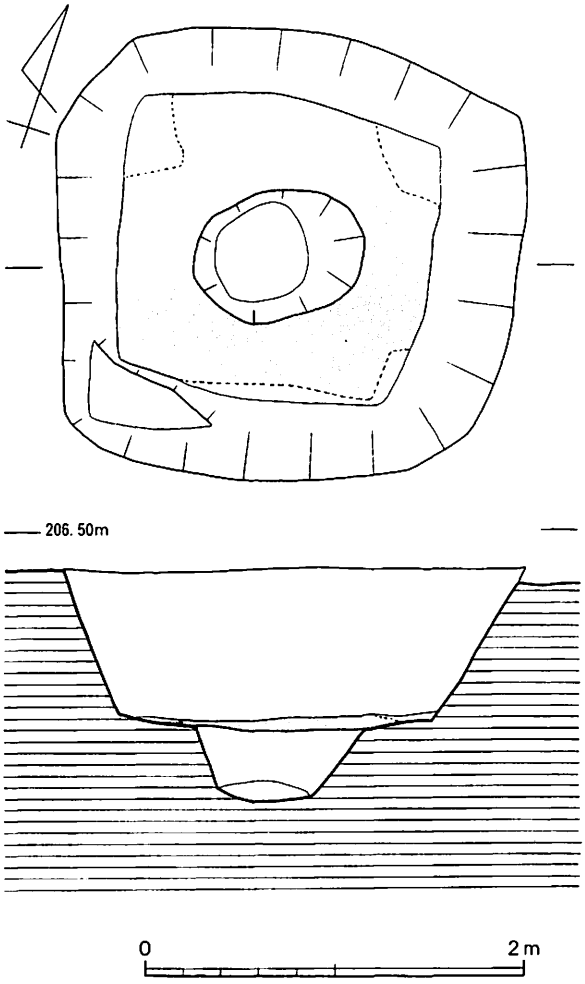
第6図　権現第1号古墳墳丘土層断面実測図（1:60）

西2.46m×南北2.4m，深さ（現状）0.92m（下段土坑底面まで1.32m）である。ＳＫ１内部からは遺物は出土しなかったが，墳頂部に再堆積した礫層から鉄刀片と考えられる鉄片や「罵」字の書かれた小円礫，陶器片などが断片的に見つかっている。このＳＫ１上部にあけられた盗掘坑からの出土遺物とみられるものがみつかった菅田（すがた）遺跡では，「発見当時の伝聞によると，古墳の頂部付近で卵大の円礫を多数集積した中から，青磁の瓶と白磁の杯が見つかった。」とある（伊藤実「菅田遺跡」『三次市史』Ⅱ　遺跡・山城編　2004年）。これらの青磁・瓶と白磁・杯は13～14世紀に中国南部で製作されたものと考えられており，本来的にはＳＫ１に伴う可能性がある。とすれば，ＳＫ１は古墳の高まりを再利用した墳墓あるいは経塚などの内部施設である可能性が考えられるが，明確な出土遺物がない現状では推測の域を出ない。

２．権現第２号古墳

（１）立地と調査前の状況（第３・８図，図版１ａ・１ｂ・４ｃ）

権現第２号古墳は丘陵中央，第１号古墳の北50mに位置する。丘陵頂部に立地し，径20m，高さ３ｍと今回調査を行った３基の古墳のなかでは最大規模の円墳である。第２号古墳が存在するあたりの丘陵頂部は幅50mで（標高206～209m），周辺の水田からの高さは約20mである。



第７図　権現第１号古墳ＳＫ１実測図（1:40）
（アミ目は炭を示す。）

調査前の状況は山林で，明確に円形の墳丘を捉えることができた。墳丘裾の西側を第１号古墳や第３号古墳に向かう細い山道が南北に延びる。墳丘の東側は後世の開墾によって古墳の裾から１～２ｍ切り落とされ，畑地とされていた。調査時には，径６～８ｍの広さの墳頂部は中央から北半にかけて盗掘を受け，蓋石や一部の小口石・側石が大きく損壊を受けた３基の箱式石棺（ＳＫ１～３）が露出していた。

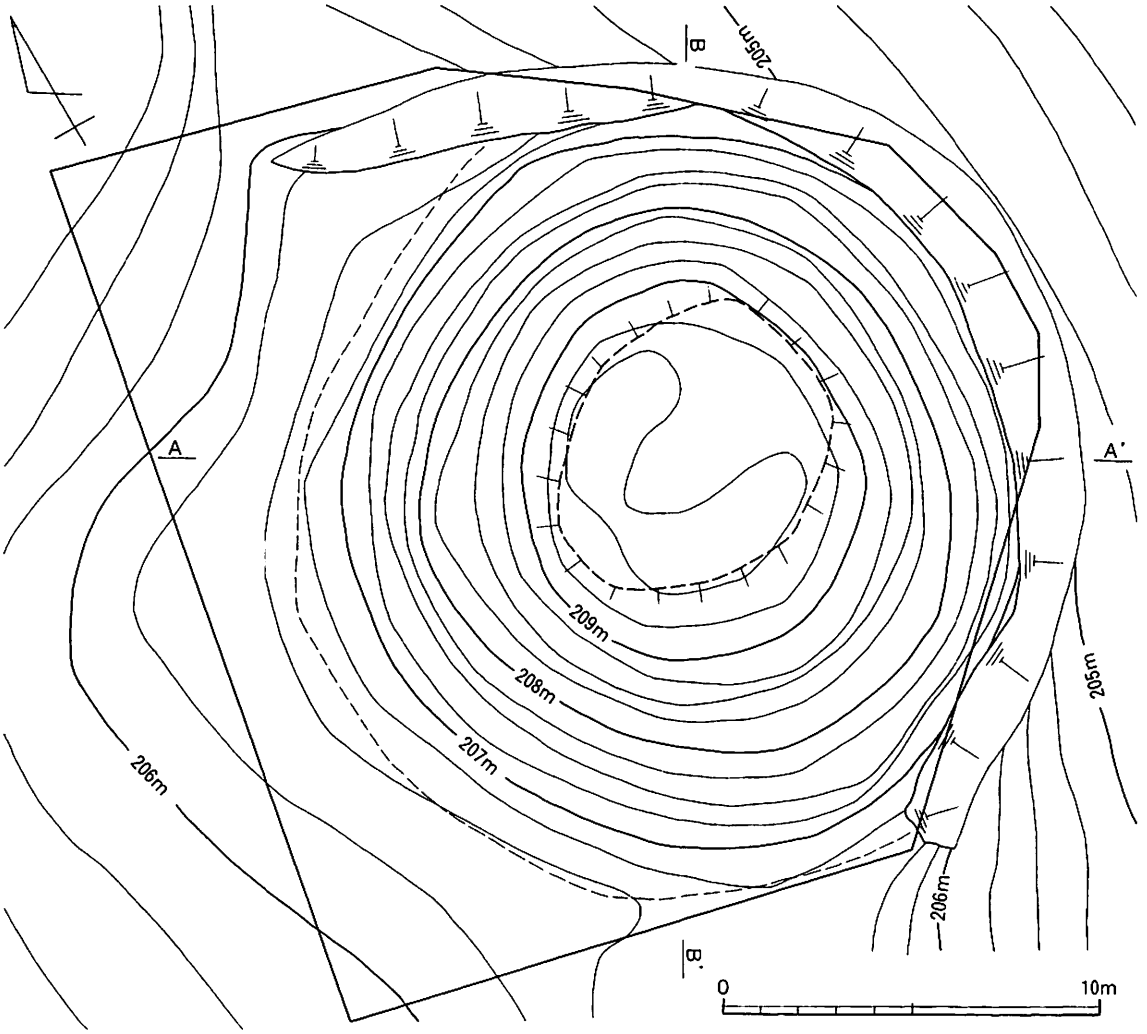
（２）墳丘（第９・10図，図版５ａ～６ｂ）

第１号古墳同様，周溝・葺石などの外表施設はなんら検出されなかった。旧地形の丘陵頂部を一定度削平して設けた基盤の上に盛土を行って墳形を整えたものである。盛土は現状で厚さ（最大）156cmで，盛土下には旧表土（暗灰色土，厚さ最大18cm）がほぼ径12mの範囲に残存する。第１号古墳に比べるとその残りはそれほど良くなく，特に墳丘中央部での残存状況が不良である。旧表土上面の標高は207.6～208.0mで，こ

のあたりを頂部とする丘陵上に第２号古墳は築かれたことになる。

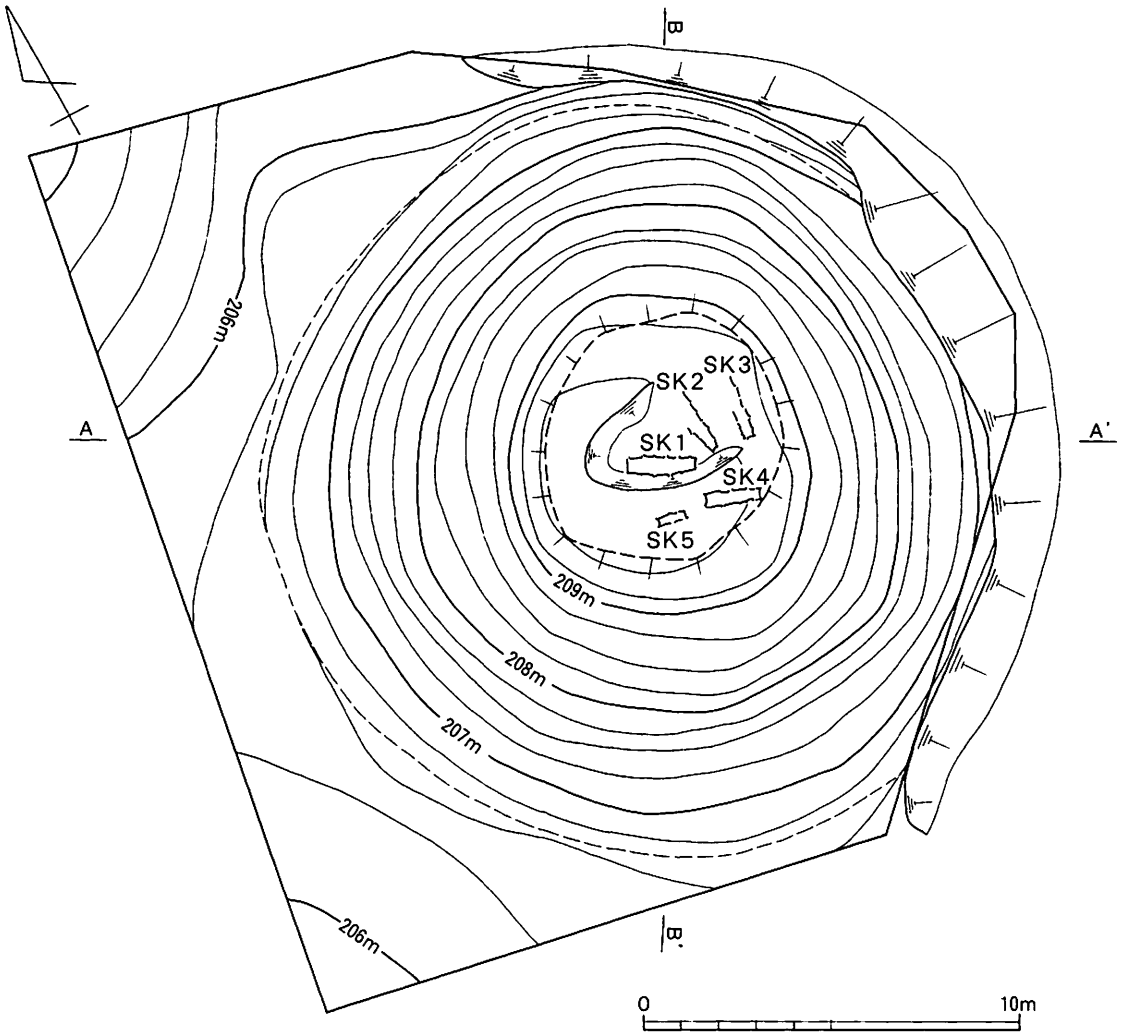
盛土は大まかに厚さ３～60cm（主体は厚さ10～30cm）の黄褐色土系統の土を幾層にも盛っている。なかでも三種類の土壌（盛土Ａ～Ｃ）を主体的に盛ることで墳丘の形成を行ったものと考えられる。即ち，墳丘の中心部の中・下層に盛土Ｂを東西方向6.8m×南北方向7.6m，厚さ0.6～0.7mの小山状に盛り，墳丘外寄りの中・下層に盛土Ｃを盛土Ｂを被覆するように土手状に盛る。この盛土Ｃの頂部は墳丘Ｂによってできる小山の頂部に較べて高く，盛土Ｂ・Ｃによってできた径3.6m，深さ0.6～0.9mほどの墳丘中央の凹みに21層などの茶～橙褐色系統の土（以下，盛土Ｄ）を盛り，こうして標高208.8～209m付近に水平な盛土面が形成される。この水平面は後述するように，第２号古墳の埋葬施設の構築に関わる重要な意味合いをもつ。これら盛土Ｂ・Ｃ・Ｄによって形成された水平な盛土面の上に盛土Ａが盛られている。最後に，盛土Ａ～Ｄによって造られた墳丘の核（東西方向13.5m×南北方向13.6m，高さ0.9～1.5m）の主に斜面を覆うように軟質の暗黄褐色土（５・６層）が盛られて，墳丘の築成は完成する。

盛土Ａは明黄色土で，８～11層（10・11層が主体）が該当する。盛土Ｂは淡黄褐色土で，地山



第８図　権現第２号古墳調査前地形測量図（1:200）

土（黄白色土）に起因する明黄色・白色・黄色土などの小ブロックを多く含む。18・36・38・39・42～44・50・54・56・62・64～66・69・76・96・97・105・110・113・114・119・120層などがこの盛土Ｂに該当する。量的に最も多く，主体的な盛土が暗黄褐色土の盛土Ｃである。12・14～17・19・29・30・40・45・46・51・55・57～61・67・68・70～75・77～87・89～95・98・99・104・107・109・112・115・117層が盛土Ｃに該当する。茶～橙褐色土の盛土Ｄは盛土Ｃに類似し，20・21・25～27・34・52・100・101・103層がこれに該当する。盛土Ａ・Ｂは色調や土質，地山土に起因する土壌の小ブロックを含む点など類似点が多い。盛土Ａは土質的にも良質で，色調も「山吹色」的な明るく映える黄色であるのに対して，盛土Ｂは色調的にはＡに比べるとややくすんで黄味が薄く，土質的にも少し劣る。盛土Ｃは土質としてはサラサラのシルト質で良質だが，色調的には暗色である。以上から，量的には少ないが墳丘の最上層に盛土の仕上げとして被覆され，また埋葬施設の構築の被覆土や基底土として重要な役割を担ったと考えられる盛土Ａが最良質で，次いで墳丘中心部の核ともいうべき中・下層に主体的に用いられている盛土Ｂが良質な土として採取され，用いられたと考えられる。盛土Ｃは盛土Ｂで築かれた墳丘の中心部分を覆う外護的な



第９図　権現第２号古墳墳丘測量図（1：200）

役割を担う盛土として最も多量に採取されている。これら第２号古墳の墳丘盛土の主体をなす盛土Ａ～Ｄなどは意識的に選別して採取されたと考えられ，丘陵頂部最高所の墳丘の周辺を深く掘り下げて採取されたであろうことは，盛土Ａ・Ｂに地山土に起因する土の小ブロックが多く含まれていることから分かる。そして，この盛土用の土の意識的な採取はまた盛土の基盤の形成も兼ねている。即ち，盛土の基底面は墳丘裾に比べて，北裾・東裾で1.44m，南裾で1.62m，西裾で1.95m高く，1.44～1.95mの高さの基盤を形成している。こうして形成された基盤の上に盛土することで，盛土の厚さ（最大156cm）よりも1.5～２m近く高い墳丘を造り上げることができ，その結果，盛土の厚さの倍以上の高さの墳丘に見せる視覚的な効果を果たしたと考えられる。

（３）埋葬施設

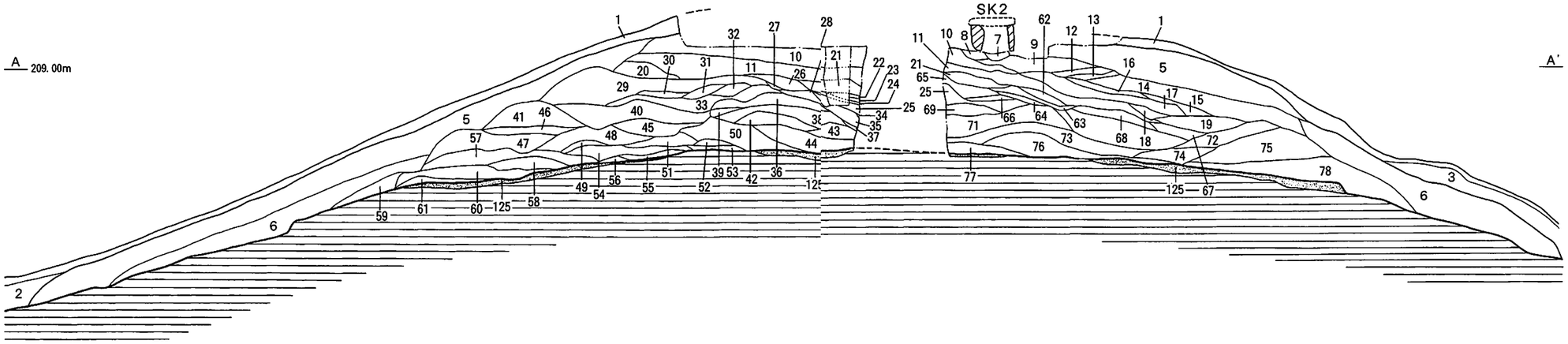
第２号古墳の埋葬施設は墳頂部で検出した箱式石棺墓５基である（ＳＫ１～５）。墳頂部は東西6.8m，南北６mの楕円形でほぼ平坦な形状をなすが，やや東に寄ったほぼ４m四方の範囲に５基の埋葬施設が近接して作られている。墳頂部の北東側の半分は盗掘によって削平を受け，ＳＫ１～３の３基の箱式石棺墓が露出しており，すべての蓋石や一部の小口石・側石が原位置を動かされたり，石材を抜き取られたりしていた。南西側は盗掘を免れ，現状の墳丘最高所（標高209.686m）から40cmほど掘り下げたあたりでＳＫ４・５を検出した。ＳＫ１～３はいずれも墓坑をもたず，盛土のある面上に石棺を構築し，石棺の構築と盛土を並行して行い，その後石棺を被覆する。石棺構築面（側石・小口石の底面）の高さはＳＫ１が標高208.77～208.96mと最も低く，次いでＳＫ４の標高208.93～209.06m，ＳＫ５の標高208.99～209.16m，そして最も高い位置に構築されているのがＳＫ３の標高209.03～209.22m，ＳＫ２の標高209.09～209.24mである。ＳＫ１とＳＫ４が10～16cm，ＳＫ４とＳＫ５が６～10cm，ＳＫ５とＳＫ３が４～５cm，そしてＳＫ３とＳＫ２が２～６ cmの高低差がある。ＳＫ４とＳＫ５は蓋石上面での標高はＳＫ４が209.4～209.46m，ＳＫ５が209.45mと殆ど差がない。蓋石が原位置を動き，墓坑をもたないＳＫ１～３については，因みに小口石・側石上面（最高所）での標高を較べてみると，ＳＫ１が209.42m，ＳＫ２が209.58m，ＳＫ３が209.55mとなり，ＳＫ１とＳＫ２・３は13～16cmの高低差がある。ＳＫ４・５の小口石・側石上面（最高所）の標高はＳＫ４が209.34m，ＳＫ５が209.38mとほぼ同じく，ＳＫ１のそれと４～８cmと大差ない。以上から，ＳＫ１・４・５とＳＫ２・３の間にはその石棺構築面に明らかな高低差が認められる（13～24cm）。

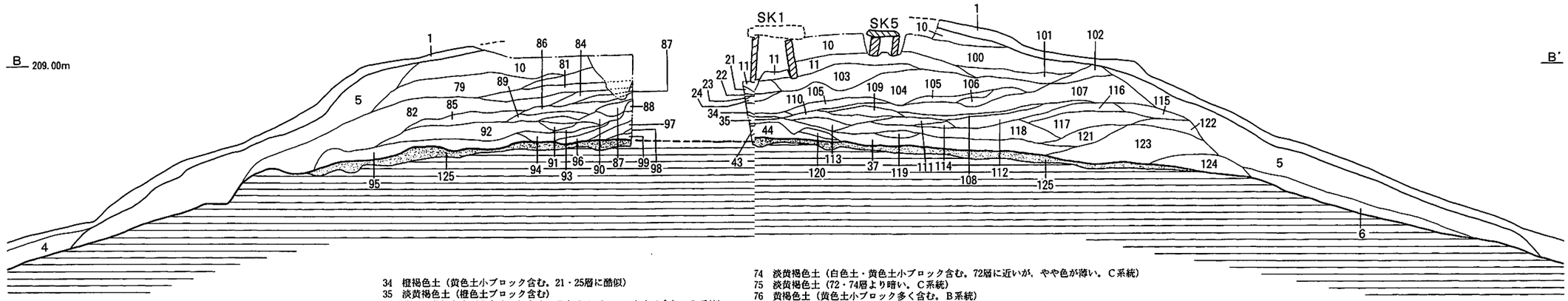
ＳＫ１～５の構築面及び構築状況を明らかにするために，盛土との関係について少し詳しくみていくと，

①ＳＫ１＝小口石・側石は11・103層上に立てられており，11・10層が周囲に盛られている。

②ＳＫ２・３＝小口石・側石は直接には７・８層上に立てられている。その下には９・10層が存在する。７層を除けば盛土Ａの系統の土の上に構築されている。

③ＳＫ４・５＝11層上に小口石・側石が立てられ，周囲には10・100層が存在する。墓坑は10・100層上面から掘り込まれている。





1　表土（黄褐色土）
2　暗黄褐色粘質土
3　黄褐色土
4　暗黄褐色土

墳丘盛土

5　暗黄褐色土（軟質）
6　暗黄褐色土（5層に酷似。やや色がうすい）
7　暗黄褐色土
8　明黄褐色土（白色土・明黄色土小ブロック含む。10層に酷似。A系統）
9　淡～明黄褐色土（白色土・明黄褐色土小ブロック多く含む。10層に酷似。A系統）
10　淡黄色土（白色土・黄色土小ブロック含む。A系統）
11　淡黄色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。A系統）
12　暗黄褐色土（C系統）
13　暗黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック多く含む。B系統＋C系統）
14　暗黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック含む。C系統）
15　暗黄褐色土（C系統）
16　暗黄褐色土（15層より色がややうすい。C系統）
17　暗黄褐色土（やや黒ずむ。C系統）
18　淡黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック含む。11層に近い。B系統）
19　橙褐色土（赤みがある。C系統）
20　茶褐色土
21　茶～橙褐色土
22　淡黄褐色土
23　明黄褐色粘質土（軟質）
24　黄褐色土
25　淡褐色土（21層に酷似）
26　暗黄褐色土（25層より少し暗い）
27　暗黄褐色土（26層より黒味を帯びる）
28　淡黄褐色土（明黄色土小ブロック含む。35層より黄味が強く，少し白っぽい）
29　黄褐色土（少し薄い。C系統）
30　黄褐色土（暗い。C系統）
31　淡黄褐色土（明黄色土ブロック含む。黄色味やや強い）
32　淡黄褐色土（黄色味強い）
33　黄褐色土（黒味を帯びる）
34　橙褐色土（黄色土小ブロック含む。21・25層に酷似）
35　淡黄褐色土（橙色土ブロック含む）
36　淡～明黄褐色土（白色土・橙色土・黄色土小ブロックを多く含む。B系統）
37　淡黄褐色土（軟質・粘質）
38　淡黄褐色土（小ブロックを多く含む。やや暗い。36層に近い。B系統）
39　淡黄褐色土（小ブロックを殆ど含まない。38層に酷似。B系統）
40　暗黄褐色土（C系統）
41　淡黄褐色土
42　淡黄褐色土（白色土・橙色土・黄色土の小ブロック含む。B系統）
43　淡黄褐色土（白色土・橙色土・黄色土の小ブロック多く含む。B系統）
44　淡黄褐色土（橙色土・白色土・黄色土の小ブロック多く含む。B系統）
45　暗黄褐色土（40層よりやや黒味あり。色はやや薄い。C系統）
46　暗黄褐色土（C系統）
47　黄褐色土（黄色土小ブロック含む。全体に淡色気味）
48　黄褐色土（やや黒味あり。全体に淡色気味。47層に近い）
49　淡黄褐色土
50　淡黄褐色土（44層より少し薄い。B系統）
51　暗黄褐色土（29・30層などと同系統。C系統）
52　茶褐色土（軟質。20・25層より濃く，柔らかい）
53　暗黄灰色砂質土（柔らかい）
54　淡～明黄褐色土（橙色土・白色土・黄色土小ブロック多く含む。B系統）
55　暗黄褐色土（やや黒味帯びる。29層などと同系統。C系統）
56　淡～明黄褐色土（少し黄色味が強く，明るい。54層と同じ。B系統）
57　暗黄褐色土（58層に近い。黒味やや強い。C系統）
58　暗黄褐色土（部分的に黒味をもつ。C系統）
59　暗黄褐色土（60層に近い。少し黒味を帯びる。C系統）
60　暗黄褐色土（薄く黒味を帯びる部分あり。58層よりは黒味は少ない。C系統）
61　黄褐色土（60層より明るい。C系統）
62　淡黄褐色土（白色土小ブロック多く含む。B系統）
63　淡～明黄褐色土（黄色土・白色土小ブロック多く含む。やや暗い）
64　淡黄褐色土（黄色土・白色土小ブロック多く含む。62層に似る。B系統）
65　淡～明黄褐色土（白色土・黒色土・黄色土小ブロック多く含む。B系統）
66　淡～明黄褐色土（64層に近い。やや黄色味が強い。B系統）
67　淡橙褐色土（黄色土小ブロック含む。19・68・70層より若干色が薄い。C系統）
68　橙褐色土（赤味あり。19層などに酷似。C系統）
69　明黄褐色土（黄色土・橙色土小ブロック多く含む。B系統）
70　橙褐色土（19・68層に酷似するが，69層より若干くすむ。C系統）
71　暗黄褐色土（黄色土小ブロック含む。19層などにもいくらか近い。C系統）
72　淡黄褐色土（白色土小ブロック含む。C系統）
73　暗黄褐色土（黄色土小ブロック多く含む。71層に酷似。C系統）
74　淡黄褐色土（白色土・黄色土小ブロック含む。72層に近いが，やや色が薄い。C系統）
75　淡黄褐色土（72・74層より暗い。C系統）
76　黄褐色土（黄色土小ブロック多く含む。B系統）
77　暗黄褐色土（小ブロック含む。73層に近い。やや暗い。C系統）
78　暗黄褐色土（黒ずむ。C系統）
79　暗黄褐色土（C系統）
80　暗黄褐色土（79・82層よりやや黄色味強い。少し薄い。C系統）
81　暗黄褐色土（80層に酷似。79・82層よりやや黄色味強い。C系統）
82　暗黄褐色土（C系統）
83　暗黄褐色土（黒っぽい。C系統）
84　淡黄褐色土（薄い黄色。C系統）
85　暗黄褐色土（79・82層に酷似。C系統）
86　暗黄褐色土（黒色土・黄色土が混じり，少し汚い感じ。C系統）
87　淡黄褐色土（少し暗黄褐色土混入。84・89層に似る。C系統）
88　明黄褐色土
89　淡黄褐色土（少し暗黄褐色土混入。84・87層に似るC系統）
90　暗黄褐色土（黒っぽい。86層に酷似。C系統）
91　淡黄褐色土（84・87・89層に似る。C系統）
92　暗黄褐色土（84・87・89・91層などに似る。C系統）
93　暗黄褐色土（86・90層などに酷似。黒っぽい。C系統）
94　淡黄褐色土（82・87・89・91層に酷似。C系統）
95　暗黄褐色土（C系統）
96　明～淡黄褐色土（明黄色土などの小ブロック多く含む。B系統）
97　淡黄褐色土（やや黒っぽい。小ブロック含む。B系統）
98　暗黄褐色土（黒っぽいC系統）
99　暗黄褐色土（黒っぽいC系統）
100　暗黄褐色土（21層に近い。やや橙色気味）
101　橙褐色土（100層に近いが，やや色が薄いか）
102　黄褐色土（黄色土小ブロックやや多く含む）
103　淡橙褐色土（21層より色がやや薄い）
104　暗黄褐色土（黄色土小ブロック含む。C系統）
105　淡黄褐色土（明黄色土小ブロック多く含む。B系統）
106　淡黄褐色土（極小の明黄色土小ブロック含む）
107　暗黄褐色土（色は薄い感じ。C系統）
108　淡黄褐色土
109　暗黄褐色土（色はやや黒っぽい。C系統）
110　淡黄褐色土（明黄色土小ブロック多く含む。37・118層に似る。B系統）
111　淡黄褐色土（黄色味やや強い）
112　暗黄褐色土（明黄色土小ブロック少し含む。色はやや黒っぽい。C系統）
113　淡黄褐色土（明黄色土小ブロック多く含む。B系統）
114　淡黄褐色土（110層に酷似。黄色土小ブロック多く含む。B系統）
115　暗黄褐色土（117層に似るが，色はやや薄く淡い，黒味が少ない。C系統）
116　淡黄褐色土
117　暗黄褐色土（C系統）
118　淡黄褐色土（37層に近い。明黄色土小ブロックを多く含む。）
119　黄褐色土（明黄色土小ブロックを多く含む。B系統）
120　淡黄褐色土（44層に似るがややくすむ。小ブロックは含まない。B系統）
121　淡黄褐色土（やや黒味を帯びる部分あり）
122　黄褐色粘質土
123　暗黄褐色粘質土（軟質，やや橙色を帯びる）
124　明黄褐色粘質土

125　旧表土（暗灰色土）

「墳丘盛土」は大きく3系統に分けられる。
A系統＝明黄色土（10・11層などで，墳丘上部にある。）
B系統＝淡黄褐色土（36・38・43・44層などで，墳丘中央寄りの下半にある。明黄色・白色・黄色土など地山土に起因する土の小ブロックを多く含む。
C系統＝暗黄褐色土（14・16・17・83層など墳丘やや周縁寄りの中～下層を形成する盛土の主体的な土で，サラサラのシルト質。）

0　5m

第10図　権現第2号古墳墳丘土層断面実測図（1:60）

これらのことから，ＳＫ１・４・５は小口石・側石の底面が11層中位あるいは上面にある。ＳＫ１は11層中位の面上に石棺を構築し，11・10層を周囲に盛って石棺の固定を図っている。ＳＫ４・５はいずれも10層上面から掘り込まれた墓坑内に石棺を構築している（周囲では10層の下に100層，その下に11層がある）。最も高位にあるＳＫ２・３はいずれも10層の上に堆積する同じＡ系統の盛土である９層，その上の８層，あるいは７層の中位か上面に小口石・側石の底面がある。ＳＫ２・３は墓坑を持たないことから，これら10層よりさらに上位にある盛土Ａ系統の８層あるいは７層中位・上面に石棺を構築した可能性が高い。以上から，墳頂部ほぼ中央の11層中位面にＳＫ１を構築して周囲に11・10層といったＡ系統の土を盛って行き，蓋石を構架する。ＳＫ１の南側に10層の恐らく中位面から墓坑を掘り込んで，ＳＫ４・５の石棺をそれぞれ構築する。それから，ＳＫ１・４・５の石棺上面に10層の土を10～20cm程度被覆する。そのあと，Ａ系統（８・９層など）の土を10～20cmほど盛った面にＳＫ２・３を構築して，その周囲さらには上面に盛土（恐らく５層など）をして，墳丘の造成を完成させたものと考えられる。なお，ＳＫ１の構築・埋葬とＳＫ４・５のそれとの間には時間差はあまりないと思われるが，これらとＳＫ２・３の構築・埋葬との間にはある程度の時間差が存在した可能性が高い。

①**ＳＫ１**（第11図，図版６ｃ・７ａ・７ｂ）

ＳＫ１は墳頂部ほぼ中央に位置する箱式石棺墓である。北東側にＳＫ２・３が，南西側にＳＫ５，南にＳＫ４がいずれも１ｍ内外のごく近接した位置にある。石棺の主軸方位はN63°Ｗと西北西－東北東方向を指し，丘陵尾根線に直交する。墓坑を伴わず，盛土Ａの11層中位面・103層上面に構築され，11層や同じくＡ系統の盛土である10層などの土盛りをしながら石棺の構築・蓋石の構架，そして恐らく10層更には５層などによる墓上への被覆が行われたと推測される。

石棺は盗掘により蓋石すべてが原位置を動かされ，なかには持ち去られたものもある。本来的に何枚の石材が蓋石として構架されていたかは分からないが，調査に着手した時点でむき出しになり半ば以上内部が掘り込まれていた石棺墓の周囲には蓋石に用いられたと考えられる大型の分厚い石材３枚が存在した。それらの石材は①90cm×55cm，厚さ20cm，②85cm×70cm，厚さ20cm，③67cm×46cm，厚さ15cmの大きさで，③の石材の片面は暗赤褐色でベンガラなどの赤色顔料を塗布した可能性がある。①～③の石材はいずれも長方形・不整方形の板状のものである。

石棺の内法は長さ178cm，幅（西小口側）37cm，幅（東小口側）30cm，深さ37cmで，その平面形は西が広く東が窄まるやや歪な長台形である。北側辺は直線的であるのに対して，南側辺は西から２番目と３番目の石材の間が最も幅広く膨らむ。頭位は，人骨が出土していないので明確にはできないが，西小口には東小口に較べてより大きく分厚い石材を用いていること，側石は両側辺とも西小口側に分厚い石材を用い，特に南側辺では東小口側に薄手の石材を使用していること，床面の幅は西小口側が東小口側よりも広いこと，などから西小口側が頭位である可能性が高い。

小口石・側石上面の外側には，両小口と南側辺を主体に灰白色粘土（厚さ６～８cm）が幅７～50cm廻る。この粘土層の下層には数cm大の扁平な小円礫が混入されており，恐らく小口石・側石

上面の数cm下付近まで盛土（10層）を行った後，小円礫を粗く敷いて灰白色粘土を貼ったものと思われ，蓋石を失った現状では明確にはできないが，目張りの機能を果たすと共に中心的な埋葬施設であることを強調する視覚的効果を考えた可能性もある。

小口石と側石は頭位と考えられる西小口では石材の角を合わせる形態の組み方であるのに対して，足位と考えられる東小口では南側石と東小口石は角を合わせているが，北側石は大きく小口石の裏側に突出し，その北側石に小口石の北側面を宛がう形をとっている。小口石は西小口石が長辺51cm，短辺46cm，厚さ32cmと最も分厚い方形の板石を用い，東小口には長辺49cm，短辺27cm，厚さ20cmの長方形の板石を縦長に立てている。側石は北側辺が６枚，南側辺が５枚の長方形の板石をいずれも縦長に立てている。北側石は長辺44～60cm，短辺23～44cm，厚さ13～31cmの石材を，南側石は長辺47～54cm，短辺33～44cm，厚さ５～30cmの石材を用いている。概して，長辺50cm，短辺40cm程度と平面的にはほぼ規模・形状の揃った長方形の石材を用いているが，石材の厚さにかなりの幅がある。即ち，西小口石と西小口から２番目の北側石，西端の南側石が厚さ30cm台と特に分厚い。一方，東小口から１～３番目の南側石は厚さ５～10cmと薄い石材を用いている。そのほかは，厚さ10数～20cm程度の石材で，これが最も多用されている。小口石・側石は形状としては比較的揃っているものの，石材の立て方は比較的雑で，石材間に多くの隙間が空いていることや小口石・側石上面は揃っておらず，数～10cm程度の高低差がある。

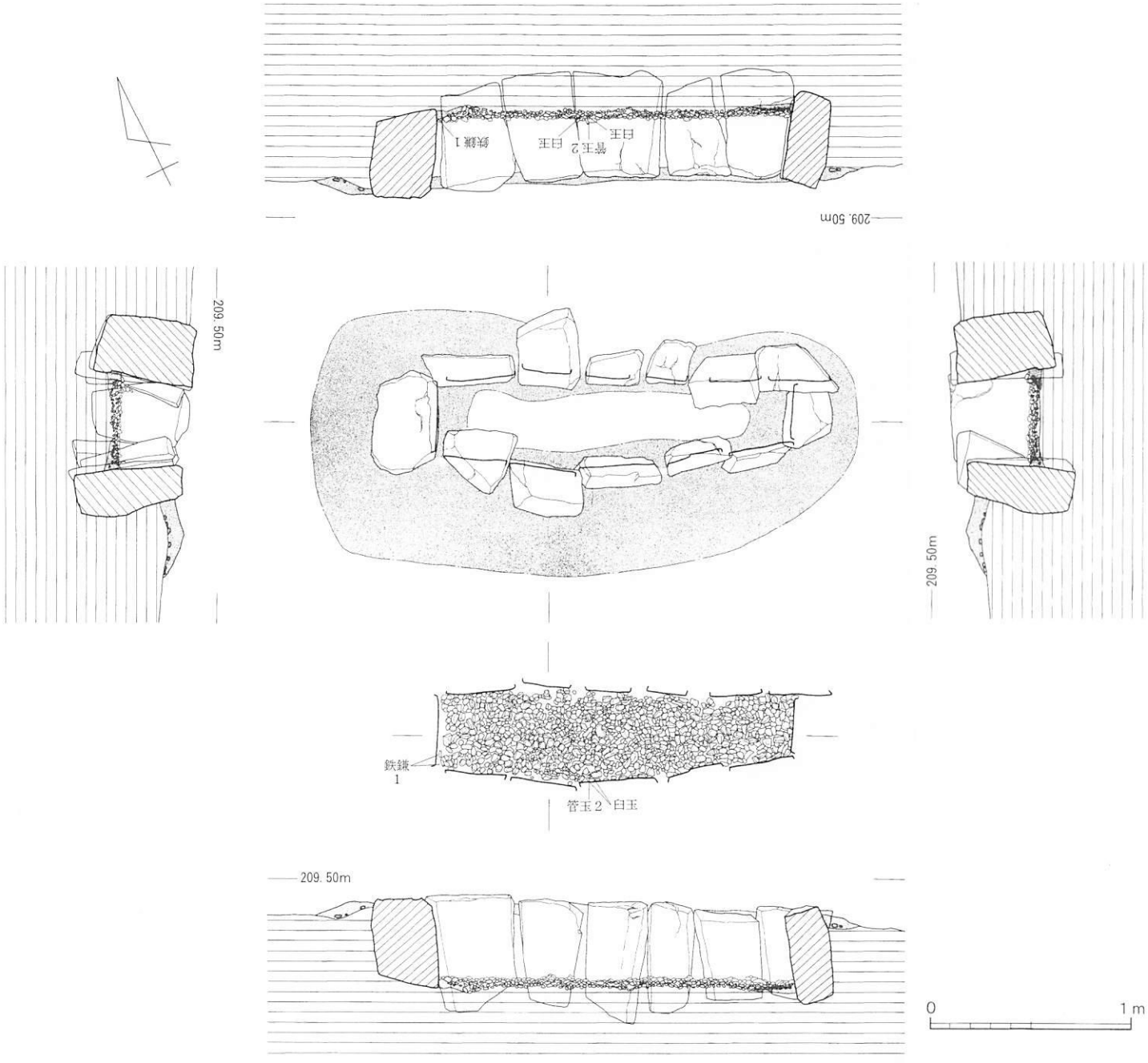
石棺の底には全面的に数cm大の扁平な小円礫を厚さ数cm程度敷いて礫床としている。礫床は基本的には11層中位面の上につくられているが，礫の下には小口石・側石内側から幅７～20cmの範囲に灰白色粘土（厚さ数cm）が敷かれており，礫床の安定や石材の固定などを考慮してなされたものと思われる。この礫床下の灰白色粘土は小口石・側石上面外側に目張り状に張られたものと同様の土で，恐らく墳丘下の地山土から採取されたものと考えられる。

石棺の石材は側石・小口石はすべて細粒花崗斑岩で，蓋石の可能性のある３枚の石材のうち，北側石中央の石材上に置かれていた③のみ凝灰岩で，南側石の石材上に置かれていた①・②は細粒花崗斑岩である。

礫床上面はほぼ水平で，上面及び礫間から鉄器（鎌）１点と玉類（管玉１・臼玉16）17点が出土した。鉄器（鎌，第15図１）は西小口南西隅で，管玉（第15図２）と臼玉３点（第15図７・10，もう１点は壊れたため未報告）は南辺中央の側石際で出土した。そのほかの臼玉13点（第15図３～６・８・９・11～16，もう１点は壊れたため未報告）は南西側（横断面の西側，縦断面の南側の範囲）の礫床土の篩かけによって見つかった。

出土遺物（第15図１～16，図版14）　鉄器（鎌）と玉類（管玉・臼玉）がある。

ａ　鉄器　鉄鎌（１）１点がある。全長6.7cmの完形のもので，小形の直刃鎌である。基部幅1.75cm，中央幅1.7cm，先端部幅1.3cm，背部厚0.2cmである。基部は他の部位に較べてやや薄手で全体にごく緩やかな鈍角に折り返している。柄への着柄角度は88°とほぼ直角に装着されている。刃部はほぼ直線的だが，先端部１cmほどが僅かに上向きに反っている。先端部はやや外開き気味にコ字形をなしている。



第11図　権現第２号古墳ＳＫ１実測図（1:30）（アミ目は灰白色粘土を示す）

ｂ　玉類　管玉（２）１点と臼玉（３～16）16点がある（臼玉２点は未報告）。管玉は光沢をもつ硬質で淡緑色の碧玉製である。長さ2.65cm，径0.75cm，孔径0.35～0.4cm，重さ2.58ｇで，穿孔は上下２方向からなされている。表面全体に縦方向の細かい擦痕があり，上下両端面の内縁及び下端面の外縁に使用に伴うとみられる細かい磨滅が顕著にみられる。臼玉はいずれも石製で，淡緑色で軟質の凝灰岩製のもの12点（５～11・13・14・16＋未報告２点。７のみ灰黒色で軟質），灰黒色で軟質の珪質凝灰岩製のもの２点（３・４），黒緑～暗緑色で硬質の珪質凝灰岩製のもの２点（12・15）がある。長さ0.15～0.35cm，最大径0.4～0.6cm，孔径0.15～0.2cm，重さ0.04～0.11ｇである。この臼玉は側面の形状で細分できる。即ち，側面が直線的なものは今回の調査では第３号古墳ＳＫ１出土の臼玉20点を含めても皆無で，大なり小なり膨らんで丸みをもっている。その膨らみの度合いや形状によって分類すると，

Ａ類；側面が強く膨らみ，算盤玉状に明確な稜をもつもの

Ｂ類；側面が丸みをもち，明確ではないが中央が稜状になるもの

　　ＢⅠ類；厚いもの（長さ0.25～0.3cm程度）

　　ＢⅡ類；薄く扁平なもの（長さが0.25cm程度以下のもの）

Ｃ類；側面が丸みをもつものの，稜は認められないもの

　　ＣⅠ類；厚いもの（長さ0.2～0.32cm程度）

　　ＣⅡ類；薄く扁平なもの（長さが0.2cm程度以下のもの）

となる。ＳＫ１出土の臼玉はＡ類４点（３～６），ＢⅠ類５点（７～11），ＢⅡ類５点（12～14＋未報告２点），ＣⅡ類２点（15・16）で，ＣⅠ類は見出されていない。石材別では，Ａ類は珪質凝灰岩製・凝灰岩製各２点，ＢⅠ類はいずれも凝灰岩製，ＢⅡ類は凝灰岩製２点，珪質凝灰岩製１点，ＣⅡ類は珪質凝灰岩製・凝灰岩製各１点である。

②ＳＫ２（第12図，図版７ｃ）

ＳＫ２は墳頂部のやや東に寄った位置に造られている。ＳＫ１の東側に近接する箱式石棺墓で，その東側にはＳＫ３が，南西側にはＳＫ４が存在する。盗掘時に北小口を中心に破壊を受けている。すべての蓋石を失い，北小口石は恐らく内側に，北側の西側石３枚は外側に倒壊している。ほかの石材はほぼ原状を留めていると思われるが，西側石の南から４番目の石材は内側に傾いている。残存する石棺から，ＳＫ２の主軸方位はＮ９°Ｗと南北方向を指し，尾根線にほぼ平行すると考えられる。ＳＫ１・３と同じく墓坑を持たず，墳丘の土盛りと並行して盛土上に石棺が構築されている。

蓋石は盗掘時に持ち去られたと考えられるが，調査着手の時点で，周囲に蓋石の可能性のある板石３枚が存在した。即ち，①東側石北端の石材の上に50cm四方，厚さ10cmの方形の板石が，②西側石南端の石材の上に長辺56cm，短辺36cm，厚さ10cmの長方形の板石（ＳＫ１の東小口にかかっているので，ＳＫ１の蓋石である可能性もある）が，③南小口石のすぐ南側に長辺40cm，短辺22cm，厚さ５cmのやや小型の不整長方形の石材が存在していた。このように，ＳＫ２は北小口

を中心に原状を失っており，現状での石棺の内法は，長さ（現存）164cm，幅（南小口側）17cm，幅（中央）40cm，深さ（現存）30cmである。南小口側が最も幅が狭く中央にかけて幅が広くなること，両側石の北側により大型の石材を用いていること，北小口石が南小口石に較べてやや大きく分厚いこと，などから北小口側が頭位と考えられる。

小口石・側石の石材の組み方は，北小口は不明だが，南小口は側石の角と小口石の角を合わせている。その平面形は，北小口から南小口にかけていくらか丸みを持ちながら窄まる長台形と考えられる。小口石は南側が長辺29cm，短辺17cm，厚さ７cmと薄手で小型の長方形の石材を縦長に立てている。北小口石は倒れているので明確ではないが，恐らく長辺27cm，短辺24cm，厚さ24cmと小型だがやや分厚い長方形の石材を縦長に用いていたと思われる。側石は，石材が完存する東側石が６枚，北側の３枚の石材が倒壊している西側石は恐らく７枚の石材を用いたと思われる。東側石は長辺33～40cm，短辺24～36cm，厚さ10～21cmの不整長方形・長方形の石材を南小口から２番目の石材のみ横長に，ほかの５枚は縦長に立てている。西側石は倒壊しているものも含めて，長辺26～50cm，短辺20～29cm，厚さ12～16cmの不整長方形・長方形の石材をいずれも縦長に用いたと考えられる。ＳＫ２の小口石・側石に用いられた石材の大半は丸みの強い不整長方形のもので，厚みも凹凸が目立つ。盗掘に伴う攪乱のためもあると思われるが，小口石・側石は隙間が大きく，その上端面も凹凸が顕著で，直線的ではない（現状で，２～10cm程度の高低差がある）。東側石中央の２枚や西側石の北端の石材や南小口から２～４番目の石材などは上面が直線的でなく丸い。このように，ＳＫ２の石棺は全体にかなり粗雑に造られている。

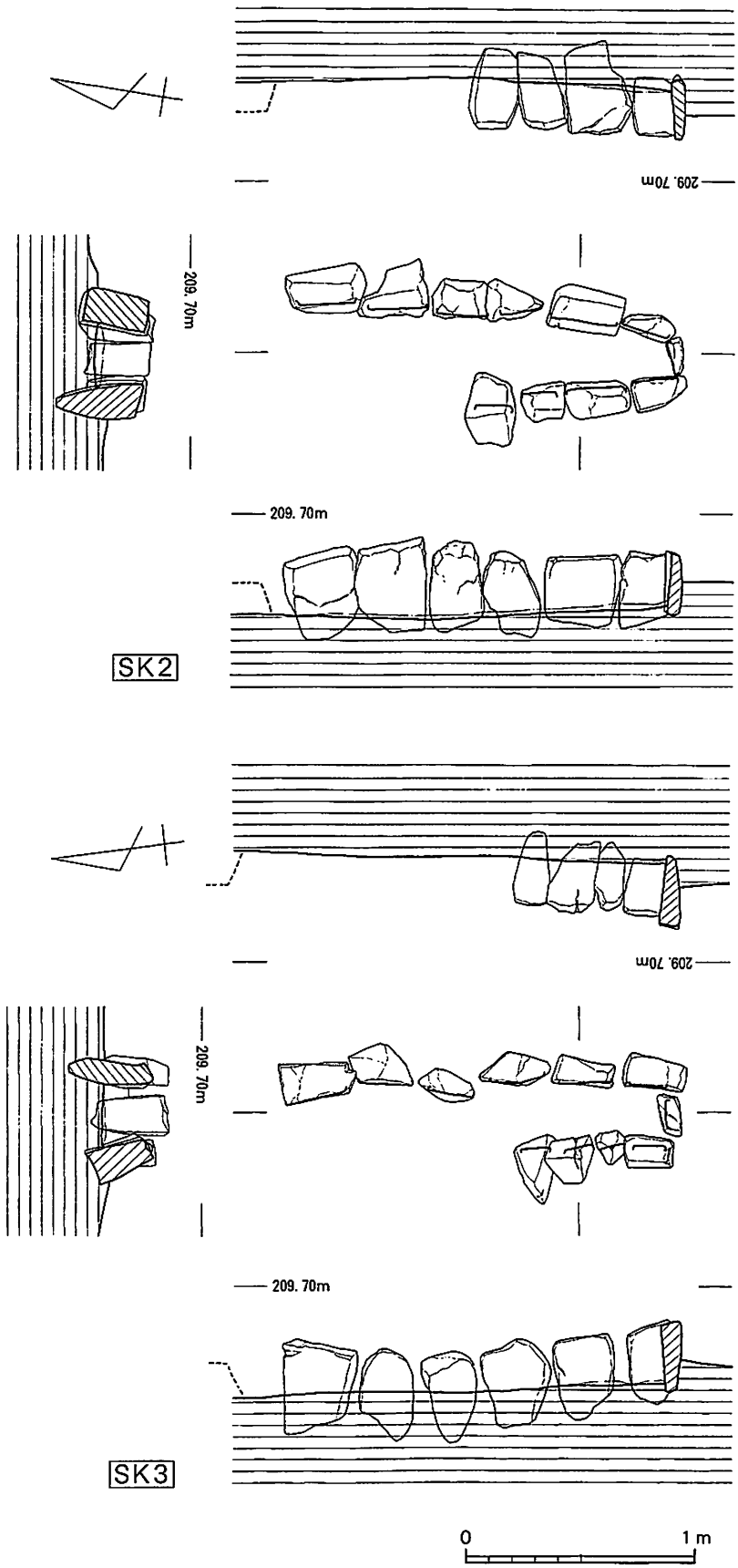
石棺の石材は，東側石の北小口から２・３番目と南端の３枚及び西側石南端の石材上に置かれていた蓋石の可能性のある石材は凝灰岩で，他は倒壊した石材や蓋石の可能性のある石材を含めていずれも細粒花崗斑岩である。

石棺内部は盗掘時に荒らされており，出土遺物も皆無である。

③ＳＫ３（第12図，図版８ａ）

ＳＫ３はＳＫ２の東側に主軸をほぼ平行にして造られた箱式石棺墓で，墳頂部東縁まで１ｍと最も東側に位置する。南側には主軸を東西方向にするＳＫ４が近接して造られている。ＳＫ２同様，盗掘時に北小口を中心に破壊を受けている。すべての蓋石を失い，北小口石は恐らく倒壊している西側石の北小口から４番目の石材の上に倒れている石材で，西側石の北半分の４枚の石材が外側に倒壊している。東側石と南半分の西側石，南小口石はほぼ原状を保つと考えられる。残存する石棺から，ＳＫ３の主軸方位はＮ８°Ｅと南北方向を指し，尾根線にほぼ平行すると考えられる。ＳＫ１・２と同じく墓坑をもたず，墳丘の形成と並行して石棺を構築したと考えられる。

蓋石は盗掘時に動かされたり，持ち去られたりしたと思われるが，周囲に蓋石の可能性のある板石４枚が存在する。即ち，①東側石の東側には長辺60cm，短辺20cm，厚さ15cmの不整長方形の板石状の石材，②北小口に倒れこんでいる長辺52cm，短辺24cm，厚さ27cmの長三角形状の石材，西側石の外側に置かれている２枚の長方形の板石（③北側；長辺50cm，短辺32cm，厚さ28cm，④



第12図　権現第２号古墳ＳＫ２・３実測図（1:30）

南側；長辺65cm，短辺30cm，厚さ８cm，ただし，この２枚はＳＫ２に伴う可能性もある）などである。現状での石棺の内法は，長さ（現存）160cm，幅（南小口側）21cm，幅（中央）28cm，深さ（現存）25cmである。南小口側の幅が最も狭く中央にかけて広がること，東側石を見る限りでは北小口側にやや大きめの石材を用いていること，想定される北小口石が南小口石に較べて大きいこと，などから北小口側が頭位と考えられる。

小口石・側石の石材の組み方は，北小口は不明だが，南小口は小口石を両側石が挟み込む形態の組み方である。その平面形は北小口から南小口にかけて直線的に狭まる長台形と思われる。小口石は，南側の小口石が長辺33cm，短辺18cm，厚さ10cmの長方形の板石を縦長に用いている。北側の小口石については，不明確ながら西側石中央の倒壊した石材の上に倒れている石材の可能性があり，この石材は長辺35cm，短辺27cm，厚さ８cmと薄手の長方形の板石で，どのように用いていたかは現状では分からない。側石は石材が完存すると考えられる東側石が６枚，西側石は南小口から４枚の石材が原状を維持していると考えられ，その北側に外側に倒れた状態の石材４枚も西側石である可能性が高く，計８枚の石材を立てて西側石を構成していたものと思われる。東側石は長辺34～41cm，短辺25～33cm，厚さ10～16cmの不整長方形・長方形の石材を，西側石は倒壊した４枚の石材を含めて，長辺25～43cm，短辺13～28cm，厚さ８～22cmと大きさに幅のある不整長方形・長方形の石材をいずれも縦長に用いている。ＳＫ３の石棺に用いられた石材はＳＫ２と同じく，大半が丸みの強い不整長方形のもので，しかも立てたときの上端面が直線的で水平になるのはごく一部の石材に限られ，東側石の北小口から２～４番目の石材と西側石の北小口から１・２番目，６・７番目の石材は丸みが強い。また，側石・小口石の上面も凹凸が顕著で，数～10cm程度の高低差が存在する。さらに，石材間には隙間が多くみられ，特に東側石では石材同士が接しているものは皆無で，いずれも数cm程度の隙間が空いている。このように，ＳＫ３は造りがかなり粗雑で，用いられている石材も丸みの強い整美でないものが多く見られる。

なお，ＳＫ３の石棺の石材は，蓋石の可能性のある石材のうち西側石のすぐ外側に置かれていた２枚は花崗斑岩であるが，その他はすべて細粒花崗斑岩である。

石棺内部はほぼ完全に盗掘時に掘り返されており，出土遺物は皆無である。

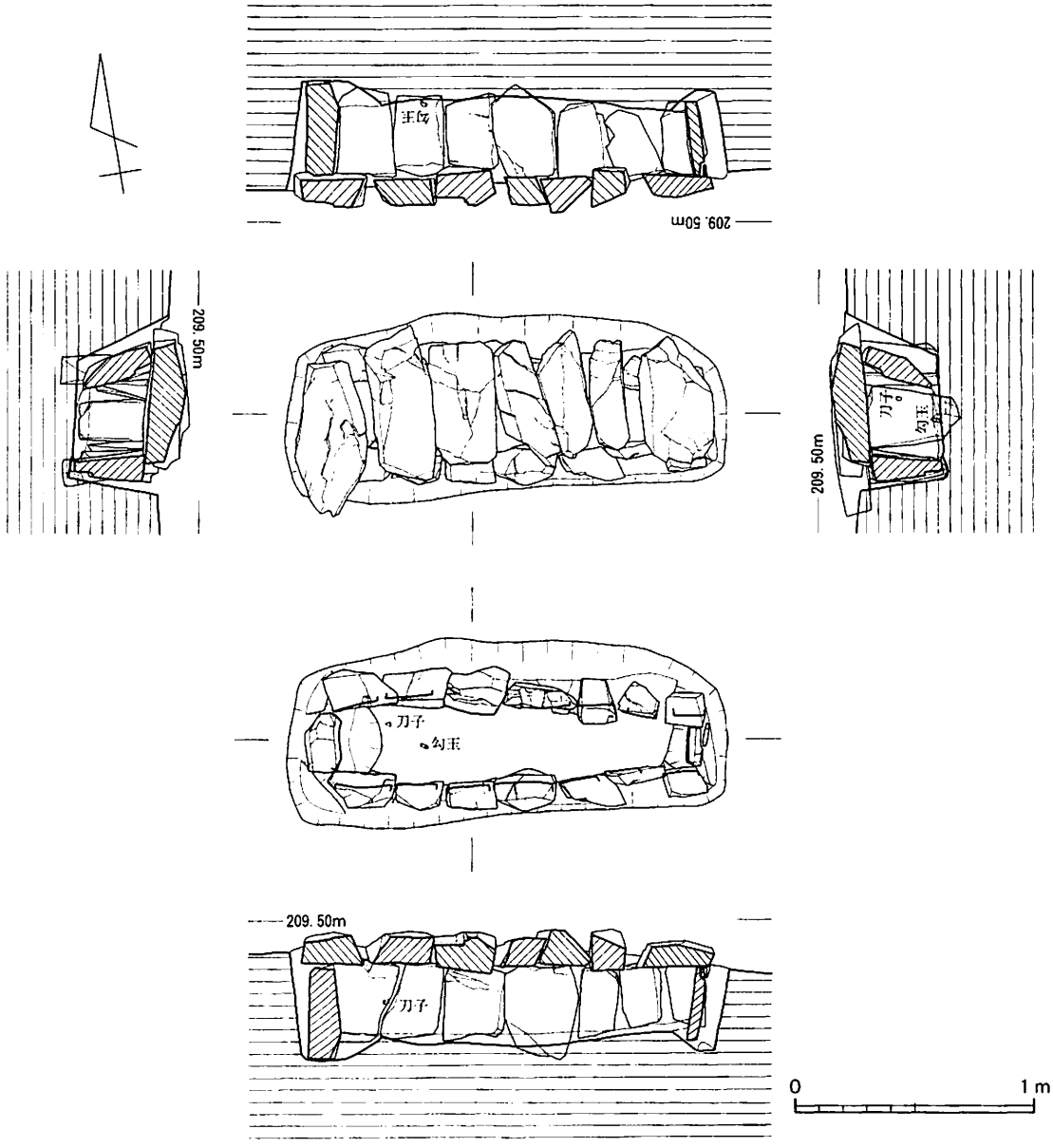
④**ＳＫ４**（第13図，図版８ｂ～９ｂ）

ＳＫ４は墳頂部南東側に位置する箱式石棺墓で，北側にＳＫ１～３，西側にＳＫ５が近接して存在する。石棺の主軸方位はN80°Ｗとほぼ東西方向を指し，丘陵尾根線に直交する。平面形隅丸長方形の墓坑を伴い，長さ184cm，西端幅49cm，東端幅44cm，最大幅77cm，深さ41cmの墓坑のほぼ中央，やや南に寄せて石棺を構築している。

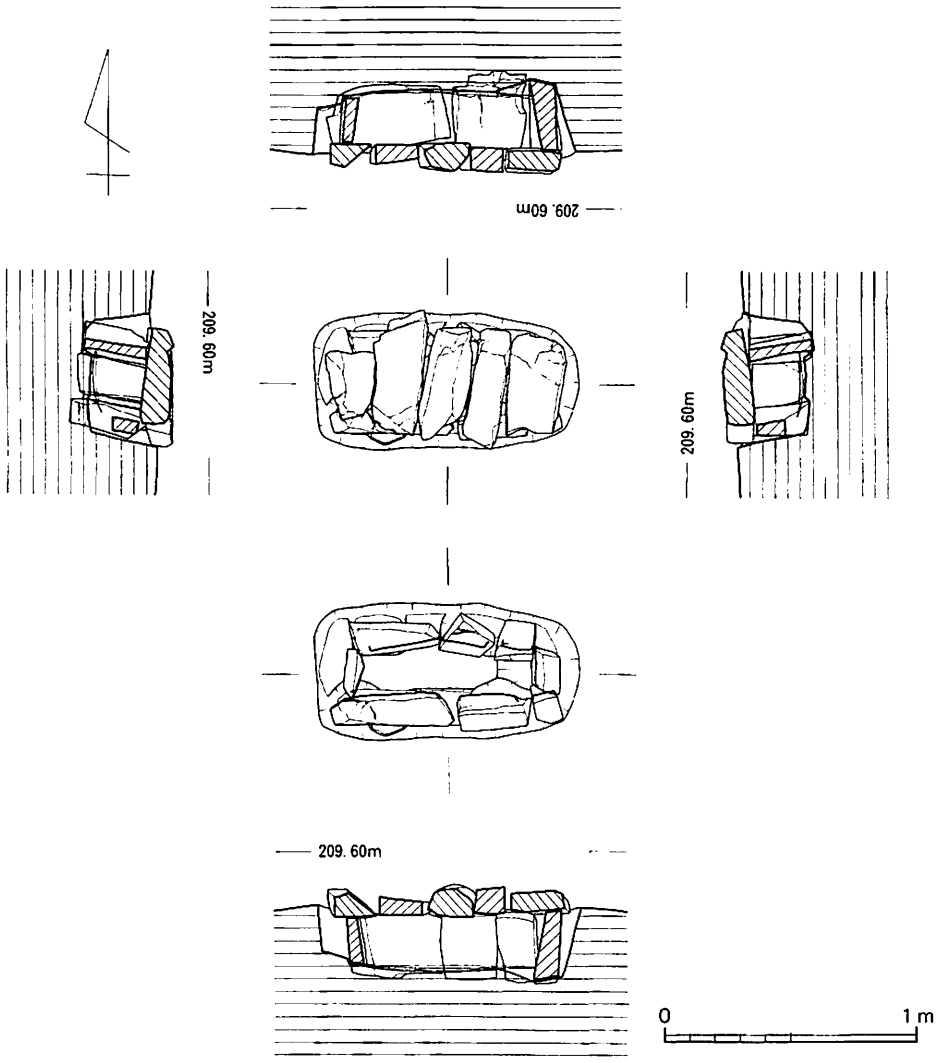
ＳＫ５と共に盗掘を免れたため，蓋石上に厚さ10～19cmの盛土（10層）を留め，蓋石をはじめすべての石材が完存している。蓋石は計７枚の板石からなる。西小口側に長辺65cm，短辺26～30cm，厚さ11～12cmと大型の石材を２枚置き，３番目と東端に長辺51～54cm，短辺27～30cm，厚さ10～15cmの板石を配する。そして，両者の間の西小口から４～６番目の東半部の蓋石には長辺46

～56cm，短辺15～20cm，厚さ12～16cmと小型の石材を置いている。西側に比較的大きな板石を配し，東側にやや小型の板石を置いている。石材間には隙間がみられ，特に，西小口から１・２番目の板石間，６番目の板石と南端の板石の間は５cm前後も空いている。石棺の内法は，長さ150cm，幅（西小口）30cm，幅（中央最大幅）36cm，幅（東小口）23cm，深さ33cmである。頭位は，西小口側の蓋石・小口石・側石に比較的大型で厚い板石を用いていること，床面における西小口側の幅が東小口側のそれよりも広いこと，などから西小口側が頭位と考えられる。

小口石・側石は，西小口が小口石の角と両側石の角を合わせ，東小口は小口石を両側石が挟む形態の組み方をしている。その平面形状は西小口から２枚目の側石の辺りが最も膨らむ，西小口から東小口にかけて緩やかに直線的に窄まる長台形である。側辺の膨らみは北側石が比較的顕著で，南側石はほぼ直線的である。石棺の側石の裏側は南側辺は狭く北側辺はやや広いことや，墓



第13図　権現第２号古墳ＳＫ４実測図（1:30）



第14図　権現第２号古墳ＳＫ５実測図（1:30）

坑の南側辺の壁がほぼ垂直であるのに対して，北側辺の壁はやや緩やかであることなどから，ＳＫ４の石棺は南側石を先に置き，それに合わせて北側石を組んだ可能性が高い。小口石は，西小口は長辺40cm，短辺26cm，厚さ14cmの下端がやや尖り気味の台形状の板石を縦長に用い，東小口にはやや小振りの長辺31cm，短辺16cm，厚さ10cmの長方形の板石を縦長に用いている。側石は南北両側石ともに７枚の石材で構成される。北側石は西小口側の４枚が長辺31～39cm，短辺24～31cm，厚さ11～16cmとやや大型の石材を用い，東小口側の３枚は長辺25～29cm，短辺15～16cm，厚さ11～14cmと厚さは変わらないものの平面的にやや小型の石材を配している。南側石は西端と西小口から４枚目の石材がやや大きく，長辺36～39cm，短辺26～29cm，厚さ13～15cmで，残りの５枚は長辺30～33cm，短辺17～23cm，厚さ５～14cmとやや小型の石材を配している。いずれの石材も長方形・不整長方形の10数cm程度の厚さの板石を縦長に立てている。上面に直線的な辺を揃えており，底に不整形な辺を置くようにしている。小口石・側石の上面は基本的には石材の直線的な辺が水平になるように置いて，上面を揃えようとしているが，なかには水平でなかったり凹凸

がみられたりする部分も存在する。側石は隙間のないように比較的整然と立てられているが，両側石の東小口側のやや小型の石材間は隙間がやや大きく，上端面も水平でなくやや雑な造りになっている。また，両小口とも小口石と側石との間に大きな隙間がみられる。ただ，全体にＳＫ４は，ＳＫ１～３などに較べれば比較的丁寧で整美な造りと言える。両小口石と北側石の西小口から４番目の板石，南側石の西小口側の４枚の石材は墓坑底面を10cm程度とやや深く掘り込んで立てているが，両側石の東小口側の３枚のやや小型の板石や北側石の西小口側の板石は墓坑底面を殆ど掘り込むことなく，墓坑底面に置いただけである。

なお，石棺の石材はいずれも細粒花崗斑岩である。

床面は水平ではなく，中央がやや凹み，足位側と考えられる東小口が頭位側の西小口に較べて高い。西小口から20cmの床面から10数cm浮いた状態で鉄器（刀子）１点が，西小口際の床面から数～10cm上方で管玉２点，西小口から30cmの床面直上で勾玉１点が出土した。

出土遺物（第15図17～20，図版14）　鉄器（刀子）と玉類（勾玉・管玉）がある。

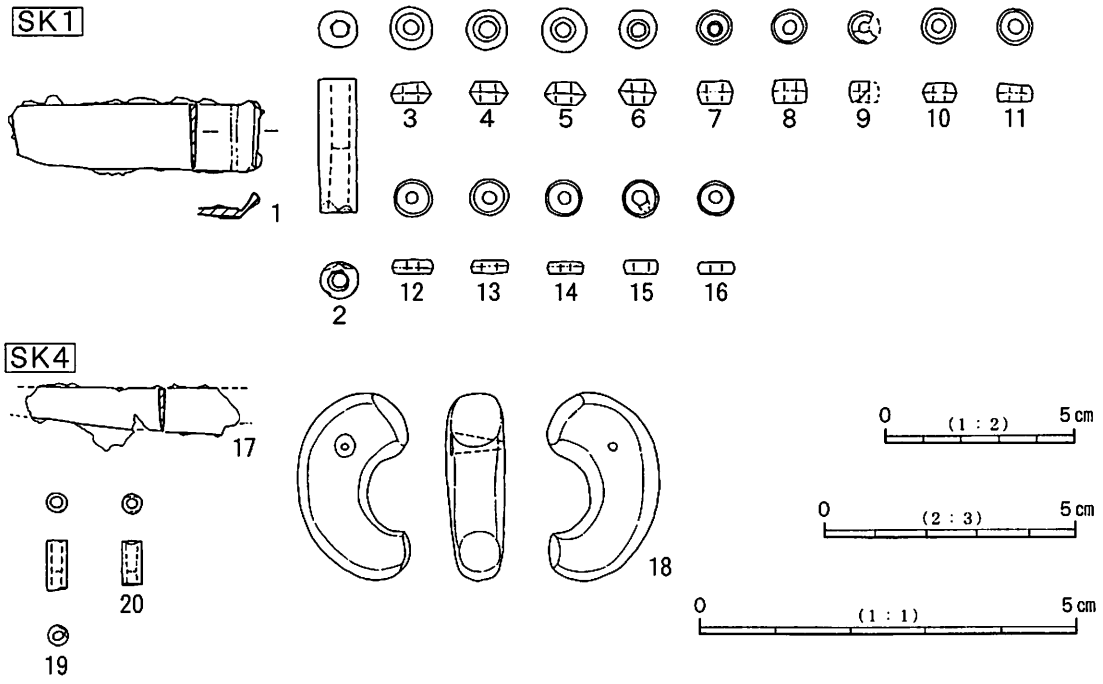
ａ　鉄器　刀子（17）１点がある。刃部の先端と茎部の大半を失っており，現状の大きさは全長（現存）5.55cm，刃部長（現存）5.2cm，茎部長（現存）0.35cm，刃部幅（関部）1.2cm，刃部背部厚0.15～0.2cm，茎部厚0.25cmである。刃部側に関（直角関か）がみられるが，背部については不明である。

ｂ　玉類　勾玉（18）１点と管玉（19・20）２点がある。勾玉は，長さ3.65cm，幅（最大）1.5cm，厚さ（最大）1.1cm，孔径0.15～0.3cm，重さ12.28ｇの大型品である。暗緑色で硬質の光沢が顕著な碧玉製である。穿孔は左側からの１方向のみと考えられる。管玉はいずれも碧玉製の小型品で，石棺の北西隅から出土した19は長さ1.45cm，径0.4cm，孔径0.15～0.2cm，重さ0.20～0.26ｇである。硬質で，暗緑色である。上下端面の外縁を中心に微細な剥離や磨滅が見られる。石棺の南西隅で出土した20は長さ1.4cm，径0.4cm，孔径0.2cmで，淡緑色の硬質のものである。上端面で２か所，下端面で１か所外縁が斜めに磨れている。２点ともに上下２方向からの穿孔である。

⑤**ＳＫ５**（第14図，図版９ｃ～10ｃ）

ＳＫ５は墳頂部南半にある小型の箱式石棺墓である。ＳＫ１の南側，ＳＫ４の西に近接して造られている。主軸方位はN90°Ｗと東西方向を指し，尾根線に直交する。平面形隅丸長方形の墓坑を伴い，長さ104cm，西端幅50cm，東端幅40cm，最大幅54cm，深さ28cmの墓坑のほぼ中央，やや南に寄せて石棺を構築している。

盗掘を免れたため，蓋石上に盛土（10層）を留めており，蓋石をはじめすべての石材が完存している。蓋石は５枚の板石で構成される。西端に最も小型の不整方形の板石（長辺27cm，短辺19cm，厚さ10cm）を置き，その東側には東小口にかけて長辺41～50cm，短辺14～22cm，厚さ８～12cmとほぼ同規模の不整長方形・長方形の板石４枚を構架している。これら蓋石を構成する板石は比較的整然と並べられているが，東側４枚の板石間には少しずつ隙間が見られる。石棺の内法は，長さ68cm，幅（西小口・東小口）17cm，幅（中央最大幅）20cm，深さ21cmである。頭位は，両側



第15図　権現第２号古墳出土遺物実測図（1:1，2:3，1:2）

石に大型の石材を立て，床面がやや高い西小口かと考えるが，西小口側の蓋石は小さく，床面の幅は両小口とも同じである。このことから考えれば，小口石に大型の石材を用いる東小口側が頭位である可能性もある。

小口石・側石は，両小口ともに北側石の板石とは角と角を合わせ，南側石の板石には小口石の側面を宛がう形態の組み方である。ところで，本石棺の側石の裏側の空間は南側辺に較べて北側辺がいくらか広く，また墓坑の壁の角度も南側辺のそれに較べると北側辺の壁の傾斜はいくらか緩やかである。これらのことから，ＳＫ５の石棺は先に南側石を立て，これを基準に両小口石，次いで北側石を立てたと考えられる。本石棺の小口石・側石を組んだ状態の平面形は不整長方形で，北側辺の中央がやや膨らむが南側辺は直線的である。小口石は，西小口は一辺20cm四方，厚さ６cmの薄手の板石を立て，東小口は長辺30cm，短辺15cm，厚さ10cmの長方形の板石を縦長に用いる。側石は，両側石とも３枚ずつの板石からなる。北側石は西小口側に長辺35cm，短辺26cm，厚さ11cmの長方形の板石を横長に立て，その東側には長辺26cm，短辺15～22cm，厚さ11～13cmのやや小振りの長方形の板石を縦長に配している。南側石も西小口側に長辺49cm，短辺26cm，厚さ13cmの大型の板石を横長に配し，その東側に長辺32cm，短辺30cm，厚さ10cmの不整方形の石材を立てている。東端には長辺26cm，短辺11cm，厚さ10cmの角柱状の石材を立てている。両側石に用いられた石材はほぼ同じ厚さのもので，西小口側に最も大きな石材を横長に置き，東小口側に小型の石材を縦長に配する。小口石・側石の上面はいずれも石材の直線的な辺をほぼ水平になるようにしているものの，上端面の凹凸は比較的顕著である。これらの板石は東小口石と大半の側石は墓坑底面を数cm程度掘り込んで据えられているが，南側石の中央の板石は下辺が凹凸の顕著な

石材で，墓坑底面を10cmとほかの板石に較べて深く掘り込んで板石の安定を図っている。西小口石は墓坑底面を殆ど掘り込むことなく石材を据えている。

なお，石棺の石材はすべて細粒花崗斑岩である。

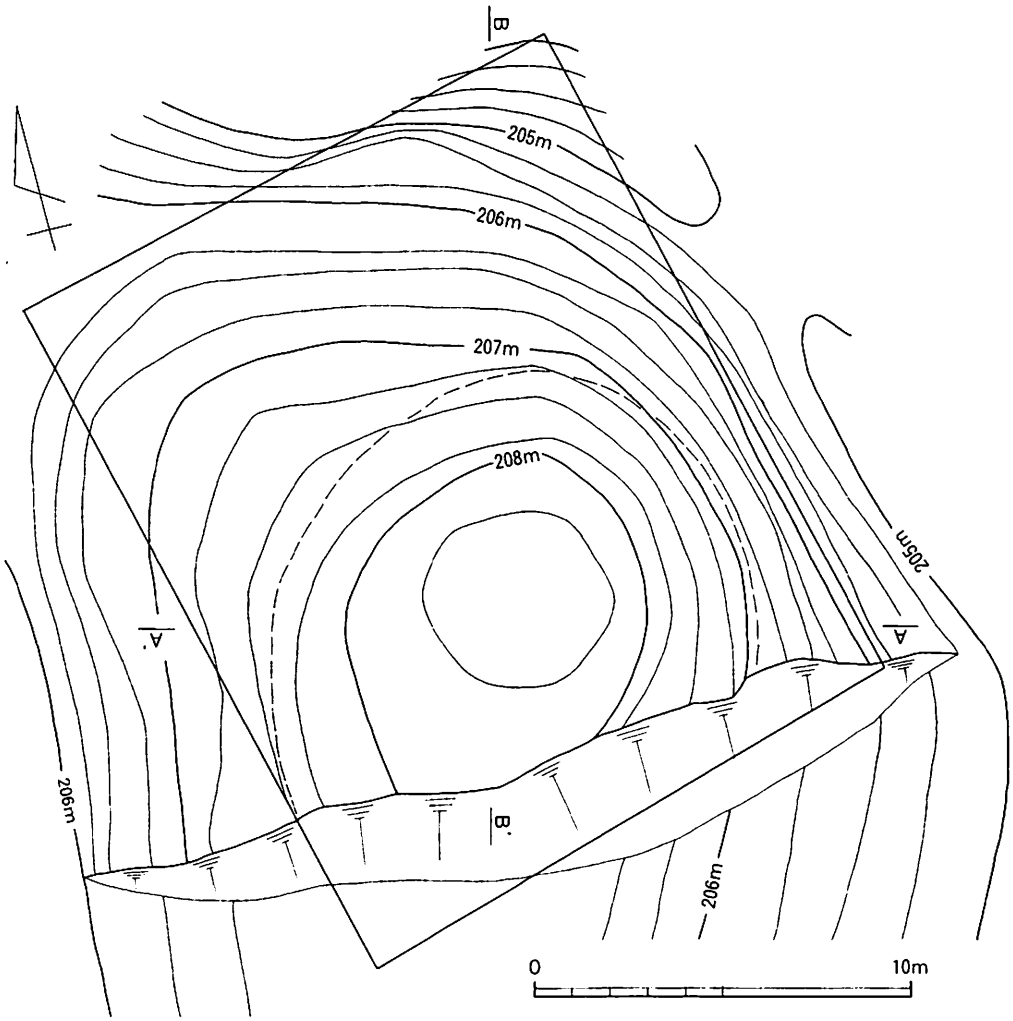
床面はほぼ水平だが若干中央に向かって緩やかにくぼんでいる。両小口はほぼ同じ高さである。ＳＫ５からは遺物は出土していない。

３．権現第３号古墳

（１）立地と調査前の状況（第３・16図，図版１ａ・１ｂ・11ａ）

権現第３号古墳は，今回調査を行った古墳のなかで最も北に位置する古墳で，第２号古墳の北36mの丘陵頂部に立地する（標高207m，水田面からの比高20m）。古墳が存在するあたりは，第１号古墳から続く標高203～206mの緩やかな丘陵頂部の平坦面の北端部で，ここから北西側へ10m程度高くなり，尾根幅も狭くなる。

調査前の状況は山林で，古墳の南側は開墾によって１m程度削平されていた。丘陵の頂部はや

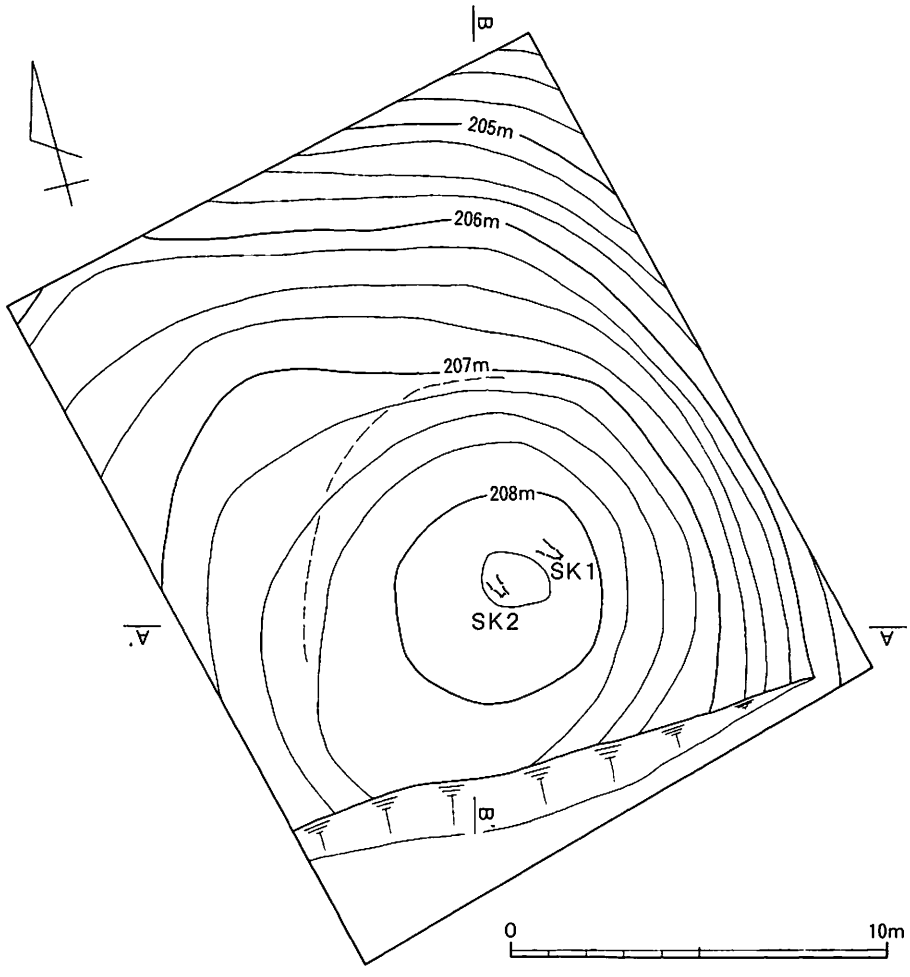


第16図　権現第３号古墳調査前地形測量図（1:200）

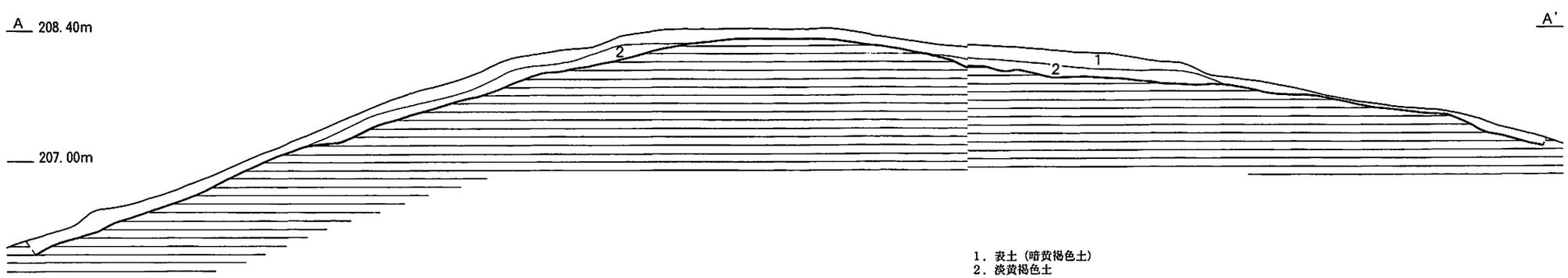
や小高くなってはいるものの，明確に墳丘を捉えることはできなかった。古墳の西側を細い山道が南北に通り，北西側の尾根の稜線上を緩やかに登っていく。古墳の北側にはこの山道から分かれて東側の山裾に降りていく小道がある。なお，東側には第４号古墳が接するように造られている。

（２）墳丘（第17・18図，図版11ｂ）

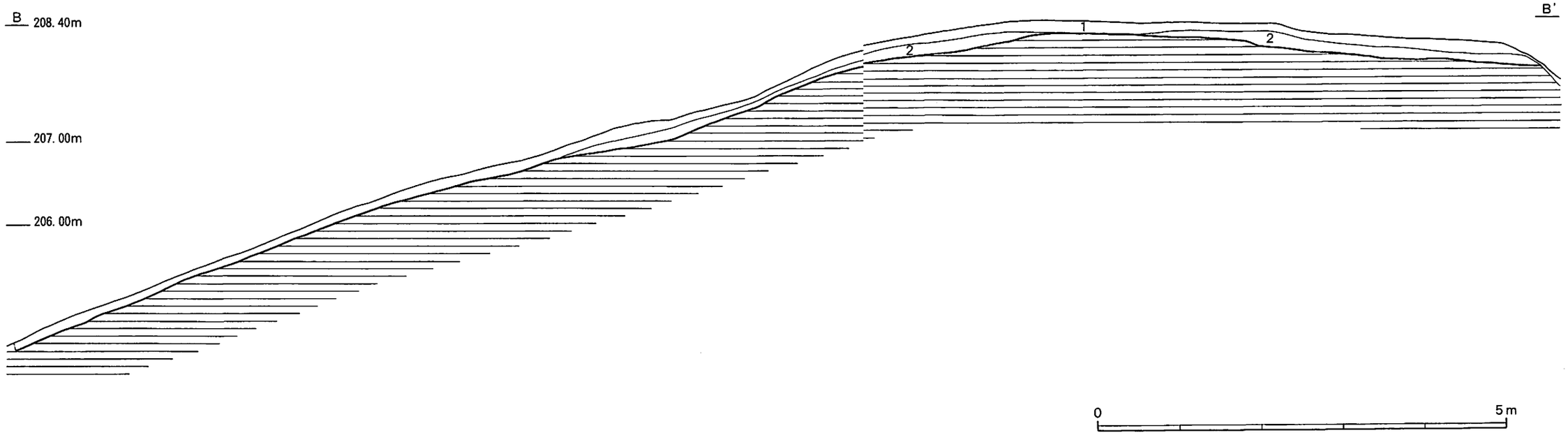
墳丘は不明確で，周溝・外護列石など墳丘裾を明示する外表施設も存在しない。また，盛土は流出したものかはっきりしたものは把握できなかった。表土（暗黄褐色土）の下にみられた厚さ（最大）18cmの淡黄褐色土が盛土である可能性はあるものの，明確ではない。この淡黄褐色土は東西10m，南北12mの範囲に堆積していたが，墳頂部ではほぼ完全に削平されていた。墳丘頂部はそれほど平坦ではなく，東側及び北側は比較的急角度で傾斜するが，西側や南側は緩やかである。この淡黄褐色土が堆積する範囲あるいは東斜面や北斜面で傾斜がやや急になるあたりを墳丘の裾と考えれば，第３号古墳は径10～12m程度の円墳である可能性がある。



第17図　権現第３号古墳墳丘測量図（1:200）



1．表土（暗黄褐色土）
2．淡黄褐色土



第18図　権現第３号古墳墳丘土層断面実測図（1:60）

（3）埋葬施設

墳頂部で小型の箱式石棺墓２基を検出した。いずれも後世の攪乱・盗掘を受けており，大半の蓋石と北側の小口石・側石すべてを失っていた。

①ＳＫ１（第19図，図版11ｃ・12）

墳頂部の東側に位置する箱式石棺墓で，西側１ｍにほぼ主軸を揃えてＳＫ２が造られている。盗掘により殆どすべての蓋石を失い，北西側の小口石・側石を抜き取られていた。石棺の主軸方位は石棺の残存部分から，N49°Wと北西－南東方向を指し，尾根線に斜交すると考えられる。平面形不整長方形の墓坑を伴い，長さ162cm，北西端幅80cm，南東端幅55cm，最大幅94cm，深さ（現存）38cmの墓坑ほぼ中央，やや南西側辺に寄せて石棺を構築している。

蓋石は南東小口石の上面に長辺35cm，短辺11cm，厚さ９cmの角柱状の石材が横架されており，蓋石の残欠の可能性があるが，そのほかはすべて失っている。頭位については明確にはし難いが，南西小口側の床面の幅が最も狭く北西側にかけて広がること，床面の南東小口側が低く，北西小口側が高い（高低差６cm）ことから，北西小口側が頭位と考えられる。

小口石・側石は，北西小口は不明であるが，南東小口は小口石を両側石が挟み込む形態の組み方である。その平面形状は，石棺の残存部位から恐らく北西小口から南東小口にかけて比較的強く窄まる長台形と考えられる。側辺の膨らみは現状では殆どみられず，直線的に窄まるものとみられる。小口石は，南東小口石については長辺31cm，短辺15cm，厚さ12cmの角柱状の石材を縦長に立てている。側石は，北東側石・南西側石ともに南東側の３枚の石材を残すのみである。北東側石は長辺34～38cm，短辺19～27cm，厚さ16～22cmの長方形・不整長方形のやや分厚い板石を縦長に立てている。南西側石は南東小口側に長辺37cm，短辺20cm，厚さ11cmとやや小型の長方形の板石を縦長に置き，北西小口側の２枚は長辺36～38cm，短辺28～29cm，厚さ17～19cmの長方形のやや分厚い板石を縦長に用いている。小口石・側石は板石の比較的直線的な短辺が上面になるように立てている。上面はそれほど凹凸がないが，全体に北西から南東側に下傾しており，その高低差は数～10cmほどである。墓坑底面が南東小口側に下傾しており，そこに棺床土をいれて床面が水平になるようにしている。そのため，南東小口石及び南東小口側の側石は墓坑底面をあまり掘り込むことなく石材を立てているが，北西小口側の側石は墓坑底面を数cm程度掘り込んで板石を立てている。比較的整美で分厚い長方形の板石は隙間なく整然と構築されており，石棺の造りは比較的丁寧といえる。なお，北西小口の墓坑底面には石材が抜き取られた痕跡が残っており，両側石にはさらに２枚程度ずつの板石が立てられていたと考えられ，側石は本来５枚程度ずつ立てられていたと思われる。また，これらの石材抜き取り痕から，石棺の内法は長さ110cm，幅（北西小口）約35cm，幅（南東小口）10cm，深さ33cm程度であると思われる。

なお，石棺の石材は，すべて細粒花崗斑岩である。

南東側の床面には棺床土を入れているが緩やかに下傾しており，北西小口側の床面が水平で高い。北西小口側の床面の20cm四方の範囲で玉類47点（勾玉１・棗玉26・臼玉20）や鉄器（刀子）１点がまとまって出土した。

出土遺物（第20図21～67，図版14） 鉄器（刀子）と玉類（勾玉・棗玉・臼玉）がある。

a　鉄器　刀子（21）１点がある。茎部の大半を失っており，現状の大きさは，全長（現存）6.8cm，刃部長6.1cm，刃部幅（先端）0.8cm，同（関部）１cm，刃部背部厚0.2cm，茎部長（現存）0.7cm，茎部幅0.8cm，茎部厚0.35cmである。刃関で，ななめ関と考えられる。切先は先端近くで刃部が急角度で曲がり，鋭い。刃部は直線的でなく，ごく緩やかな曲線を描く。

b　玉類　勾玉（22）１点，棗玉（23～47）26点，臼玉（48～67）20点である。

勾玉は灰黒色で硬質の珪質凝灰岩製のもので，右側面は割れて失われている。現状の大きさは，長さ3.9cm，幅（最大）1.45cm，厚さ（現存）1.2cm，孔径（現存）0.1cm，重さ（現存）9.44ｇである。穿孔は右側面の１方向からと思われる。左側面の孔の上縁に緩やかな凹みが見られ，使用に伴うものと考えられる。全体に丸みが強いが，腹部の頭部・尾部との境はやや鋭い。

棗玉はすべて灰黒色の珪質凝灰岩製で，長さ1.05～1.3cm，最大径0.6～0.7cm，端面径0.3～0.45cm，孔径0.16～0.2cm，重さ0.52～0.76ｇと，長さに多少の差があるものの，ほぼ同様の大きさと形態である。最大径部には稜はみられず，滑らかである。穿孔は，上下両端から縦方向に２～５㎜程度穿ち，そのあと中央部分は穿孔具を回転させて貫通させたと考えられる。

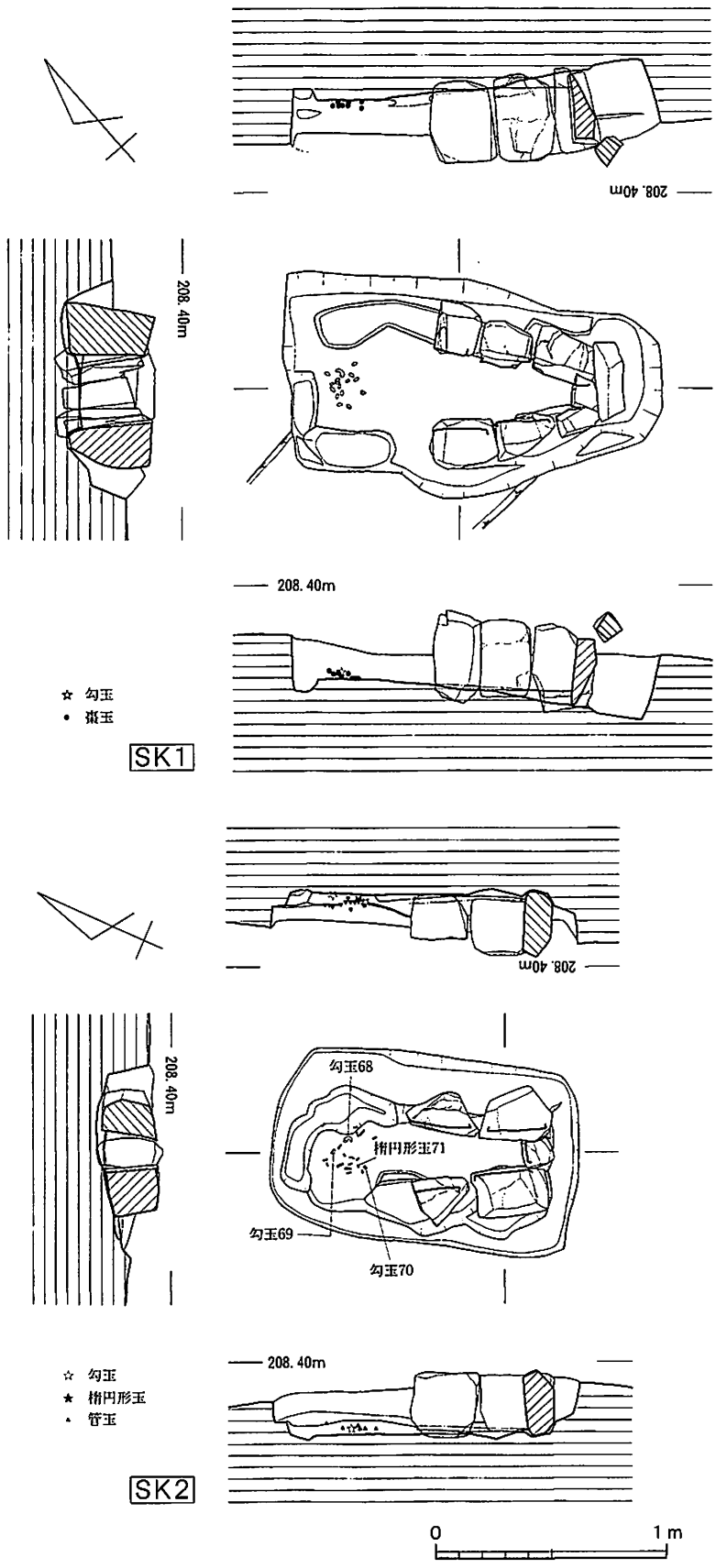
臼玉はＢⅡ類のものが３点（48～50），ＣⅠ類が12点（51～62），ＣⅡ類が５点（63～67）である。石材的には，ＣⅠ類（58）・ＣⅡ類（67）各１点が暗灰緑色の凝灰岩製で，ほかはすべて灰黒色の珪質凝灰岩製である。側面に丸みをもつが稜の認められないＣ類，なかでもやや厚いＣⅠ類が多く，扁平なＣⅡ類や側面が不明確な稜状になる扁平なＢⅡ類がいくらか見られる。長さ0.12～0.32cm，最大径0.4～0.52cm，孔径0.15～0.2cm，重さ0.04～0.12ｇで，主体は長さ0.28cm，最大径0.45cm，孔径0.15cm，重さ0.07～0.10ｇである。

②**ＳＫ２**（第19図，図版11ｃ・13）

ＳＫ２はＳＫ１の西側に近接する小型の箱式石棺墓で，墳頂部中央に立地する。盗掘によりすべての蓋石を持ち去られ，北小口石と北半部の両側石の石材をすべて失っている。残存する南半部の石棺から，ＳＫ２の主軸方位はN24°Ｗと北北西－南南東を指し，尾根線に斜交すると考えられる。平面形隅丸長方形の墓坑を伴い，長さ134cm，北端幅70cm，南端幅75cm，最大幅81cm，深さ（現存）26cmの墓坑中央のやや西に寄せて石棺を構築している。

蓋石はすべてを失っている。床面の幅は南小口側が最も狭く，北小口側に向かって広がっていることから，北小口側が頭位かと考える。

小口石・側石は，北小口は不明であるが，南小口は小口石を両側石が挟み込む形態の組み方で，その平面形状は，石棺の残存部位から恐らく北小口から南小口にかけてやや強く窄まる長台形と思われる。小口石は，残存する南小口石については長辺29cm，短辺13cm，厚さ11cmのやや丸みのある長方形の石材を縦長に立てている。側石は東西側石ともに南半の２枚の石材が残る。東側石は南小口側に長辺33cm，短辺24cm，厚さ22cmとやや大型で厚手の石材を横長に用い，その北側に長辺29cm，短辺28cm，厚さ16cmの方形の石材を立てている。西側石は南小口側に長辺33cm，短辺



第19図　権現第３号古墳ＳＫ１・２実測図（1:30）

24cm，厚さ19cmの分厚い板石を横長に立て，その隣に長辺25cm，短辺20cm，厚さ18cmの石材を横長に置く。いずれも小口側にやや分厚く大型の石材を配し，その北隣にやや薄手の三角形の石材を広い面が内側に向くように置いている。石材は主として横長に置いている。両側石ともに上面に石材の直線的な辺がくるように置いている。南小口石は短辺を上面としているが，丸みがあり直線的ではない。ただ，石材上面の高さは西側石の１枚を除いて水平でほぼ揃っている。ただ，石材間は隙間が多くみられ，石棺の造りはそれほど整美ではない。墓坑底面はほぼ水平で，底面をあまり掘り込むことなく石材を据えている。石材を抜き取られている北小口側は，墓坑底面に石材の抜き取り痕が残っている。この抜き取り痕から，両側石ともにさらに２枚程度ずつの石材が置かれていたと考えられ，本来は側石は４枚程度ずつ立てられていたと思われる。そして，これらの石材抜き取り痕から，石棺の内法は，長さ95cm，幅（北小口）約25cm，幅（南小口）16cm，深さ26cm程度と考えられる。

なお，石棺の石材は，すべて細粒花崗斑岩である。

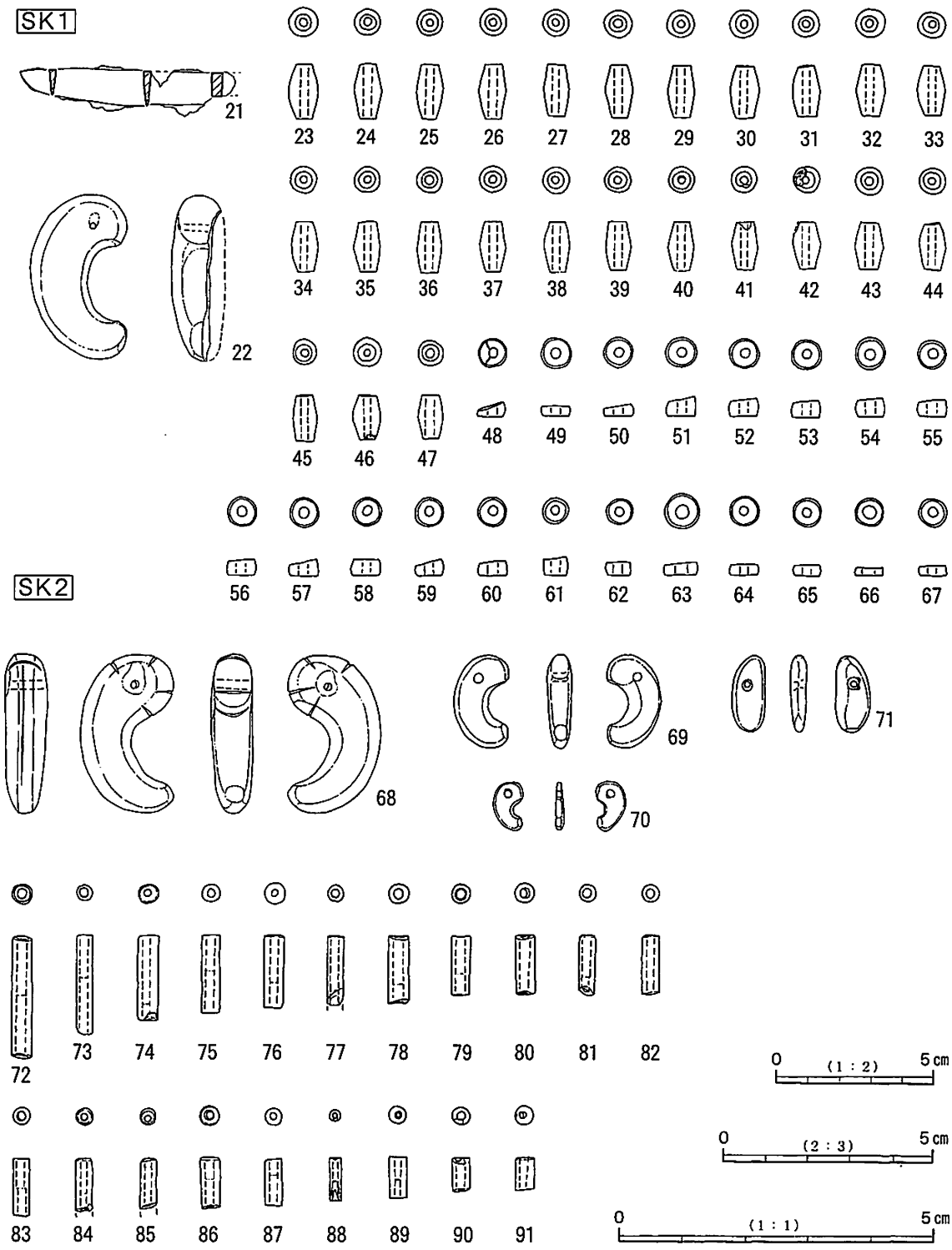
床面はほぼ水平だが，ごく僅かに北小口側が低い。この北小口側の床面の25cm四方の範囲から玉類25点（勾玉３・有孔楕円形石製品１・管玉21）が集中的に出土した。

出土遺物（第20図68～91，図版14）　玉類（勾玉・有孔楕円形石製品・管玉）がある。

計25点の玉類の内訳は，勾玉３点，有孔楕円形石製品１点，管玉21点（１点は未報告）である。勾玉は大中小と３形態あり，大型品（68）は長さ3.7cm，幅（最大）1.6cm，厚さ（最大）1.0cm，孔径0.15cm，重さ10.10ｇで，灰黒色で硬質の珪質凝灰岩製である。穿孔は右側面を主体とする２方向から行われたと考えられる。形態的には，全体に丸みの強い比較的整美なもので，尾部に較べて大きく強調されている頭部に計４条の刻目を施したいわゆる丁字頭勾玉である。孔の周囲は両側面とも大きく凹んでいる。左側面のそれは上方へ延びていることから，この凹みは使用に伴う磨滅である可能性がある。中型品（69）は長さ2.15cm，幅（最大）0.9cm，厚さ（最大）0.55cm，孔径0.15cm，重さ1.68ｇの，灰白色で硬質の凝灰岩製である。全体にやや扁平気味で，頭部から尾部までほぼ同じ幅のため，頭部があまり目立たない。背部は丸みが強いが，腹部はやや角張っており，両側縁や頭部あるいは尾部との境は比較的鋭い。穿孔は右側面の１方向からである。小型品（70）は長さ1.15cm，幅（最大）0.6cm，厚さ（最大）0.2cm，孔径0.15cm，重さ0.30ｇで，灰黒色で硬質な珪質凝灰岩製である。ごく扁平なつくりで，頭部は尾部に較べて少し大きめに作られている。背部は丸みが強いが，小さく抉り取られたような腹部は台形状に角張っている。両側面の孔の縁には使用に伴うとみられる微細な磨滅が観察される。

有孔楕円形石製品（71）は長さ1.8cm，幅（最大）0.8cm，厚さ（最大）0.4cm，孔径0.15～0.25cm，重さ0.72ｇで，石材は灰白色で硬質な凝灰岩である。この石製品の性格等については不明である。扁平で不整楕円形の中央やや上方に左右２方向から穿孔している。

管玉（72～91）は淡灰緑色で軟質の凝灰岩製のもの12点（73・76・77・82～85・87～91）と灰黒色で硬質の珪質凝灰岩製のもの９点（72・74・75・78～81・86。１点は未報告）からなり，後者は灰黒色と暗灰色の縞が交互に斜め方向に走る例が多い。大きさは，前者が長さ0.75～2.3cm，



第20図　権現第３号古墳出土遺物実測図（1:1，2:3，1:2）

径0.3～0.5cm，孔径0.18～0.2cm，重さ0.08～0.43g，後者が長さ1.2～2.9cm，径0.4～0.52cm，孔径0.18～0.25cm，重さ0.31～0.96gである。珪質凝灰岩製の管玉の平均値が凝灰岩製の管玉のそれを上回っている。即ち，凝灰岩製の管玉の計測値（平均）は長さ1.32cm（計測点数9点，以下同じ），径0.40cm（12点），孔径0.18cm（12点），重さ0.25g（8点）であるのに対して，珪質凝灰岩製の管玉の計測値（平均）は長さ1.71cm（8点），径0.44cm（8点），孔径0.22cm（8点），重さ0.55g（8点）である。穿孔は基本的に上下2方向から行われているが，一部に1方向からのみの穿孔の可能性があるものがある（79・82・91）。また，74は上端面から側面上端にかけて赤色顔料状のものが付着している可能性がある。なお，一部に端面の内外縁が面取り状のものがみられ（72－内・外縁，79－内縁，76・78・81－外縁），使用に伴うものかと考えられる。

第2表　権現第2・3号古墳埋葬施設一覧（括弧付きの計測値は現存値を示す。）

古墳No.	遺構No.	墓坑内容	主軸方位	頭位	尾根線との関係	石棺規模（内法，cm）			板石の枚数		組み方*1		板石の立て方*2			
						長さ	幅	深さ	蓋	側　壁	頭	足	頭	足	左側	右側
第2号古墳	SK1	箱式石棺	N63° W	西北西	直交	178	37・30	(37)	?	5・6	c	b	方	縦	縦	縦
第2号古墳	SK2	箱式石棺	N9° W	北	平行	164+	－・17	(30)	?	4+・6+	－	c	×	縦	縦，横	縦
第2号古墳	SK3	箱式石棺	N8° E	北	平行	160+	－・21	(25)	?	4+・6+	－	a	×	縦	縦	縦
第2号古墳	SK4	箱式石棺	N80° W	西	直交	150	30・23	33	7	7・7	c	a	縦	縦	縦	縦
第2号古墳	SK5	箱式石棺	N90° W	西	直交	68	17・17	21	5	3・3	b	b′	方	縦	縦，横	横，縦
第3号古墳	SK1	箱式石棺	N49° W	北西	斜交	60+	－・10	(33)	1+	3+・3+	－	a	×	縦	(縦)	(縦)
第3号古墳	SK2	箱式石棺	N24° W	北北西	斜交	50+	－・16	(26)	?	2+・2+	－	a	×	縦	(横・方)	(横)

*1　小口部の石材の組み方；a＝⊓，b＝⊓，b′＝⊓，c＝⊓。
*2　板石の立て方；「右」「左」は頭部から見て，の意。
　　括弧付きは現存部分の状況を示す。

第３表　権現第２・３号古墳出土遺物一覧（単位cm・g，括弧付きの計測値は現存値を示す。）

①鉄器

No.	器　種	古　墳　名	埋葬施設	全　長	刃部長	刃部幅	茎部長	茎部幅
1	鎌	権現第２号古墳	ＳＫ１	(6.7)	－	1.75	－	－
17	刀子		ＳＫ４	(5.55)	(5.2)	1.2	(0.35)	1.0
21	刀子	権現第３号古墳	ＳＫ１	(6.8)	6.1	1.1	(0.7)	0.8

②玉類

No.	器種＊	古　墳　名	埋葬施設	材　質	長　さ	最大径	孔　径	重　さ
2	管玉	権現第２号古墳	ＳＫ１	碧玉	2.65	0.75	0.4	2.58
3	臼玉Ａ			珪質凝灰岩	0.3	0.55	0.2	0.10
4	臼玉Ａ			珪質凝灰岩	0.3	0.5	0.2	0.11
5	臼玉Ａ			凝灰岩	0.3	0.6	0.2	0.10
6	臼玉Ａ			凝灰岩	0.35	0.5	0.2	0.10
7	臼玉ＢⅠ			凝灰岩	0.3	0.45	0.2	0.10
8	臼玉ＢⅠ			凝灰岩	0.3	0.45	0.15	0.10
9	臼玉ＢⅠ			凝灰岩	0.3	0.4	0.15	(0.04)
10	臼玉ＢⅠ			凝灰岩	0.25	0.45	0.2	(0.07)
11	臼玉ＢⅠ			凝灰岩	0.25	0.45	0.2	0.07
12	臼玉ＢⅡ			珪質凝灰岩	0.2	0.5	0.2	0.07
13	臼玉ＢⅡ			凝灰岩	0.15	0.5	0.2	0.06
14	臼玉ＢⅡ			凝灰岩	0.15	0.45	0.15	0.07
15	臼玉ＣⅡ			珪質凝灰岩	0.2	0.45	0.15	0.06
16	臼玉ＣⅡ			凝灰岩	0.15	0.45	0.2	0.04
18	勾玉		ＳＫ４	碧玉	3.65	2.2	0.35	12.28
19	管玉			碧玉	1.45	0.4	0.2	0.26
20	管玉			碧玉	1.4	0.4	0.2	0.20
22	勾玉	権現第３号古墳	ＳＫ１	珪質凝灰岩	3.9	2.3	(0.2)	(9.44)
23	棗玉			珪質凝灰岩	1.3	0.7	(0.18)	(0.58)
24	棗玉			珪質凝灰岩	1.3	0.63	0.2	0.67
25	棗玉			珪質凝灰岩	1.3	0.6	0.18	0.75
26	棗玉			珪質凝灰岩	1.3	0.6	0.2	0.68
27	棗玉			珪質凝灰岩	1.25	0.65	0.18	0.76
28	棗玉			珪質凝灰岩	1.25	0.65	0.2	0.73
29	棗玉			珪質凝灰岩	1.25	0.65	0.18	0.69
30	棗玉			珪質凝灰岩	1.25	0.6	0.18	0.67
31	棗玉			珪質凝灰岩	1.22	0.65	0.18	0.67
32	棗玉			珪質凝灰岩	1.2	0.7	0.2	0.76
33	棗玉			珪質凝灰岩	1.2	0.65	0.18	0.72
34	棗玉			珪質凝灰岩	1.2	0.65	0.18	0.63
35	棗玉			珪質凝灰岩	1.2	0.61	0.18	0.67
36	棗玉			珪質凝灰岩	1.2	0.6	0.2	0.60
37	棗玉			珪質凝灰岩	1.2	0.6	0.18	0.58
38	棗玉			珪質凝灰岩	1.2	0.6	0.18	0.56
39	棗玉			珪質凝灰岩	1.15	0.6	0.18	0.62
40	棗玉			珪質凝灰岩	1.15	0.6	0.2	0.55
41	棗玉			珪質凝灰岩	1.15	0.6	0.18	0.55
42	棗玉			珪質凝灰岩	1.1	0.65	0.16	0.58
43	棗玉			珪質凝灰岩	1.1	0.62	0.2	0.63
44	棗玉			珪質凝灰岩	1.1	0.61	0.18	0.59
45	棗玉			珪質凝灰岩	1.1	0.6	0.18	0.52

No.	器　種	古　墳　名	埋葬施設	石　材	長　さ	最大径	孔　径	重　さ
46	棗玉	権現第３号古墳	ＳＫ１	珪質凝灰岩	1.05	0.65	0.18	0.63
47	棗玉			珪質凝灰岩	1.05	0.6	0.2	0.53
48	臼玉ＢⅡ			珪質凝灰岩	0.22	0.45	0.15	0.07
49	臼玉ＢⅡ			珪質凝灰岩	0.17	0.45	0.15	0.06
50	臼玉ＢⅡ			珪質凝灰岩	0.16	0.45	0.15	0.06
51	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.32	0.45	0.15	0.12
52	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.3	0.45	0.15	0.10
53	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.28	0.45	0.15	0.10
54	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.28	0.45	0.15	0.09
55	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.28	0.45	0.15	0.07
56	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.28	0.45	0.15	0.07
57	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.28	0.45	0.15	0.07
58	臼玉ＣⅠ			凝灰岩	0.25	0.42	0.15	0.11
59	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.25	0.42	0.15	0.08
60	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.22	0.42	0.15	0.07
61	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.28	0.4	0.15	0.09
62	臼玉ＣⅠ			珪質凝灰岩	0.2	0.4	0.15	0.07
63	臼玉ＣⅡ			珪質凝灰岩	0.2	0.52	0.2	0.08
64	臼玉ＣⅡ			珪質凝灰岩	0.17	0.45	0.15	0.07
65	臼玉ＣⅡ			珪質凝灰岩	0.18	0.42	0.15	0.07
66	臼玉ＣⅡ			珪質凝灰岩	0.12	0.42	0.2	0.04
67	臼玉ＣⅡ			凝灰岩	0.18	0.41	0.15	0.06
68	勾玉		ＳＫ２	珪質凝灰岩	3.7	2.2	0.15	10.10
69	勾玉			凝灰岩	2.15	1.3	0.15	1.68
70	勾玉			珪質凝灰岩	1.15	0.7	0.15	0.30
71	楕円形玉			凝灰岩	1.8	0.8	0.25	0.72
72	管玉			珪質凝灰岩	2.9	0.45	0.25	0.96
73	管玉			凝灰岩	2.3	0.4	0.2	0.36
74	管玉			珪質凝灰岩	2.0	0.4	0.2	0.36
75	管玉			珪質凝灰岩	1.75	0.43	0.18	0.62
76	管玉			凝灰岩	1.7	0.5	0.18	0.43
77	管玉			凝灰岩	(1.65)	0.4	0.2	(0.22)
78	管玉			珪質凝灰岩	1.6	0.52	0.25	0.76
79	管玉			珪質凝灰岩	1.4	0.45	0.22	0.43
80	管玉			珪質凝灰岩	1.4	0.44	0.2	0.51
81	管玉			珪質凝灰岩	1.4	0.4	0.2	0.31
82	管玉			凝灰岩	1.4	0.4	0.2	0.27
83	管玉			凝灰岩	1.35	0.4	0.2	0.20
84	管玉			凝灰岩	(1.25)	0.4	0.18	(0.16)
85	管玉			凝灰岩	(1.2)	0.4	0.15	(0.17)
86	管玉			珪質凝灰岩	1.2	0.45	0.25	0.42
87	管玉			凝灰岩	1.1	0.4	0.18	0.30
88	管玉			凝灰岩	1.0	0.3	0.13	0.08
89	管玉			凝灰岩	0.95	0.4	0.18	0.17
90	管玉			凝灰岩	1.3	0.4	0.2	(0.13)
91	管玉			凝灰岩	0.75	0.45	0.18	0.15

＊臼玉の類型は本文23頁を参照。

第4表　広島県内の主な前・中期古墳（立地・主軸）

所在地		古墳名	時期	埋葬施設	立地	比高	墳形	墳丘規模	尾根線と	主軸	文献*
三次市	向江田町	権現2	5c	箱式石棺（礫床）SK1	丘頂	20m	円	20m	直交	N63° W	
				箱式石棺SK4					直交	N80° W	
		権現3	5c	箱式石棺SK1	丘頂	20m	円？	10m？	斜交	N49° W	
				箱式石棺SK2					斜交	N24° W	
		下山手4	5c	木棺SK1	丘頂		円	13m	斜交	N49° W	
		箱山4	5c	箱式石棺SK1	丘頂	10m	楕円	8.4×10m	平行	N63° E	
		箱山5	5c	箱式石棺（礫床）SK1	丘頂	10m	方	13.7×14m	平行	N44° E	**
		野稲南11	6c前半	土坑（木棺）2号主体	丘頂・端		円	8～11m	平行	N71° W	
		宮の本21	5c	箱式石棺SK1	丘頂	50m	円	13.6×14.4m	平行	N65° W	
		宮の本22		箱式石棺SK1	丘頂	50m	円	9.6×10.8m	平行	N79° E	
		宮の本23		箱式石棺SK3	丘頂	50m	円	10.6×10.8m	斜交	N34° W	**
		宮の本24	4c末～5c初	竪穴式石室SK1	丘頂	50m	円	29.6×30.8m	直交	N69° E	
				箱式石棺SK2					直交	N78° E	**
				箱式石棺SK3					直交	N63° E	
		宮の本25	5c	箱式石棺SK1	丘頂	50m	円	12×14.8m	平行	N58° W	
	畠敷町	太郎丸		竪穴式石室	丘頂		円	26.6m		N63° W	
	南畑敷町	宗祐池西20	古墳時代初頭	箱式石棺	丘頂		円	7.5m	直交	N68° W	
		掛原下7	5c末～6c初頭	箱式石棺SK1	丘頂・端	25m	円	10m	直交	N88° W	
	西酒屋町	酒屋高塚	5c後半	竪穴式石室第1主体	丘頂・端		帆立貝	46.2m	直交？	N86° W	
				竪穴式石室第2主体					直交？	N80° W	
		大久保5	5c	割竹形木棺＋粘土床	丘頂	30m	円	20.5×22.5m	直交	N45° W	
		大坂6	6c前葉	石棺状（埴輪片床）第1主体	丘頂・端	10m	円	8.7m	直交	N58° W	
				土坑（木棺）第2主体					直交	N60° W	
	四拾貫町	四拾貫小原1	5c	木棺A主体	丘頂		円	24×26m	直交	N34° W	10
			5c前半	粘土槨（木棺）B主体					直交	N45° W	
				粘土槨（木棺）C主体					直交	N45° W	10
		上四拾貫6	5c後半	土坑（木棺）	丘頂・端	30m	円	17m	平行	N88° E	
	大田幸町	畑原開山9		箱式石棺	丘頂		円	10m	直交or斜交	N8° W	110
		上定25	5c～6c初	竪穴式石室	丘頂	20m	円	10.5×11m	平行	N84° W	12
		上定27	5c～6c初	竪穴式石室？	丘頂	20m	円	10.5m			
	三良坂町	寺山1	6c前～中頃	土坑	丘頂・端		円	7.7m	平行	N88° E	111
		寺山2	5c後半	土坑	丘頂		円	9.5～10.5m	平行	N88° E	111
		植松1	6c前半	土坑B主体（墳丘下）	丘頂	25m	円	14m	直交	N65° E	
		植松4	6c前半	箱式石棺	丘頂		円	11.5m	直交	N63° W	
		岡田山3	5c前葉	土坑（木棺）	丘頂	40m	円	11×11.7m	直交	N89° E	112
	吉舎町	片野中山10	5c末～6c前半	土坑	丘頂	30m	円	7.8×8.1m	斜交	N60° W	
		大番奥池2	6c前半	土坑（木棺）SK1	丘頂	50m	円	7.2×8m	直交	N75° W	
				土坑（木棺）SK2	丘頂	50m			直交	N76° W	
		大番奥池3	6c前半	土坑（木棺）SK2	丘頂	50m	円	9.8×10.6m	直交	N85° W	
		燎東	6c前半	土坑（木棺）SK2	丘頂・端	20m	円	8×9m	直交	N40° W	
		下矢井南4	4c末～5c初	粘土槨（割竹形木棺）SK1	丘頂	50m	円	18m	平行	N21° W	
				粘土槨（割竹形木棺）SK2					平行	N30° W	
				粘土槨（割竹形木棺）SK3					平行	N35° W	
		寺津2	6c前葉	土坑（木棺）	丘頂	40m	円	9.8m	直交	N61° E	
	甲奴町	茶臼	5c中頃	箱式石棺SK2（中心主体）	丘頂	40m	（尾根切り）		直交	N78° E	
庄原市	板橋町	御堂西2	5c中頃	土坑（木棺）	丘頂	20m	円	5.2m	直交	N27° E	
		大風呂	5c末～6c初	土坑（木棺？）	丘頂・端		円	8m	直交	N10° W	
	平和町	西ケ迫15	5c後半	箱式石棺	丘頂・端	24m	円	8.8m	平行	N85° W	
	本村町	月直寺30	6c前半	竪穴式石室	丘頂・端	48m	円	11.3×11.9m	平行	N86° E	
	上原町	馬立2	6c前半	竪穴式石室（箱式石棺状）	丘頂	30m	円	19m	直交	N0° W	
	口和町	稲干場2	6c前半	土坑	丘頂・端	10m	円	9m	平行	N62° E	
	東城町	大迫山1	4c中葉	竪穴式石室（割竹形木棺）	丘頂		前方後円	長さ45.5m	平行	N49° W	
		中央山1	5c後半	石蓋土坑（第2主体）	丘頂	50m	円	11m	平行	N37° W	
		中央山2	5c後半	箱式石棺	丘頂	50m	楕円	8×10m	平行	N10° W	
		川東大仙山10	6c前半	土坑（第1主体）	丘頂	100m	円	8×8.5m	直交	N79° E	
				土坑（第2主体）					直交	N81° E	
		犬塚2	5c末～6c初	土坑	丘頂	80m	円	9×9.4m	直交	N87° E	
	高野町	岡東2	5c	土坑（礫床）	丘頂	50m	円	10m	平行	N57° E	
神石高原町	高光	辰の口	4c後半	竪穴式石室	丘頂		前方後円	長さ77m	平行	N15° W	
三原市	本郷町	みたち1	5c中頃	箱式石棺	丘頂	25m	楕円	12×13m	直交	N67° E	
		みたち2	5c末～6c初	竪穴式石室	丘頂・端	15m	円	14m	直交～斜交	N0° E	
	小坂町	貝梓山	5c	箱式石棺	丘陵斜面	10m			直交	N76° E	
	沼田西町	福礼	5c中頃	粘土槨（割竹形木棺）	丘頂・端		円	16×18m	斜交？	N66° W	
尾道市	御調町	後口山	5c中頃～末	箱式石棺						N28° E	
府中市	元町	山の神1	4c	箱式石棺（1号主体）	丘頂・端		円	12m	平行	N4° E	
				箱式石棺（2号主体）					平行	N15° E	
		山の神2	4c後半	箱式石棺	丘頂		（尾根切り）		平行	N26° E	
		山の神3		箱式石棺（第1主体）	丘頂		（尾根切り）		平行	N32° E	
		山の神4		箱式石棺（第1主体）	丘頂		（尾根切り）		平行	N37° E	34
		池ノ迫	6c後半	土坑（木棺）	丘頂		円？	10m	平行	N67° E	
	鵜飼町	打堀山A－1		土坑（割竹形木棺）	丘頂・端	30m	楕円	10～12m	平行	N87° W	113
		打堀山B－1		土坑	丘頂	30～41m	不整円	15～18m	平行	N88° E	
	栗柄町	寺山1	5c	箱式石棺	丘頂・端		楕円	12～15m	直交	N51° E	114
福山市	新市町	城山2		土坑	丘頂				平行	N33° W	
		城山4	古墳時代初頭	土坑（第1主体）	丘頂				直交	N33° E	
	津之郷町	赤羽	5c前半	粘土槨（割竹形木棺）	丘頂	20m			直交	N80° W	
	駅家町	才谷3		箱式石棺（A主体）	丘頂	25m	円	15×15.7m	直交	N85° E	
		才谷4	5c後半	石蓋土坑（B主体・小児）	丘頂・端	25m	円	14.4×15.6m	直交	N81° E	
				石蓋土坑（D主体・小児）					直交	N10° W	
		石鎚権現3	5c後半～6c前半	土坑（木棺）第1主体	丘頂		（尾根切り）		平行	N40° W	115
				土坑（木棺）第2主体					平行	N45° W	115
		石鎚権現5	5c前半	礫槨（木棺）	丘頂	23m	前方後円	長さ37.5m	直交	N23° W	
		石鎚権現7	4c末～5c前半	土坑（木棺）	丘頂	35～40m	（尾根切り）		平行	N25° E	116
		長迫1	4c後半	土坑	丘頂・端		（尾根切り）		平行	N56° E	117
		長迫2	4c後半	土坑（1号）	丘頂		（尾根切り）		平行	N55° E	117
				土坑（2号）					平行	N55° E	117
				竪穴式石室（木棺）（3号）					平行	N55° E	117
				土坑（4号）					直交	N35° W	117
		法成寺本谷	4c	土坑SK1	丘頂・端	45m	円	9×11m	直交	N41° E	42
				石蓋土坑SK2					直交	N41° E	
		掛迫6	5c後半	竪穴式石室（中央石室）	丘頂		前方後円	46.5m	平行	N57° E	43
				竪穴式石室（南側石室）					平行	N62° E	
	神辺町	亀山1	5c前半	土坑（粘土槨・割竹形木棺）	独立丘頂	13～14m	円	28m	直交	N66° W	
		園成	5c	粘土槨（割竹形木棺）	丘頂		円	13m	平行	N33° E	
		道上2		土坑（割竹形木棺）北側土坑	丘頂	80m	円？	8m？	直交	N85° E	
				土坑（割竹形木棺）南側土坑					直交	N85° E	47
		道上3		土坑	丘頂		円？	15m？	平行	N35° E	118
		道上5		土坑（木棺）	丘頂		楕円？	13×17m	平行	N78° W	
	加茂町	石鎚山1	4c後半	竪穴式石室（第1主体）	丘頂・端		円	20m	直交	N32° E	
				竪穴式石室（第2主体）					直交	N11° E	
		石鎚山2	4c末～5c初	土坑（木棺）	丘頂		円	16m	直交	N27° E	
		吹越1	5c	土坑（木棺）	丘頂・端		円	10×11m	平行	N57° W	
		吹越2	6c後葉	土坑（木棺）	丘頂		円	14m	直交	N22° W	
		吹越3	5c前半	土坑（木棺）	丘頂		円	12×13.8m	直交	N40° E	

所在地		古墳名	時期	埋葬施設	立地	比高	墳形	墳丘規模	尾根線と	主軸	文献*
		吹越４	５ｃ前葉	土坑（木棺）	丘頂		方	９×10.５m	平行	N34° W	
		吹越５	５ｃ前葉	土坑	丘頂		方	８×10.５m	平行	N15° W	
		吹越７	５ｃ	箱式石棺	丘頂		円	12.５×13m	直交	N34° E	
		吹越８	５ｃ	石蓋土坑	丘頂		円	20×21m	斜交？	N30° E	
安芸高田市	吉田町	日南山２	５ｃ末～６ｃ初	箱式石棺	丘頂・端		円	９m	直交	N84° E	119
	美土里町	向井	６ｃ前半	竪穴式石室（箱式石棺状）	丘頂・端	20m	円	9.７×9.９m	直交	N30° E	
	八千代町	新宮２	４ｃ後半	箱式石棺（１号主体部）	丘頂・端	40m	円	8.５×15m	直交	N40° E	58
				箱式石棺（２号主体部）					直交	N36° E	
		新宮３	５ｃ前半	土坑（１号主体）	丘頂・端	10m	円	12m	直交	N64° E	
				土坑（２号主体）					直交	N68° E	58
		新宮６	４ｃ後半	箱式石棺	丘頂・斜面	30m	長方	６×７m	等高・平行	N61° W	
	高宮町	新道南７	５ｃ後半	土坑（木棺）	丘頂・鞍部	26m	円	12.７m	平行	N76° E	
北広島町	千代田	中出勝負峠１	古墳時代前期末～後期初	竪穴式石室（木棺）	丘頂	30m	円	8.３×9.３m	平行	N78° E	
		中出勝負峠５	５ｃ	箱式石棺	丘頂	40m	長方	11～13×10m	直交	N41° W	
		中出勝負峠８	４ｃ	土坑（木棺）ＳＫ８－１	丘頂	48m	方？	辺15m？	平行	N９° E	
		中出勝負峠９	５ｃ	土坑（木棺）	丘頂・斜面	35m	（尾根切り）		直交	N55° E	60
		金子１	５～６ｃ	石蓋土坑（木棺）	丘斜面	30m	円	８～8.２m	等高・平行	N78° W	
		金子２		小型竪穴式石室	丘頂	30m	円	7.６～8.２m	斜交	N62° E	
安芸太田町	中筒賀	横路小谷１	５ｃ前半	土坑（組合式木棺）第１主体	丘頂・端	40m	円	18×19m	直交	N78° E	
				土坑（割竹形木棺）第２主体					直交	N75° E	
				土坑（割竹形木棺）第３主体					直交	N82° E	
		横路小谷２		土坑（第１主体）	丘頂	40m	方	辺８m	直交	N75° E	
		横路小谷３		土坑（割竹形木棺）	丘頂	40m	方	辺10m	直交	N77° E	
		横路小谷４		土坑	丘頂	40m	方	辺15m	直交	N50° E	
	上筒賀	板道山１	５ｃ中頃	土坑（割竹形木棺）	丘頂	63m	円	13m	直交	N81° E	
広島市	安佐南区	芳力谷１	４ｃ	土坑（割竹形木棺）	丘頂		方	８m	直交	N53° E	
		池の内１	５ｃ末～６ｃ初	竪穴式石室？（石棺？）	丘頂		円	８m	平行	N69° E	
		池の内３	５ｃ中葉	土坑（割竹形木棺）Ａ主体	丘頂		円	13m	直交	N14° W	
		池の内４	５ｃ後半	竪穴式石室？	丘頂		円	８m	直交	N58° E	
		池の内５	５ｃ末～６ｃ初	石蓋土坑？	丘頂		円？	８m？	斜交	N34° E	
		寺山１	４ｃ～５ｃ前葉	土坑（木棺）第１主体	丘頂	20m	円	16×16.５m	直交	N70° E	66
		寺山３	５ｃ後半	竪穴式石室（箱式石棺状）	丘頂	８m	楕円	6.５×８m	平行	N70° E	
		寺山ｃ主体	５ｃ末	土坑	丘斜面	15m			等高・平行	N63° W	
		寺山ｄ主体	～５ｃ前葉	箱式石棺	丘斜面	13m			等高・平行	N66° E	
		櫨地	５ｃ	竪穴系箱式石棺（Ｂ主体）	丘頂	50m	（尾根切り）		直交	N68° E	
		白山２	６ｃ前半～中葉	箱式石棺	丘斜面	65m				N80° W	
		空長１	５ｃ後半	竪穴系横口式石室	丘頂	20m	円	13m	斜交	N75° E	
		空長２	５ｃ末～６ｃ初	箱式石棺	丘頂	20m	円	８m	斜交	N84° E	
		空長４	５ｃ後半	竪穴系横口式石室	丘頂・斜面	20m	円	８m	斜交	N56° E	
		大町七九谷	５ｃ初頭	土坑（割竹形木棺）					斜交	N67° E	
	安佐北区	大久保	５ｃ前半	竪穴式石室（木棺）１号主体	丘頂	30m	円	16m	直交	N52° E	
				土坑（礫床・木棺）２号主体					直交	N77° E	120
		大明地１	４ｃ末～５ｃ初	土坑（木棺）	丘頂		（尾根切り）		平行	N83° E	
		大明地２	５ｃ前半	土坑（木棺）	丘頂				斜交	N87° E	
		道川１	５ｃ	土坑（粘土槨・割竹形木棺）	丘頂				直交	N53° W	
		道川４	５ｃ	箱式石棺	丘頂・斜面		（尾根切り）		直交	N９° W	74
		中小田１	４ｃ後半	竪穴式石室（木棺）	丘頂		前方後円	30m？	平行	N37° E	
		中小田２	５ｃ後半	竪穴式石室（礫床・木棺）	丘頂		円	15m	平行	N４° W	
		中小田９	５ｃ	箱式石棺（第２号石棺）	丘頂		円	約５m	等高・直・斜	N８° E	
		地蔵堂山１	５ｃ中葉～後半	土坑（木棺）	丘頂・斜面		方	14×17m	等高・平行	N63° W	
		地蔵堂山２	５ｃ中葉	竪穴式石室（木棺）	丘頂		長方	10×14m	平行	N69° W	78
		山手１	５ｃ	土坑（礫床・木棺）	丘頂	35m	（尾根切り）		直交	N74° E	121
		山手３	５ｃ	土坑	丘頂	18m	方？		斜交？	N39° W	121
		亀甲１	５ｃ	土坑（粘土床・割竹形木棺）	丘頂	50m	長方	12×18m	平行	N65° E	
		恵下１	５ｃ中頃	土坑（木棺）	丘頂	23m	（尾根切り）		直交	N86° E	
		恵下２	５ｃ後半	土坑（木棺）	丘頂	25m	（尾根切り）		直交	N80° E	
		弘住２	５ｃ後葉～６ｃ前葉	礫床（割竹形木棺）	丘頂・端		円？	10m？	直交	N71° E	
		弘住３		竪穴式石室（礫床・木棺）	丘頂・端		円？	25m？	直交	N０° E	
		虹山	５ｃ前半～中葉	土坑（割竹形木棺）	丘頂	70m	帆立貝？	24.６m	平行	N39° W	
		上小田	５ｃ中葉	箱式石棺（礫床）	丘頂・端		円？	25m？	平行	N75° W	
		諸木	５ｃ後半～６ｃ前半	土坑（木槨・礫床・木棺）（第１主体）	丘頂	30～40m	円	11m	直交	N67° W	
		可部寺山２	５ｃ前半	土坑（割竹形木棺か）	丘頂	30m	楕円	長径８m	平行	N63° E	
		可部寺山３	５ｃ中葉～後半	土坑（割竹形木棺か）	丘頂	30m	楕円	９m	平行	N69° E	
		可部寺山６	５ｃ中葉～後半	土坑（割竹形木棺か）	丘頂	30m	不明	不明	斜交か	N40° E	
	東区	須賀谷１	５ｃ中葉～後半	箱式石棺	丘頂	80～90m	円	11m	平行	N85° W	
		須賀谷２	５ｃ後半	土坑（第１主体部）	丘頂	80～90m	（尾根切り）		直交	N72° E	
				土坑（第２主体部）					直交	N86° E	
	佐伯区	月見城ＳＴ２	５ｃ後半～６ｃ初頭	土坑（木棺）ａ主体	尾根線上		（尾根切り）		平行	N32° W	
		月見城ＳＴ３		土坑（木棺）ａ主体	丘頂・斜面		（尾根切り）		等高・平行	N64° E	
		月見城ＳＴ11		土坑	丘頂・斜面				等高・直交	N24° W	
		城ノ下１	５ｃ後半	土坑（割竹形木棺）	丘頂	60m	長円	14×21m	平行	N65° E	
		城ノ下３	５ｃ中葉	土坑（木棺）	丘頂・端	55m	（尾根切り）		平行	N32° E	91
				土坑（木棺）					平行	N36° E	91
		城ノ下４	５ｃ末	土坑（木棺）	丘頂・鞍部	54m	（尾根切り）		平行	N65° E	
		城ノ下５	５ｃ後半	箱式石棺	丘頂・斜面	54m	（尾根切り）		等高・直交	N30° E	
海田町	東海田	上安井	４ｃ	竪穴式石室（木棺）埋葬施設１	丘頂	70m	円	13.５×15m	平行	N36° W	
				土坑（木棺）埋葬施設２					平行	N46° W	
東広島市	高屋町	才が迫１	４ｃ初	竪穴式石室（第１主体）	丘頂	23m	方	10×11m	直交	N87° W	
				竪穴式石室（第２主体）	丘頂	23m			直交	N88° E	93
		森信10	６ｃ前半	竪穴式石室（箱式石棺状）	丘頂	20m	円	11m	斜交？	N66° W	
		木原向山３	５ｃ中葉～後半	箱式石棺	丘頂	38m	円	11m	平行	N67° E	122
		豊ヶ崎	６ｃ前半～中葉	竪穴式石室（箱式石棺状）	丘頂・端	15m	円	10m	平行	N36° E	123
	西条町	三ツ城１	５ｃ後半～６ｃ初	竪穴式石槨（箱式石棺）（１号棺）	丘頂	７m	前方後円	長さ92m	平行	N46° E	
				竪穴式石槨（箱式石棺）（２号棺）					平行	N43° E	
				箱式石棺（３号棺）					平行	N44° E	
		古市	６ｃ後半	竪穴式石室	丘頂	18m	円？	9.５m	平行	N80° E	
		大槙３	５ｃ前半	箱式石棺（１号石棺）	尾根線上	18m			直交	N73° E	
		八幡山大池	５ｃ中葉～後半	箱式石棺（１号石棺）	丘頂	40m			平行	N88° E	124
	八本松町	藤が迫１	古墳時代前半	竪穴式石室（礫床）	丘頂	20m	円	15m	平行	N17° W	
	志和町	蛇迫１	４ｃ末	土坑（粘土槨・割竹形木棺）	丘頂・端	30～40m	円	10m	直交	N61° E	
		蛇迫２	５ｃ前半	土坑（粘土槨・割竹形木棺）	丘頂	30～40m	円	10m	直交	N68° E	
	豊栄町	草津１	古墳時代前半	箱式石棺（礫床）	丘頂・端						
		山王４		土坑（割竹形木棺）	丘頂	60m	円	11m	平行	N20° W	
		山王５	５ｃ後半	箱式石棺？ＳＫ１	丘頂・斜面	60m	円	６m	等高・平行	N90° E	107
	福富町	金口２	６ｃ前半	石蓋土坑	丘頂	60m	円	3.９m	斜交	N75° W	
		金口４	６ｃ初頭	箱式石棺	丘頂	60m	円	6.２×6.５m	斜交	N85° W	
		金口６	６ｃ前半	箱式石棺（第１主体）	丘頂・端	60m	円	6.５×7.１m	斜交	N69° E	125

＊　「文献」；基本的に第５表と同じ。第５表に未記載のもののみ記載。

＊＊「箱山第５号古墳」は平成18年度に，「宮の本第23号古墳」「宮の本第24号古墳」は平成19年度に，それぞれ（財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が発掘調査を行った。

第5表　広島県内の玉・刀子・鎌を出土した主な前・中期古墳

No.	文献*	所在地		古墳名	時期	埋葬施設 内容	埋葬施設 名称	出土人骨**	玉類*** 勾玉	玉類*** 管玉	玉類*** 臼玉	玉類*** 棗玉	玉類*** 小玉	玉類*** その他	農工具*** 刀子	農工具*** 鉄鎌
1	本書	三次市	向江田町	檀現2	5c	箱式石棺（礫床）	SK1			C1・②R	$E_1$12・①R～②R $E_3$4・①R～②R					直1・①R
						箱式石棺	SK4		C1・①C	C2・①					1・①L	
2	本書	三次市	向江田町	檀現3		箱式石棺	SK1		$E_3$1・①		$E_1$2・① $E_3$18・①	$E_3$26・①			1・①	
						箱式石棺	SK2		$E_1$1・① $E_3$2・①	$E_1$12・① $E_3$9・①				有孔楕円形玉 $E_1$1・①		
3	1	三次市	向江田町	下山手4	5c	木棺	SK1						X2・⑥			
4		三次市	向江田町	箱山4	5c	箱式石棺	SK1						D4・②L			
5	2	三次市	向江田町	野稲南11	6c前半	土坑（木棺）	2号主体部			C4・①R			D1・①R I5・①R X1・①R			
6		三次市	向江田町	宮の本21	5c	箱式石棺（礫床）	SK1									直1・②R
7		三次市	向江田町	宮の本22	5c	箱式石棺	SK1								1・⑤（頭側右L）	曲1・⑤（足元外）
8		三次市	向江田町	宮の本25	5c	箱式石棺（礫床）	SK1									直1・②L，直1・⑤(足元外)
9	3	三次市	畠敷町	太郎丸		竪穴式石室（礫床）							D1		1・⑥	
10	4	三次市	南畑敷町	宗祐西1		箱式石棺	A主体			X4						
11	5	三次市	南畑敷町	宗祐池西20	古墳時代初頭	箱式石棺									1・②L	
12	6	三次市	南畑敷町	掛原下7	5c末～6c初	箱式石棺	SK1								1・⑤（頭右側右外）	
13	4	三次市	西酒屋町	普法寺1		木棺直葬（粘土槨？）	B主体									1・⑥
14	4	三次市	西酒屋町	普法寺5		土坑			X3	X12		X2	D73	B盤EX2，平EX2	1・⑥	
15	4	三次市	西酒屋町	普法寺11		箱式石棺									1・⑥	
16	7	三次市	西酒屋町	酒屋高塚	5c後半	竪穴式石室	第1号主体								1・⑦	
						竪穴式石室	第2号主体		X1・①R				D188・①R H4・①R			
17	8	三次市	西酒屋町	大久保5	5c	粘土床＋割竹形木棺							H26・①		1・②L	
18	9	三次市	西酒屋町	大坂6	6c前葉	竪穴式石室（円筒埴輪片床）	第1主体部						I28・①or③			
						土坑（木棺）	第2主体部							B盤EI5・①or③	1・④	
19	4	三次市	四拾貫町	四拾貫9		粘土槨（木棺）	A主体		X1	X1			D約100			
20	10	三次市	四拾貫町	四拾貫小原1	5c	粘土槨（割竹形木棺）	B主体		$A_1$2・①R B2・①L				C1614・①R D388・①L	算盤玉C4・①L	1・①R	
21	11	三次市	四拾貫町	上四拾貫6	5c後半	土坑（木棺）									3・③，1・⑤（頭）	
22	4	三次市	大田幸町	勇免2		粘土槨（礫床・木棺）	A主体								1・⑥	1・⑥
23	4	三次市	大田幸町	畑原16		土坑				X1・④			D25	G:E4・④		
24	12	三次市	大田幸町	上定27	5c～6c初	竪穴式石室？			X3・⑦				D268・⑦			
25	4	三次市	三若町	川西1		箱式石棺							D，H多数・④		1・④	
26	4	三次市	三若町	川西2		箱式石棺			X1	X1				丸EX4		1・⑥
27	4	三次市	三若町	川西4		箱式石棺（礫床）			H3							
28	13	三次市	三良坂町	植松1	古墳時代中期	土坑（木棺）	B主体						I84・②L		1・②L	
29	14	三次市	三良坂町	植松4	6c前半	箱式石棺										曲1・③
30		三次市	吉舎町	片野中山10	5c末～6c前半	土坑									1・④	
31		三次市	吉舎町	大番奥池2	6c前半	土坑（木棺）	SK1								1・①	曲2・⑤R（棺外側辺）
						土坑（木棺）	SK2									曲1・⑤（棺蓋上）
32		三次市	吉舎町	大番奥池3	6c前半	土坑（木棺）	SK3								1・⑤	
33	15	三次市	吉舎町	燎東	6c前半	土坑（木棺）	SK2								1・②	
34		三次市	吉舎町	下矢井南4	4c末～5c初	粘土槨（割竹形木棺）	SK1								2・④	
						粘土槨（割竹形木棺）	SK2								1・④	
						粘土槨（割竹形木棺）	SK3								1・④	1・④
35	16	三次市	吉舎町	寺津2	6c前葉	土坑（木棺）			$E_1$1・②C	C7，$E_1$1，$E_3$1・②C					1・②L	
36		三次市	甲奴町	茶臼	5c中頃	箱式石棺	SK2	○					D16・①			
37	17	庄原市	板橋町	御盆西2	5c中頃	土坑（木棺）			H1・⑦		H18・⑦					
38	18	庄原市	板橋町	大風呂	5c末～6c初	土坑（木棺？）									1・②L，orR	
39	19	庄原市	平和町	西ケ迫15	5c後半	箱式石棺				I1・④						
40	20	庄原市	本村町	月貞寺30	6c前半	竪穴式石室（礫床）	B主体								1・①C～R	
41	21	庄原市	上原町	馬立2	6c前半	竪穴式石室（箱式石棺状）			B2・③ F1・③	C2・③			D15・③		1・③	
42		庄原市	口和町	稲干場2	6c前半	土坑				C1・④						
43	22	庄原市	東城町	大迫山1	4c中葉	竪穴式石室（割竹形木棺）			$A_1$1・①R	C7・①R			D21・①R			
44	23	庄原市	東城町	中央山1	5c後半	石蓋土坑	B主体								1・⑤（頭右粘土内）	
45	24	庄原市	東城町	中央山2	5c後半	箱式石棺										曲1・①R
46	25	庄原市	東城町	川東大仙山10	6c前半	土坑	第1主体		C1・⑦	C9・⑦			D61・⑦	算盤玉F1・⑦		
						土坑	第2主体									槍1・⑤（小口検出面）
47	26	庄原市	東城町	犬塚2	5c末～6c初	土坑									1・⑤（13cm浮く）	
48		庄原市	高野町	岡東2	5c	土坑（礫床）									1・⑤	
49	27	神石高原町	高光	庶の口	4c後半	竪穴式石室				C1・⑦						
50	28	三原市	本郷町	みたち1	5c中頃	箱式石棺		女・壮～熟年							1・②L	

No.	文献*	所在地		古墳名	時期	埋葬施設 内容	埋葬施設 名称	出土人骨**	玉類*** 勾玉	玉類*** 管玉	玉類*** 臼玉	玉類*** 棗玉	玉類*** 小玉	玉類*** その他	農工具*** 刀子	農工具*** 鉄鏃
51	29	三原市	本郷町	みたち２	５ｃ末～６ｃ初	竪穴式石室				C１・④ $E_1$２・④			D42・④		１・⑦	
52	30	三原市	小坂町	貝持山	５ｃ	箱式石棺		男・壮年					D３・③		１・①R	
53	31	三原市	沼田西町	福礼	５ｃ中頃	粘土槨（割竹形木棺）									１・①R	
54	32	尾道市	御調町	後口山	５ｃ中頃～末	箱式石棺		○		C４・①			D３・①			
55	33	府中市	元町	山の神１	４ｃ	箱式石棺	１号主体	○		C２・③/⑦			D36・⑦			
						箱式石棺	２号主体	男・壮年 女・壮年	F１・②	C８・①～②			D54・①～②		２・①（10cm浮く）	
56	34	府中市	元町	山の神２	４ｃ後半	箱式石棺		女&男・壮年							１・①L	
57	34	府中市	元町	山の神３		箱式石棺	第１主体部	小児２		C７・①			D４・①			
58	35	府中市	元町	池ノ迫	６ｃ後半	土坑（木棺）									１・⑦	摘１・⑦
59	36	府中市	鵜飼町	打畑山Ｂ－１		土坑										直１・①or③
60	37	福山市	新市町	城山２		土坑		男・年不明		$E_2$１・②～③			D１・①，４・②～③			
61	38	福山市	新市町	城山４	古墳時代初頭	土坑	第１主体	男・熟年								直１・①C
62	39	福山市	津之郷町	赤羽	５ｃ前半	粘土槨（割竹形木棺）			X１・①C	X13・①C X２・②C			D35・②C D５・①C		１・①	
63	40	福山市	駅家町	才谷３		箱式石棺（礫床）	Ａ主体								１・⑤（頭粘土内）	
64	40	福山市	駅家町	才谷４	５ｃ後半	石蓋土坑	Ｂ主体								１・⑤（頭粘土内）	
						石蓋土坑	Ｄ主体		H１・③			H１・③				
65	41	福山市	駅家町	石鎚権現５	５ｃ前半	礫槨（木棺）		○							１・④	
66	42	福山市	駅家町	法成寺本谷	４ｃ	石蓋土坑	ＳＫ２	男・成年							１・③	
67	43	福山市	駅家町	掛迫６	５ｃ後半	竪穴式石室	南側石室	○（南）	$A_1$１・①				D17・①			
68	44・45	福山市	神辺町	亀山１	５ｃ前半	土坑（粘土槨・割竹形木棺）			B１・②R C１・③ H65・③	$E_1$２・②R			D22・① H699・③		８・③， ５・②	曲２・③
69	46	福山市	神辺町	国成	５ｃ	粘土槨（礫床・割竹形木棺）			$A_1$１・②L	C２・①	H39・①		D13・①	丸ED9・2R～3R	１・①，１・⑤L	摘１・①L
70	47	福山市	神辺町	道上２		土坑（割竹形木棺）	北側土坑								１・⑤（頭棺上か）	
71	48	福山市	神辺町	道上５		土坑（木棺）	ＳＫ１						D10＋・④		１・①	曲１・①
72	49	福山市	加茂町	石鎚山１	４ｃ後半	竪穴式石室（礫床・割竹形木棺）	第１号主体部	男・壮年	$A_1$３・②L G２・②L	C42・②L					１・①	
						竪穴式石室（礫床・割竹形木棺）	第２号主体部		G１・②R						１・③R	
73	50	福山市	加茂町	石鎚山２	４ｃ末～５ｃ初	土坑（木棺）	第１号主体部	男・熟年							１・⑤（頭小口）	
74	51	福山市	加茂町	吹越１	５ｃ	土坑（木棺）									１・③R	
75	52	福山市	加茂町	吹越２	６ｃ後葉	土坑（木棺）									１・⑤（頭小口）	
76	53	福山市	加茂町	吹越３	５ｃ前半	土坑（木棺）			H２・①	C９・①	H144・①					摘１・①L
77	54	福山市	加茂町	吹越４	５ｃ前葉	土坑（木棺）									２・⑤（棺蓋上？）	曲１・⑤（棺蓋上？）
78	54	福山市	加茂町	吹越５	５ｃ前葉	土坑									１・①or③	
79	55	福山市	加茂町	吹越７	５ｃ	箱式石棺				C１・①L					１・⑦	
80	56	福山市	加茂町	吹越８	５ｃ	石蓋土坑	第２号主体部		H１・①			H26・①				
81	57	安芸高田市	美土里町	向井	６ｃ前半	竪穴式室（箱式石棺状・敷石）									１・②R	
82	58	安芸高田市	八千代町	新宮２	４ｃ後半	箱式石棺	２号主体部			C３・①						
83	58	安芸高田市	八千代町	新宮３	５ｃ前半	土坑	１号主体部								１・①or③	曲１・①or③
84	58	安芸高田市	八千代町	新宮６	４ｃ後半	箱式石棺									１・⑤（頭粘土内）	
85	59	安芸高田市	高宮町	新迫南７	５ｃ後半	土坑（木棺）			B１・⑤（棺上）	C２・⑤（棺上）						
86	60	北広島町	千代田	中出勝負峠１	古墳時代前期末～後期初頭	竪穴式石室（木棺・敷石）		男・熟年ほか１							２・①R	
87	60	北広島町	千代田	中出勝負峠５	５ｃ	箱式石棺		男・熟年							１・③L	
88	60	北広島町	千代田	中出勝負峠８	４ｃ	土坑（木棺）	ＳＫ８－１			C５・①C/R			D３・①C/R			
89	61	北広島町	千代田	金子１	５～６ｃ	石蓋土坑（木棺）		○		C10・①，１・④			D３・①			
90	61	北広島町	千代田	金子２		小型竪穴式石室（現細片敷く）									１・②LorR	曲１・②C
91	62	安芸太田町	中筒賀	横路小谷１	５ｃ前半	土坑（組合式木棺）	第１主体部								１・①or③	
						土坑（割竹形木棺）	第２主体部		B１・①	C４・① $E_2$８・①			D49・①		２・①R／③C（10～20cm浮く）	
						土坑（割竹形木棺）	第３主体部								１・①or③（12cm浮く）	
92	62	安芸太田町	中筒賀	横路小谷２	５ｃ前半	土坑	第１主体部			$E_2$２・④			D10・①or③			
93	62	安芸太田町	中筒賀	横路小谷３	５ｃ前半	土坑（割竹形木棺）									１・①or③	
94	62	安芸太田町	中筒賀	横路小谷４	５ｃ前半	土坑									１・①or③	
95	63	安芸太田町	上筒賀	板迫山１	５ｃ中頃	土坑（割竹形木棺）			X１・④	X２・④			X８・④			
96	64	広島市	安佐南区	芳力谷１	４ｃ	土坑（割竹形木棺）			C２・⑤（頭）	$E_2$21・⑤（頭）			D13・⑤（頭）		１・⑤（頭）	
97	65	広島市	安佐南区	池の内１	５ｃ末～６ｃ初	竪穴式石室？							D167・①～②			
98	65	広島市	安佐南区	池の内３	５ｃ中葉	土坑（割竹形木棺）	Ａ主体		C１・③	D１・①L	H67・③		D75・①L			
99	65	広島市	安佐南区	池の内４	５ｃ後半	竪穴式石室？									１・③L	曲１・⑤（掘方内？）
100	65	広島市	安佐南区	池の内５	５ｃ末～６ｃ初	石蓋土坑？										曲１・⑦
101	66	広島市	安佐南区	寺山３	５ｃ後半	箱式石棺（竪穴式石室状，敷石）									３・③（～10数cm浮く）	曲１・③
102	66	広島市	安佐南区	寺山ｃ主体	５ｃ末	土坑									２・②L	
103	66	広島市	安佐南区	寺山ｄ主体	～５ｃ前葉	箱式石棺										直１・①L
104	67	広島市	安佐南区	権地	５ｃ	箱式石棺（竪穴式石室状）	Ｂ主体								１・⑤（足左）	曲１・⑤（足左）

No.	文献*	所在地		古墳名	時期	埋葬施設 内容	埋葬施設 名称	出土人骨**	玉類*** 勾玉	玉類*** 管玉	玉類*** 臼玉	玉類*** 棗玉	玉類*** 小玉	玉類*** その他	農工具*** 刀子	農工具*** 鉄鏃
105	68	広島市	安佐南区	白山２	６ｃ前半～中葉	箱式石棺		○	Ｃ１・⑦	Ｃ２・⑦					１・⑦	
106	69	広島市	安佐南区	空長１	５ｃ後半	竪穴系横口式石室							Ｄ11・③R			
107	70	広島市	安佐南区	空長２	５ｃ末～６ｃ初	箱式石棺									２・①L，１・③L	曲２・①L／②R
108	71	広島市	安佐南区	空長４	５ｃ後半	竪穴系横口式石室									１・②R	
109	72	広島市	安佐南区	大町七九谷	５ｃ初頭	土坑（割竹形木棺）									１・⑤R	
110	73	広島市	安佐北区	大明地１	４ｃ末～５ｃ初	土坑（木棺）				$E_1$１・①			Ｄ81・①			
111	73	広島市	安佐北区	大明地２	５ｃ前半	土坑（木棺）	１号主体部								２・①/①	曲１・⑤（足）
112	74	広島市	安佐北区	道川１	５ｃ	粘土槨（割竹形木棺）							Ｄ２・①～②			
113	75	広島市	安佐北区	中小田１	４ｃ後半	竪穴式石室（木棺）			$A_1$２・① Ｆ１・①	Ｃ約30・①				算盤玉Ｆ５・①		
114	76	広島市	安佐北区	中小田２	５ｃ後半	竪穴式石室（礫床・木棺）									１・⑤L	３・⑤L（曲２・摘１）
115	77	広島市	安佐北区	中小田９	５ｃ	箱式石棺	第２号箱式石棺		Ｈ４・⑥	Ｃ２・⑥			Ｄ18・⑥			
116	78	広島市	安佐北区	地蔵堂山１	５ｃ中葉～後半	土坑（木棺）									１・⑤(右中央棺外上)	曲１・⑤（右中央棺外上）
117	79	広島市	安佐北区	真亀１	５ｃ	粘土床＋割竹形木棺									２・①	
118	80	広島市	安佐北区	原下１	５ｃ中頃	土坑（木棺）			Ｂ３・⑤（棺上） $A_2$２・⑤（棺上）	Ｃ１・⑤（棺上） Ｄ１・⑤（棺上）			Ｄ159・⑤（棺上） Ｈ24・⑤（棺上）			曲１・⑤（棺上方）
119	80	広島市	安佐北区	原下２	５ｃ後半	土坑（礫床・木棺）					Ｈ139・④					曲１・⑤（棺上方）
120	81	広島市	安佐北区	弘住２	５ｃ後葉～６ｃ前葉	礫床＋割竹形木棺					Ｈ９・①		Ｄ1731・①			摘１・⑥
121	82	広島市	安佐北区	弘住３		竪穴式石室（礫床・木棺）									１・⑤	
122	83	広島市	安佐北区	虹山	５ｃ前半～中葉	土坑（割竹形木棺）	１号主体						Ｄ５・①		１・③C	
123	84	広島市	安佐北区	上小田	５ｃ中葉	箱式石棺（礫床）										直１・③L
124	85	広島市	安佐北区	諸木	５ｃ後半～６ｃ前半	土坑（木槨・礫床・木棺）	第１主体部						Ｄ９・④			曲１・⑤（棺方上面）
125	86	広島市	安佐北区	可部寺山２	５ｃ前半	土坑（割竹形木棺か）							Ｄ10・⑤（頭）		１・⑤L	
126	86	広島市	安佐北区	可部寺山３	５ｃ中葉～後半	土坑（割竹形木棺か）									２・①L／②L	曲１・⑤（頭L）
127	87	広島市	安佐北区	可部寺山６	５ｃ中葉～後半	土坑（割竹形木棺か）										曲１・①Cor③C
128	88	広島市	東区	須賀谷１	５ｃ中葉～後半	箱式石棺	ＳＫ１		$A_1$１ Ｃ１	Ｃ15			Ｄ96	算盤玉Ｂ２		
129	89	広島市	東区	須賀谷２	５ｃ後半	土坑	第１主体部		$A_2$１・②	Ｃ１・②			Ｄ78・②			
						土坑	第２主体部						Ｃ１・④		１・⑤（棺外上）	
130	90	広島市	佐伯区	月見城ＳＴ２	５ｃ後半～６ｃ初頭	土坑（木棺）	ａ主体部		$A_1$１・③							
131	90	広島市	佐伯区	月見城ＳＴ３		土坑（木棺）	ｂ主体部								１・①R	
132	90	広島市	佐伯区	月見城ＳＴ11		土坑			Ｂ１・④	Ｃ１・④			Ｄ６・④			
133	91	広島市	佐伯区	城ノ下１	５ｃ後半	土坑（割竹形木棺）				Ｘ１・②C			Ｄ１・④		２・③R，１・②C（10cm浮く）	曲１・③L（10cm浮く）
134	91	広島市	佐伯区	城ノ下４	５ｃ末	土坑（木棺）									１・①L	
135	91	広島市	佐伯区	城ノ下５	５ｃ後半	箱式石棺		男・熟年							１・③L	
136	92	海田町	東海田	上安井	４ｃ	竪穴式石室（木棺）	埋葬施設１			Ｃ１・②C			Ｄ１・②C			直１・⑤（頭左）
						土坑（木棺）	埋葬施設２								１・③	
137	93	東広島市	高屋町	才が迫１	４ｃ初頭	竪穴式石室	第１主体部		Ｂ２・①R～②R	C12・①R～$\frac{2}{3}$R $E_3$3・①R～$\frac{2}{3}$R						
138	94	東広島市	高屋町	森信10	６ｃ前半	竪穴式石室（箱式石棺状）									１・④	
139	95～100	東広島市	西条町	三ツ城１	５ｃ後半～６ｃ初	竪穴式石槨（箱式石棺）	１号棺	○	Ｊ１・①	Ｋ14・② Ｊ２・②						
						竪穴式石槨（箱式石棺・礫床）	２号棺	男・熟年	Ｂ１・①			Ｇ１・①		丸玉Ｇ２・①	２・①R	
						箱式石棺	３号棺		Ｇ１・①			Ｇ１・①		丸玉Ｇ３・①		
140	101	東広島市	西条町	古市	６ｃ後半	竪穴式石室				Ｃ２・①or③			Ｄ７・①or③	平玉Ｆ１・①or③，切子玉Ｆ２・①or③，算盤玉Ｆ１・①or③	２・④	
141	102	東広島市	西条町	大槙３	５ｃ前半	箱式石棺（敷石）	１号石棺								１・④	１・④
142	103	東広島市	八本松町	脇が迫１	古墳時代前半	竪穴式石室（礫床）									２・④	
143	104	東広島市	志和町	蛇迫１	４ｃ末	土坑（粘土槨・割竹形木棺）	第１主体部						Ｄ1・⑤(粘土上)		１・①L	
144	105	東広島市	志和町	蛇迫２	５ｃ前半	土坑（粘土槨・割竹形木棺）									１・①	
145	106	東広島市	豊栄町	草津１	古墳時代前半	箱式石棺（礫床）			Ｂ４・④ Ｃ３・④	Ｋ32・④			Ｋ11・④	丸玉Ｄ１・④		
146	107	東広島市	豊栄町	山王４		土坑（割竹形木棺）	ＳＫ１								１・④	
147	108	東広島市	福富町	金口２	６ｃ前半	石蓋土坑										摘１・⑤（頭蓋石上）
148	109	東広島市	福富町	金口４	６ｃ初頭	箱式石棺（敷石）									１・②L	

＊　・空欄はいずれも以下の年度に（財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って発掘調査を実施した。
平成18年度＝№４・31・32，平成19年度＝№６～８・30・34・42，平成20年度＝№36・48。

＊＊　・出土人骨の年齢＝小児；６～15才，成年；16～20才，壮年；20～39才，熟年；40～59才
（谷畑美帆・鈴木隆雄『考古学のための古人骨調査マニュアル』 学生社　2004年，による。）

＊＊＊・玉類の石材の記号＝A_1：硬玉，A_2：翡翠，Ｂ：瑪瑙，Ｃ：碧玉，Ｄ：ガラス，E_1：凝灰岩，E_2：緑色凝灰岩，E_3：珪質凝灰岩，Ｆ：水晶，Ｇ：琥珀，Ｈ：滑石，Ｉ：土，Ｊ：流紋岩，Ｋ：蛇紋岩，Ｘ：不明。なお，石材の記号のあとの数字及び鉄器の最初の数字は出土点数を示す。
・出土位置＝①：頭部周辺，②：胴部周辺，③足部周辺，④棺内，⑤棺外・棺上など棺外部周辺，⑥出土位置不明，⑦攪乱・原位置移動が確認されるもの（①～③は頭部から見て左半を「L」，右半を「R」とする）。なお，出土位置の記号の下に―があるものは床面直上（０～10cm上位）遺物，下線がないものは10cm以上浮いて出土したもの。

文献

1　三次市教育委員会「下山手第４号古墳」『下山手第４・５号古墳』 1994年
2　三次市教育委員会「第11号古墳」『野稲南第８～11号古墳』 2004年
3　本村豪章「備後三次市太郎丸古墳調査報告」『古代吉備』第４集　1961年
4　広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会編『広島県双三郡三次市史料総覧』第五篇　1974年
5　三次市教育委員会「宗祐池西第20号古墳」『宗祐池西遺跡』 2000年
6　三次市教育委員会『掛原下第７号古墳』 2002年
7　広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』 1983年
8　広島県教育委員会「大久保遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（２） 1979年
9　大坂遺跡発掘調査団『大坂遺跡』 1985年
10　四拾貫小原発掘調査団「第１号古墳」『四拾貫小原』 1969年
11　広島県教育委員会「上四拾貫古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（１） 1978年
12　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「上定古墳群の調査」『大判・上定・殿山』 1987年
13　河瀬正利・向田裕始「双三郡三良坂町植松第１号古墳発掘調査報告」『芸備』第３集　芸備友の会　1975年
14　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「植松第４号古墳」『植松遺跡群』 1987年
15　吉舎町教育委員会『燎東古墳』 1995年
16　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（Ⅰ） 1994年
17　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「第２号古墳」『御堂西古墳群発掘調査報告』 1984年
18　広島県教育委員会『大風呂古墳発掘調査概報』 1976年
19　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「西ケ迫第15号古墳」『西ケ迫古墳群』 1983年
20　広島県教育委員会「月貞寺古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（１） 1978年
21　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「清水３号遺跡」『浅谷山東Ｂ地点遺跡　清水３号遺跡』 1998年
22　広島県東城町教育委員会　広島大学文学部考古学研究室『広島県比婆郡東城町　大迫山第１号古墳発掘調査概報』 1989年
23　広島大学文学部考古学研究室「中央山第１号古墳」『中央山古墳群の発掘調査』 1978年
24　広島大学文学部考古学研究室「中央山第２号古墳」『中央山古墳群の発掘調査』 1978年
25　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「川東大仙山第10号古墳」『川東大仙山第10・11号古墳』 1994年
26　犬塚古墳群発掘調査団「犬塚第２号古墳」『犬塚古墳群発掘調査報告書』 1980年
27　広島県神石町教育委員会　広島大学文学部考古学研究室『辰の口古墳』 1995年
28　財団法人広島県教育事業団『みたち第１号古墳』 2006年
29　財団法人広島県教育事業団「みたち第２号古墳」『みたち第２・３号古墳』 2004年
30　三原市教育委員会『貝持山古墳の発掘調査』 1982年
31　広島県教育委員会『福礼古墳発掘調査報告』 1973年
32　御調町教育委員会「御調町後口山古墳発掘調査概報」『御調郡御調町高尾古墳発掘調査報告』 1971年
33　府中市教育委員会『山ノ神１号古墳発掘調査報告』 1983年
34　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「山の神遺跡群」『山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群』 1998年
35　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「池ノ迫遺跡群」『山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群』 1998年
36　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「打堀山遺跡群Ｂ地点」『打堀山遺跡群Ａ・Ｂ地点』 1997年
37　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山Ｂ遺跡」『城山』 1996年
38　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山Ａ遺跡」『城山』 1996年
39　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「赤羽遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅵ） 1991年
40　広島県教育委員会「才谷遺跡群」『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1976年
41　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚権現第５号古墳の調査」『石鎚権現遺跡群発掘調査報告』 1981年
42　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「法成寺本谷古墳」『法成寺サコ遺跡　法成寺本谷古墳』 1998年
43　掛迫古墳調査団「備後掛迫古墳」『芸備文化』第５．６合併号　1956年
44　広島県教育委員会『亀山遺跡－第１次発掘調査概報－』 1982年
45　広島県教育委員会『亀山遺跡－第２次発掘調査概報－』 1983年
46　神辺町教育委員会『国成古墳』 1965年
47　財団法人広島県教育事業団「道上第２号古墳」『道上第２・３・５号古墳，門前２号遺跡』 2004年
48　財団法人広島県教育事業団「道上第５号古墳」『道上第２・３・５号古墳，門前２号遺跡』 2004年
49　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚山第１号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
50　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚山第２号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
51　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第１号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
52　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第２号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
53　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第３号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
54　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第４・５・６号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
55　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第７号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
56　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第８号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
57　広島県教育委員会「向井古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（３） 1982年
58　八千代町教育委員会『新宮遺跡群発掘調査報告書』 2000年
59　広島県教育委員会「新迫南遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（２） 1979年

60　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「中出勝負峠墳墓群」『歳ノ神遺跡群　中出勝負峠墳墓群』 1986年
61　広島県教育委員会「金子古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（３） 1982年
62　広島県教育委員会「横路小谷古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（３） 1982年
63　広島県教育委員会「板迫山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（３） 1982年
64　広島市教育委員会「芳カ谷遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』 1984年
65　広島市教育委員会『池の内遺跡発掘調査報告』 1985年
66　財団法人広島市歴史科学教育事業団『寺山遺跡発掘調査報告』 1997年
67　広島市教育委員会「権地遺跡」『九郎杖遺跡　権地遺跡発掘調査報告』 1984年
68　広島県教育委員会「白山２号古墳」『白山城跡発掘調査概報』 1973年
69　広島市教育委員会「第１号墳」『空長古墳群発掘調査報告』 1978年
70　広島市教育委員会「第２号墳」『空長古墳群発掘調査報告』 1978年
71　広島市教育委員会「第４号墳」『空長古墳群発掘調査報告』 1978年
72　財団法人広島市文化財団「大町七九谷古墳」『大町七九谷遺跡群』 1999年
73　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅳ） 1987年
74　広島市教育委員会「第１号古墳」『高陽台遺跡群発掘調査報告』 1982年
75　広島市教育委員会　広島大学文学部考古学研究室「中小田第１号古墳」『中小田古墳群』 1980年
76　広島市教育委員会　広島大学文学部考古学研究室「中小田第２号古墳」『中小田古墳群』 1980年
77　広島市教育委員会　広島大学文学部考古学研究室「中小田第９号古墳」『中小田古墳群』 1980年
78　広島県教育委員会「地蔵堂山古墳群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
79　広島県教育委員会「真亀Ｄ地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
80　広島県教育委員会「恵下Ｂ地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
81　広島市教育委員会「第２号古墳」『弘住遺跡発掘調査報告』 1983年
82　広島市教育委員会「第３号古墳」『弘住遺跡発掘調査報告』 1983年
83　虹山古墳発掘調査団『虹山古墳発掘調査報告』 1989年
84　本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究』第二号　広島考古学会　1960年
85　広島県教育委員会「諸木古墳」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
86　財団法人広島市文化財団『可部寺山１号遺跡』 2004年
87　財団法人広島県教育事業団「可部寺山第６号古墳」『寺山城跡』 2004年
88　本村豪章「広島県安芸郡温品須賀谷古墳調査報告」『芸備地方史研究』第34号　芸備地方史研究会　1960年
89　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「須賀谷古墳群」『須賀谷古墳群・畳谷東遺跡発掘調査報告書』 1985年
90　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「月見城遺跡」『月見城遺跡』 1987年
91　財団法人広島市歴史科学教育事業団「城ノ下古墳群」『城ノ下Ａ地点遺跡発掘調査報告』 1991年
92　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上安井古墳発掘調査報告書』 2001年
93　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「才が迫遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅸ） 1993年
94　東広島市教育委員会『森信第10号古墳発掘調査報告書』 1990年
95　広島県教育委員会『三ツ城古墳』 1954年
96　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第１年次発掘調査概報－』 1990年
97　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第２年次発掘調査概報－』 1989年
98　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第３年次発掘調査概報－』 1990年
99　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第４年次発掘調査概報－』 1991年
100　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第５年次発掘調査概報－』 1991年
101　広島県教育委員会　（財）広島県埋蔵文化財調査センター「古市古墳」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（１） 1983年
102　建設省中国地方建設局広島国道工事事務所　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大槙第３号古墳」『大槙遺跡群』 1985年
103　広島県教育委員会「広島県賀茂郡八本松町藤が迫遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第９集 1971年
104　財団法人東広島市教育文化振興事業団「蛇迫第１号古墳」『蛇迫第１～４号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書』 2005年
105　財団法人東広島市教育文化振興事業団「蛇迫第２号古墳」『蛇迫第１～４号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書』 2005年
106　広島県賀茂郡豊栄町教育委員会「草津１号古墳」『広島県賀茂郡豊栄町埋蔵文化財基礎調査報告』 1972年
107　豊栄町教育委員会『山王４・５・６号古墳』 1994年
108　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第２号古墳」『金口古墳群』 1997年
109　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第４号古墳」『金口古墳群』 1997年
110　本村豪章「備後三次市畑原開山９号古墳」『古代吉備』第５集　古代吉備研究会　1963年
111　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺山第１～４号古墳」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（Ⅴ） 2003年
112　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『岡田山第３号古墳発掘調査報告』 1984年
113　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「打堀山遺跡群Ａ地点」『打堀山遺跡群Ａ・Ｂ地点』 1997年
114　寺山遺跡発掘調査団「寺山１号古墳」『寺山遺跡発掘調査報告』 1979年

115　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚権現第３号古墳」『石鎚権現遺跡群・茜ヶ峠遺跡発掘調査報告』 1985年
116　広島県教育委員会『石鎚権現古墳群発掘調査報告－第６・７・８号古墳－』 1981年
117　広島県教育委員会　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『長迫遺跡発掘調査報告』 1982年
118　財団法人広島県教育事業団「道上第３号古墳」『道上第２・３・５号古墳，門前２号遺跡』 2004年
119　吉田町　吉田町教育委員会　吉田町開発公社「第２号古墳」『高田郡吉田町　日南山古墳の発掘調査』 1974年
120　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大久保古墳」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅳ) 1987年
121　広島県教育委員会「山手遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
122　広島県教育委員会「木原向山第３号古墳」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』 1975年
123　広島県教育委員会　広島県開発局「豊ヶ崎古墳」『賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報』 1972年
124　広島県教育委員会　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「八幡山大池古墳」『道照遺跡』 1982年
125　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第６号古墳」『金口古墳群』 1997年

V まとめ

権現第１～３号古墳は，三次市中央部の江の川水系馬洗川北岸に位置する。狭小な谷平野を望む北から南に延びた低丘陵上に立地する。今回発掘調査した３基の古墳は丘陵先端側に36～50mの間隔で築かれた径13m，高さ２m（第１号古墳），径20m，高さ３m（第２号古墳）といった規模の大きな円墳と径10m程度の不明確な墳丘の第３号古墳からなる。なお，権現古墳群は計８基の古墳からなり，所在が不明な第７号古墳を除く４基が第１～３号古墳の北側（丘陵尾根の基部側）に位置している。以下においては，立地・墳丘・埋葬施設・副葬品について個別に検討し，県内例との比較を通して，本古墳群の性格や築造年代などについて若干の考察を加えたい。なお，以下における分析では県内の主な前・中期古墳との比較検討のうち，立地や埋葬施設の主軸方位・尾根線との関係・墳形・墳丘規模については第４表にみられる古墳・埋葬施設例との，また副葬品の分析に関しては，第５表に明らかなように，平成21年２月現在筆者の把握できた玉類・刀子・鎌を出土した古墳・埋葬施設例とのそれぞれ比較検討によっている。第４表と第５表に記載した古墳・埋葬施設は８，９割方一致しているが，多少の出入りがある。第４表は計166基の古墳（計197基の埋葬施設），第５表は計148基の古墳（計165基の埋葬施設）を記載している。両表ともに記載されている古墳は計138基（埋葬施設は計155基）で，逆に第４表のみに記載された古墳は計28基（埋葬施設は計42基）で，第５表のみに記載された古墳は計10基（埋葬施設計10基）である。各表においては，基本的に備後北部（三次市・庄原市など），備後南部（福山市・府中市など），安芸北部（安芸高田市・北広島町など），安芸南部（広島市・東広島市など）の順に並べているが，本来安芸南部に入るべき三原市本郷町は備後南部に含めている。

（１）立地　古墳群が立地する丘陵の東西両側には細長い谷が南側から入り込んでおり，南側前面には400m四方の平野部が広がる。本古墳群は馬洗川北岸，国兼川西岸の丘陵地帯中央の盆地状に広がる狭小な平野部を南に望み，周囲の丘陵上には多くの古墳が存在する。西～北側の丘陵には四拾貫古墳群・上四拾貫古墳群が，南西側の馬洗川北岸に沿う丘陵には弥生時代中期の四隅突出型墳丘墓群の陣山遺跡や陣山古墳群，国兼川を挟んだ南東方向には比較的広い向江田の平野を前面に望む丘陵上に箱山古墳群・宮の本古墳群などの有数な古墳群や寺町廃寺跡・上山手廃寺跡といった古代寺院跡が存在し，古墳時代から古代にかけて馬洗川北岸一帯の四拾貫・向江田・和知町域にいくつかの有力者層の存在が窺える地域である。

権現古墳群が立地する丘陵は周辺の平野部からの比高20m程度の低位な丘陵で，その頂部の丘陵端部付近に第１号古墳，その50m北側に最大規模の第２号古墳，その36m北側に第３号古墳が位置する。第３号古墳の東側に隣接して第４号古墳，第３号古墳の北55～70mに第５・６号古墳，同じく北90mには第８号古墳が存在する。丘陵頂部に数10mの間隔をおいていずれも円墳が築か

れている。未調査の第４～６・８号古墳は径７～12m程度の円墳と考えられており，今回発掘調査を実施した３基のうち，丘陵南端側の第１・２号古墳が規模としては大きい。

県内例の前・中期古墳では，周辺の平野部からの比高が10～40mの比較的低位あるいは50～60mとやや高位の丘陵上に立地するものが多い。権現古墳群がある備後北部地域では比高10～30mと40～50mが中心で，この傾向は安芸南部と似ている。一方，備後南部は比高10～30mの低丘陵上に立地するものが多く，比高40m以上の比較的高位の丘陵上に立地するものは殆どない。安芸北部ではこの備後南部と比較的似た傾向を示しており，比高20～40mの備後南部に較べると全体に高位傾向ではあるものの，この地域としては低位の丘陵上に立地するものが殆どで，比高30mを越す高位の丘陵に立地するものは少ない。

これらの古墳の多くは丘陵端部にあるものを含めて丘陵頂部付近に丘陵尾根線に沿って列状に造られている。一部には，丘陵頂部から斜面側の傾斜変換点付近に立地するものもみられるが，強く傾斜する斜面上に立地する古墳は殆どみられない。

（２）墳丘の構造　３基とも周溝や墳丘裾の列石，墳丘斜面の葺石などの外表施設を一切もたない。第１・２号古墳は盛土のみで墳丘を形成しており，第３号古墳は盛土の存在も明確でない。第１号古墳は厚さ90cm，第２号古墳は厚さ156cmの盛土（いずれも最大値）を行っており，いずれも丘陵頂部に周囲を削り落として墳丘の基盤面を形成するとともに盛土に用いる土を確保している。そして，この墳丘の基盤の上に盛土を行って墳丘を造成している。盛土に使われた土は３～４種類の良質のものを選別しながら採取し，盛土に際しては墳丘の中心部や墳丘上方により良質で色調的にも映える土を盛り，墳丘の下層や外周にはやや土質の劣る，色のくすんだ土を用いている。第１号古墳と第２号古墳は盛土の仕方は似ているが，細かい点で差異がみられる。両古墳とも旧表土上面を基盤とした上に盛土を行っているが，第１号古墳は基盤の中央に明黄褐色土を基調とした盛土Ⅱを主体的に盛って径6.3m，高さ0.7mの小丘を造り，その小丘の墳丘外寄りに土手状に盛土を行う。こうしてできた小山状の核の上に淡黄褐色土の盛土Ⅰを被覆する。一方，第２号古墳では旧表土上面を基盤としてその上に淡黄褐色土の盛土Ｂを主体に6.8m×7.6m，高さ0.6～0.7mの小山状の核を造り，盛土Ｂの小山の外側を被覆するように盛土Ｃを土手状に盛る。こうしてできた墳丘の核の頂部の深さ0.6～0.9mほどの凹みに盛土Ｃに類似する盛土Ｄを入れて，土手状盛土の頂部に高さが揃う水平な盛土面が形成される。その水平面の上に明黄褐色土の盛土Ａを被覆し，この作業と並行あるいは前後して埋葬施設の構築が行われる。このように，基盤の上に周辺を削平して選別的に採取した黄褐色土系の土壌を盛って小山状の墳丘の核を形成し，その外寄りに土手状の盛土を行うまでは同じだが，第２号古墳では墳丘の小山状の核の頂部にできた凹みに土を積んで水平な盛土面を形成するのに対して，第１号古墳では墳丘の核の頂部は水平でなく丸みをもつ。このことは，墳丘の小山状の核の凹み状の頂部にもう一段階の盛土を行って水平面を造る工程が加わることで，より強固な埋葬施設の構築面が形成されることを示しており，埋葬施設の数や規模，墳丘規模との関連もあるとみられる。このような小山状の核とその周縁に

土手状の盛土を造り，その頂部の凹みに盛土することで水平な盛土面を築きながら墳丘を形成する工法を青木敬氏は「西日本的工法」と呼び，弥生時代の方形周溝墓以降，古墳時代前期を中心に中期にかけて主にみられるとしている[(1)]。

（３）埋葬施設　第１号古墳は墳頂部が盗掘など後世の攪乱を大きく受けており，埋葬施設は検出できなかった。第２号古墳の墳頂部で箱式石棺墓５基，第３号古墳の墳頂部で箱式石棺墓２基を検出した。

①主軸方位　第２号古墳の計５基の埋葬施設のうち，時期的に先行するＳＫ１・４・５は主軸が西北西－東南東あるいはほぼ東西方向を指し（N63°Ｗ・N80°Ｗ・N90°Ｗ），後出的なＳＫ２・３は主軸がほぼ南北方向を指す（Ｎ９°Ｗ・Ｎ８°Ｗ）。前者はほぼ南北に延びる丘陵軸線に対して埋葬施設の主軸が直交し，後者は平行する。第３号古墳のＳＫ１・２は主軸が北西－南東あるいは北北西－南南東方向を指し（N49°Ｗ・N24°Ｗ），丘陵軸線に対して斜交している。

広島県内の玉類・刀子・鎌を出土する古墳を主体とする計197基の前・中期古墳（４～６世紀前半中心）の埋葬施設の例と比較検討を加える（第４表）。先ず，地域別にみていくと，備後北部では全体的に主軸方位はＮ０°～90°Ｗを主体に，一部N60°～90°Ｅに集まる。時期別では，４世紀代はN15°～49°Ｗの範囲に納まり，５世紀になるとＮ０°～90°Ｗを主体にN50°～90°Ｅにも部分的にみられるが，特にN40°～90°Ｗ・N90°Ｅ付近に集中する。６世紀前半の古墳はN60°～90°ＷとN60°～90°Ｅ付近に比較的集まる。尾根線との関係は全体としては平行するものと直交するものがほぼ同数だが，４世紀代は５基すべてが尾根線に平行で，５世紀代には両者がほぼ同数となる。６世紀代は直交するものが増える。備後南部では全体的にはＮ０°～90°Ｅ，特にN25°～70°Ｅ付近に重心があるものの，一定度Ｎ０°～90°Ｗにも散在する。４世紀代はＮ０°～60°Ｅにほぼ集中し，５世紀代はＮ０°～90°ＷとN25°～80°Ｅに散在的にみられる。６世紀代前半は例数が殆どなく不明である。尾根線との関係は，全体としては平行するものと直交するものとがほぼ同数だが，尾根線に平行する墓坑の主軸方位はN20°～70°Ｅに集まるが，Ｎ０°～90°Ｗにも散在的ながら一定度みられる。これに対して，尾根線に直交するものはN30°～45°Ｅ・N80°～90°Ｅに比較的集まる傾向がみられる。４世紀代は尾根線に平行するものが直交するものよりやや多いが比較的拮抗している。５世紀代は両者がほぼ同数で，６世紀前半は例数が少なく不明である。安芸北部は全体的にはN30°～90°Ｅにほぼ納まる。４世紀代はＮ０°～40°Ｅとやや北寄りの傾向を示し，５世紀になるとN50°～90°Ｅと南寄りになる。６世紀前半には例数が少ないが，N30°～70°Ｅの範囲に納まる。尾根線との関係では，全体的には尾根線に直交するものが殆どで，平行するものはあまりみられない。４世紀代と６世紀代前半は例数が少なく明確ではないが，５世紀代は直交するもの12基に対して平行するものは１基にすぎない。安芸南部では全体としてはN30°～90°Ｅを主体に，Ｎ０°～90°Ｗの範囲にも散在的にみられる。特に尾根線に平行するものは全体としては分散的だが，直交するものはN50°～90°Ｅの範囲にほぼ納まる。４世紀代はN36°～46°Ｗ（北西－南東），N37°Ｅ（北東－

南西）の３基は尾根線に平行，N87°ＷとN53°～90°Ｅに集まる６基のうちの５基は尾根線に直交するというはっきりした傾向が窺える。５世紀代はN30°～90°Ｅを主体に，Ｎ０°～90°Ｗにも散在的にみられる。６世紀前半代にはN65°～90°Ｗ・N65°～80°Ｅの西北西－東南東あるいは東北東－西南西方向を示す。尾根線との関係では，全体としては平行するもの，直交するものと斜交するものがほぼ同数で，例数の少ない６世紀前半を除いて４世紀代・５世紀代と同じ傾向が窺える。

以上をまとめてみると，埋葬施設の主軸方位の点では，時期を問わず，備後北部のみは北西－南東方向を中心とした西寄りの方位（Ｎ０°～90°Ｗ）を示すが，ほかの備後南部・安芸北部・安芸南部の３地域では，北東－南西方向を中心とした東寄りの方位（Ｎ０°～90°Ｅ）を示す。また，尾根線と埋葬施設の主軸の関係では，時期・地域を問わず多くの場合，尾根線と平行するものと直交するものはほぼ同数であるが，一部例外もみられる。即ち，４世紀代の備後北部・南部は平行，５世紀代の安芸北部では直交がそれぞれ主体的である。そのほかの４世紀代の安芸地域（北部・南部），５世紀代の備後地域（北部・南部）・安芸南部では平行・直交（安芸南部では斜交を含めて）がほぼ同数である。なお，古墳時代に先行する弥生時代の墳墓では，備後地域では墓坑の主軸が尾根線に直交あるいは斜交し，北西－南東方向を指すものが比較的多い。一方，安芸地域では尾根線に直交するものが平行するものに較べて多く，墓坑の主軸は東西方向を指すものが主体であるという傾向が窺われている。[(2)]

②構築面　主として第２号古墳の埋葬施設について，その構築面を検討する。第２号古墳の埋葬施設は墳頂部の径４ｍほどの範囲に構築されていた。主軸がほぼ東西方向を指す南西側のＳＫ１・４・５の３基と主軸がほぼ南北方向を指す北東側のＳＫ２・３の２基に分けられる。前者と後者には石棺構築面に高低があり，それは構築時期という時間差を示していると考えられる。墳頂部の中央に造られているＳＫ１が規模的にも最大で，本古墳の初葬である。このＳＫ１は墓坑を伴わず，墳丘基盤から約80cmの高さの盛土面に石棺を構築し，石棺の構築と並行して周囲に更なる盛土を行って墳丘を形成している。ＳＫ１の南側に近接して造られたＳＫ４・５はこのＳＫ１の少なくとも小口石・側石上面まで盛土が行われたあと，その面から墓坑を掘り込んでその墓坑内に石棺を構築したと考えられる。ＳＫ４・５の小口石・側石上面の高低差は殆どないので，両者は同一の盛土面を掘り込んで石棺を構築したと考えられる。ＳＫ１の小口石・側石の上面はＳＫ４・５のそれより低いので，ＳＫ１の蓋石を構架しその上に若干の盛土を被せたあと，その盛土面から墓坑を掘り込んだ可能性が高く，両者の間には多少の時間差があるとみられる。いずれにしろ，ＳＫ１・４・５の３基は主軸がほぼ等しく，頭位も同じ西側と推定されることから，被葬者間に強い紐帯が窺われると同時に，埋葬時期は近接していると考えられる。一方，これらの北東側に主軸を異にし並列的に構築されているＳＫ２・３はＳＫ１同様，墓坑をもたず，墳丘基盤から約130cmの高さの盛土面に石棺を構築している。小口石・側石上面はＳＫ１のそれより13～16cm高いものの，ＳＫ２・３の石棺構築面はＳＫ１の小口石・側石上面より10数cm低いところにある。ただ，東西方向の土層断面図（第10図Ａ－Ａ′）にみられるように，ＳＫ２・３が構

築されているあたりでは，墳頂部中央のＳＫ１付近では比較的水平な10層の土盛りが西から東に下傾しており，このことからＳＫ２・３がＳＫ１上面に一定度の盛土による被覆がなされた後，多少の時間差をおいて構築された可能性が考えられる。ただ，その時間差はそれほど大きなものではなく，ＳＫ１の東小口を避けるように，これを破壊することなく石棺が構築されていることから，ＳＫ１の存在を十分認識できる状況と時間差のなかで構築されたものと考えられる。ＳＫ２・３はほぼ同一の盛土面に構築されていること，主軸をほぼ等しくすること，用いられている石材の種類や形態，構築法が酷似することからも，同時かごく近接した時期に相次いで構築・埋葬されたものと思われる。

③箱式石棺の構造（第２表） 盗掘を受けたＳＫ１～３は蓋石を失い，さらにＳＫ２・３は北小口側の小口石・側石を倒されたり，抜き取られたりして，その原状を窺い知ることはできない。ＳＫ４・５は盗掘を免れており，蓋石以下すべての石材が残り，原状を保っている。

石棺の規模は，ＳＫ１が内法の長さ178cmと最も大きく，次いで現状の内法の長さが160cm程度のＳＫ２・３，長さ150cmのＳＫ４が続き，小児墓とみられるＳＫ５の長さは68cmである。石棺の石材は，ＳＫ１の石材が最も大きく分厚い（石材の大きさの平均値は，長辺51.5cm×短辺43.3cm×厚さ18.5cm）。次いで，ＳＫ２，ＳＫ４，ＳＫ３，ＳＫ５となる。石材の長辺と短辺の比はＳＫ１が最大で長方形度が最も高く，次いでＳＫ２，ＳＫ３，ＳＫ４，ＳＫ５となる。また，石材の扁平度〔石材の厚さ÷（長辺×短辺＝面積）の値〕は，ＳＫ３が最も高く（つまり分厚い），次いでＳＫ２，ＳＫ５，ＳＫ４，ＳＫ１となり，平面的には最も大きな石材を用いているＳＫ１の石材が，最も扁平な石材であることを表している。このことは，石材の平面的な大きさの平均値の差（長辺で最大17.1cm，短辺で23.5cm）に較べて石材の厚さの平均値の差（最大8.2cm）が小さいことを示している。このような長方形・不整長方形を主とした板石をいずれの石棺も基本的には縦長に用いており，石材を方形・横長に置くものは殆どみられない。ただ，ＳＫ５は頭位側両側石などで主に石材を横長あるいは方形に配している。

小口部における石材の組み方（小口石と両側石の関係）は，ＳＫ２・３の北小口（頭位側と推定）が不明だが，頭位側小口はＳＫ１・４がｃ類（小口石の角と両側石の角を合わせる組み方）で，ＳＫ５はｂ類（頭位側に向かって左側の側石の面に小口石の側面を宛がい，右側は小口石の角と側石の角を合わせる組み方）である。足位側はＳＫ３・４がａ類（小口石を両側石が挟み込む組み方），ＳＫ１がｂ類，ＳＫ５がｂ′類（ｂ類の左右逆で，小口側に向かって右側の側石の面に小口石の側面を宛がい，左側石の角と小口石の角を合わせる組み方），ＳＫ２はｃ類である。即ち，ＳＫ１は頭位側がｃ類，足位側がｂ類，ＳＫ４は頭位側がｃ類，足位側がａ類，ＳＫ５は頭位側がｂ類，足位側がｂ′類の組み方である。ＳＫ２・３の足位側はｃ類とａ類である。

ＳＫ１は第２号古墳の中心的な埋葬施設であり，用いられている石材や石棺規模も最も大きいことは既述のとおりだが，石棺の構築の仕方もほかの石棺と較べて優位性がみられる。石棺が墓坑のなかに造られず，盛土面に周囲の盛土と並行して構築されたことはすでにみたとおりだが，さらに

a　石棺上面（小口石・側石上面）に灰白色粘土を幅広くめぐらせている。
b　床に小円礫を敷いているが，小口石・側石側の礫床下にも灰白色粘土をめぐらせて，礫の安定を図っている。
c　蓋石や小口石・側石の内面にほぼ全面的にベンガラを塗布している可能性が高い。
などである。

第３号古墳の小型の箱式石棺墓についても，簡単に触れておく。いずれも盗掘により，蓋石と北側の小口部分を失っており，南側小口部の小口石と両側石を中心とした検討に限定される。２基の石棺は１ｍ程度の距離にほぼ主軸を揃えて構築されている。主軸はＳＫ１が北西－南東方向，ＳＫ２が北北西－南南東方向を指し，頭位はそれぞれ北西・北北西側と推定される。いずれも墓坑を伴っており，墓坑底面に抜き取られた北側小口部分の石材の痕跡が残されていることから，これらの石棺は内法の長さ１ｍ程度の小型のものであることが分かる。残存する石材は，南側の小口石と２～３枚ずつの両側石である。石材の大きさ（平均値）は，長辺が29.8～36cm，短辺が21.8～22.9cm，厚さ16.3～17.2cmで，平面的にはＳＫ１の石材は第２号古墳のＳＫ４とＳＫ２の中間で，また石材の厚さは第２号古墳のＳＫ１に次ぐ厚さである。よって，石材の扁平度は１，２番目に値が高い（つまり分厚い）。第２号古墳の石棺に較べて，第３号古墳の石棺は大きさのわりに分厚い石材が使われている。小口部における石材の組み方は両石棺ともに足位側が分かるだけであるが，いずれも小口石を両側石が挟み込むａ類である。石材の立て方は，ＳＫ１は小口石・側石とも縦長に石材を置くが，ＳＫ２は小口石は縦長に用いているものの，側石は横長か方形に置いている。

県内例の前・中期古墳の埋葬施設（第５表）では，玉類・刀子・鎌出土の埋葬施設を中心にみたところ，計165基の27.9%（46基）が箱式石棺，20.0%（33基）が土坑に組合式木棺を納めたとみられるもの，15.8%（26基）が竪穴式石室で，以下，土坑（19基），粘土槨など割竹形木棺を納めたもの（28基），石蓋土坑（８基）などである。権現古墳群が存在する備後北部地域（57基）では，箱式石棺（19基・33.3%）をはじめ，土坑（木棺）12基，竪穴式石室９基，土坑８基，割竹形木棺５基などが多い。ほかの地域でも似た傾向で，箱式石棺と土坑（木棺），次いで割竹形木棺や竪穴式石室が多く，ほかに土坑が一定数見られる。

（４）副葬品　第２・３号古墳の７基の埋葬施設で副葬品が出土したのは，第２号古墳のＳＫ１（直刃鎌１・管玉１・臼玉16），ＳＫ４（刀子１・勾玉１・管玉２），第３号古墳のＳＫ１（刀子１・勾玉１・棗玉26・臼玉20），ＳＫ２（勾玉３・有孔楕円形石製品１・管玉21）の計４基である。

第２号古墳ＳＫ４の刀子は頭位側の棺外蓋石周辺に置かれていたものが棺内に落ち込んだものである可能性が高いが，ほかの遺物は着装品あるいは副葬品として棺内の被葬者の頭部周辺にあったものと考えられる。これらは，小型の鉄器（農工具の直刃鎌・刀子）１点と石製玉類（勾玉・管玉・有孔楕円形石製品・棗玉・臼玉）３～47点の組み合わせである（第３号古墳ＳＫ２は玉類のみ）。玉類の組成は，管玉＋臼玉（第２号古墳ＳＫ１），勾玉＋管玉（第２号古墳ＳＫ４），

勾玉＋棗玉＋臼玉（第３号ＳＫ１），勾玉＋有孔楕円形石製品＋管玉（第３号古墳ＳＫ２）とそれぞれに異なる。第２号古墳のＳＫ１・ＳＫ４は勾玉・管玉が碧玉製で臼玉は凝灰岩製を主に一部珪質凝灰岩製であるのに対して，第３号古墳ＳＫ１・２は勾玉・有孔楕円形石製品・管玉・棗玉・臼玉といったすべての玉が珪質凝灰岩・凝灰岩製で，碧玉製は皆無である。

ここでは，広島県内の調査が行われた主要な前・中期の竪穴系埋葬施設をもつ古墳のうち，玉類・刀子・鉄鎌を出土した計148基の古墳，165基の埋葬施設（第５表）を対象に，各遺物の出土位置や組成を中心に分析検討を加えたい。

玉類は11種類以上・7494点以上が出土し，中でも勾玉・管玉・ガラス製小玉の出現頻度が高い。刀子は130点，鉄鎌は48点（直刃鎌９点，曲刃鎌28点，摘鎌７点，不明４点）出土している。１埋葬施設あたりの出土点数は刀子が１～13点で，１点出土が79基（81.4%）と大半を占める。鉄鎌も１点出土が37基（82.2%）と多数を占め，複数出土例は直刃鎌２点出土例が２，曲刃鎌２点＋摘鎌１点出土例が１である。

①玉類　県内例で玉類が出土した埋葬施設は計85基（古墳77基）で，形態的には勾玉（43基＝26.1%・145点）・管玉（51基＝30.9%・353点＋α）・臼玉（８基＝4.8%・452点）・棗玉（６基＝3.6%・57点）・小玉（ガラス製49基＝29.7%・3946点＋α，石製・土製13基＝7.9%・2507点＋α）・算盤玉（７基＝4.2%・30点）・丸玉（５基・19点）・平玉（２基・３点）・切子玉（１基・２点）・琥珀玉（１基・４点）・有孔楕円形玉（１基・１点）が確認できる（今回の分析対象の埋葬施設計165基に占める基数と比率。点数は各玉類の出土点数）。以下の分析では，出土埋葬施設が多い勾玉・管玉・小玉（特にガラス製小玉）と権現古墳群で出土例のある臼玉・棗玉を主な対象とする。

a　<u>玉類が出土した埋葬施設</u>　85基の内訳は箱式石棺25基（29.4%，延べ53基），竪穴式石室16基（18.8%，延べ34基），土坑（木棺）14基（16.5%，延べ25基），土坑10基（延べ28基），土坑（割竹形木棺）９基（延べ20基），粘土槨（割竹形木棺）５基（延べ13基），石蓋土坑３基（延べ５基），粘土槨（木棺）２基（延べ７基），竪穴系横口式石室１基（延べ１基）である。玉類の種類別では埋葬施設の数は延べ186基となることから，埋葬施設１基あたり２～３種類の玉類を副葬していることになる。いずれの形態の玉も，箱式石棺・竪穴式石室・土坑（木棺）・土坑・土坑（割竹形木棺）などの埋葬施設を中心に出土しており，特定の埋葬施設と結びつくものはない。ただ，勾玉・管玉・小玉はほぼすべての埋葬施設から出土しているが，臼玉は箱式石棺と木棺墓系の土坑（木棺）・土坑（割竹形木棺）などが主体で，竪穴式石室・石蓋土坑などは出土例がない。棗玉は箱式石棺・土坑・石蓋土坑のみでほかの埋葬施設は出土例がない。また，埋葬施設の面からみてみると，箱式石棺（９種類＝管玉17基・勾玉13基・ガラス製小玉10基・丸玉・棗玉・石製小玉・算盤玉・有孔楕円形製品），土坑（９種類＝管玉８基・ガラス製小玉７基・勾玉４基・棗玉・算盤玉・臼玉・石製小玉・平玉・琥珀玉），竪穴式石室（７種類＝ガラス製小玉10基・勾玉９基・管玉９基・算盤玉・土製小玉・滑石製小玉・平玉・切子玉）などの埋葬施設では各種の玉類がほぼ平

均的に出土しているが，そのほかの埋葬施設は勾玉・管玉・ガラス製小玉にほぼ限定される。

b　玉類の出土位置　玉類が出土した埋葬施設の数は85基だが，ここでは明確な出土位置が判明しない29基を除いた56基（延べ数[註]143基）の埋葬施設を対象に分析を行う。

（註）「延べ数」とは，玉の種類，石材，出土位置毎に数えた場合の埋葬施設の基数で，ここでは主に玉の種類毎に数えた埋葬施設数を示す。

ここでは，玉類の出土位置を大きく次の９通りに分けて考える（刀子・鉄鎌も同様）。棺内は頭部（①・①）・胴部（②・②）・足部（③・③）に３分割し，それぞれ床面直上（○，床面から10cm未満の高さまで）と床面から10cm以上浮いて出土する場合（丸数字の下に下線がない）に分ける。その他，正確な出土位置は分からないものの，棺内出土の場合（④），棺の直上や棺外周辺の場合（⑤），そして出土位置が不明だったり（⑥），攪乱などによって原位置を大きく移動している場合（⑦）である。人骨の遺存，あるいは枕石・粘土枕の存在や棺構造・形態などによって頭位が判明あるいは推測できる場合とできない場合がある。

先ず，棺内出土のうち，

（１）頭部付近　頭部付近のほぼ同じ場所から玉類が集中して出土した例は17基ある。箱式石棺８基，竪穴式石室・土坑（割竹形木棺）各３基，土坑（木棺）２基，粘土槨（木棺）１基で，玉の組み合わせは，勾玉＋管玉＋αが６基（α＝ガラス製小玉２，棗玉・算盤玉・有孔楕円形製品各１，ナシ１），勾玉＋αが４基（α＝臼玉＋棗玉，棗玉＋丸玉，ガラス製小玉＋石製小玉＋算盤玉，ガラス製小玉各１），管玉＋ガラス製小玉３基，ガラス製小玉単独出土２基，管玉・石製小玉各単独出土が１基ずつで，勾玉や管玉，ガラス製小玉を含む組成が基本である。石材別では，勾玉が硬玉，瑪瑙，珪質凝灰岩などが，管玉は碧玉が主である。そのほかの玉は滑石・碧玉・琥珀・凝灰岩・珪質凝灰岩・水晶などを石材としている。

頭部～胴部付近で玉類が出土した埋葬施設は６基ある。ガラス製小玉を含む組成のものが主で，勾玉＋石製小玉（滑石），管玉（碧玉）を伴うもの，ガラス製小玉のみのものがある。このほか，勾玉（瑪瑙）＋管玉（碧玉・珪質凝灰岩），勾玉（滑石）＋棗玉（滑石）がある。これらの玉類は右側壁寄りのほぼ同じ箇所で出土しているものが多いが，勾玉＋棗玉例は勾玉が頭部付近の左側，棗玉は頭部～胴部付近の中央部から左側壁寄りで出土している。埋葬施設は竪穴式石室３基，土坑（木棺）・粘土槨（木棺）・石蓋土坑各１基である。

以上はその大半がほぼ同じ箇所で玉類が出土しているものだが，複数の位置で種類の異なる玉類が出土する例もある。先ず，頭部付近と胴部付近から出土した例がある。いずれも勾玉＋管玉を含む組成で，東広島市・三ッ城第１号古墳１号棺は頭部周辺から勾玉（流紋岩）が，胴部付近から管玉（流紋岩・蛇紋岩）が出土した。同３号棺は頭部付近から勾玉・管玉・丸玉（１点）が，左側の胴部付近からは丸玉（３点）が出土した（いずれも琥珀製）。福山市・赤羽古墳では頭部付近（中央）から勾玉・管玉（13点）・ガラス製小玉（５点）が，胴部付近（中央）からは管玉（２点）・ガラス製小玉（35点）が出土している。前２者は竪穴式石槨（箱式石棺），後者は粘土槨

（割竹形木棺）である。

頭部付近と足部付近の２か所から種類の異なる玉類が出土する例としては，広島市・池の内第３号古墳と北広島町・金子第１号古墳，福山市・吹越第８号古墳がある。池の内例は土坑（割竹形木棺）で，管玉・小玉（いずれもガラス製）が頭部付近の左側，勾玉（碧玉）・臼玉（滑石）は足部付近から出土した。金子例は石蓋土坑で，小玉（ガラス）と大半（10点）の管玉（碧玉）が頭部付近から，管玉１点のみ足部付近左側から出土している。吹越例も石蓋土坑で，滑石製勾玉が頭部周辺で，滑石製棗玉が足部周辺で出土している。また，福山市・城山第２号古墳（土坑）では，ガラス製小玉が頭部付近と胴部～足部付近左側などから出土した。福山市・亀山第１号古墳，同・国成古墳はいずれも粘土槨（割竹形木棺）で，それぞれ棺内の大きく３か所から玉類が出土した。亀山例はガラス製小玉（22点）が頭部付近，瑪瑙製勾玉・管玉（凝灰岩・２点）は胴部付近左側から，碧玉製と滑石製の勾玉各１点と滑石製小玉（699点）は足部付近中央からそれぞれ出土した。国成例は，管玉（碧玉）・臼玉（滑石）・小玉（ガラス）が頭部付近，勾玉（硬玉）は胴部付近左側，丸玉（ガラス）は右側壁寄りの胴部～足部付近で出土した。これらの例では，勾玉は胴部・足部付近から出土し，頭部付近の出土例はない。管玉・ガラス製小玉は頭部付近からの出土が多いが、胴部付近や足部付近からの出土も一部にみられる。臼玉は頭部付近・足部付近，滑石製小玉は足部付近，丸玉は胴部～足部付近から出土している。

（２）胴部付近　胴部付近から玉類が出土した埋葬施設は10基ある。箱式石棺・竪穴式石室各３基，土坑２基，土坑（木棺）・土坑（割竹形木棺）各１基である。７基はほぼ同じ箇所から玉類が出土しているが，ほかの３基は胴部付近を含む２か所から種類の異なる玉類が出土している。後者の広島市・城ノ下第１号古墳（土坑＝割竹形木棺）例のみ管玉が胴部付近中央，小玉は棺内出土である。権現第２号古墳ＳＫ１（箱式石棺）例と福山市・山の神第１号古墳２号主体（箱式石棺）例は頭部～胴部付近と胴部付近の２か所から玉類が出土している。山の神例は管玉・ガラス製小玉が頭部～胴部付近，勾玉は胴部付近から出土している。胴部付近のほぼ同じ箇所から玉類が出土した７基については，勾玉（翡翠）＋管玉（碧玉）＋ガラス製小玉，勾玉（硬玉・琥珀）＋管玉（碧玉），勾玉（凝灰岩）＋管玉（碧玉・凝灰岩・珪質凝灰岩），管玉（不明）＋ガラス製小玉及び勾玉（琥珀），ガラス製小玉，土製小玉の単独出土各１基で，勾玉・管玉・ガラス製小玉を基本にした組み合わせである。石材的には勾玉は硬玉・翡翠・水晶・琥珀と様々だが，管玉は大半が碧玉製である（三次市・寺津第２号古墳例は，碧玉製７点が主体で，凝灰岩・珪質凝灰岩製各１点を含む）。

（３）足部付近　棺内の足部付近から玉類が出土した埋葬施設は４基と少ない。箱式石棺２基，竪穴式石室・石蓋土坑各１基で，玉類の組成は，勾玉（瑪瑙・水晶）＋管玉（水晶）＋ガラス製小玉，勾玉（滑石）＋棗玉（滑石），管玉（碧玉）＋ガラス製小玉及びガラス製小玉の単独出土各１基である。

（４）小口付近（頭部あるいは足部）　棺の小口部分のほぼ同じ場所からすべての玉類が出土したものの，頭位が不明で頭部か足部か不明なものが６基ある。勾玉を含む組成はない。管玉＋ガラ

ス製小玉＋αが多く，α＝ナシ，算盤玉＋平玉＋切子玉，土製小玉＋不明小玉の計３基，あとは土製小玉，土製算盤玉の単独出土例が各１基である。土製玉（算盤玉・小玉）がやや目立つ。管玉は碧玉製２，緑色凝灰岩製１で，ほかの玉は土製及び水晶製である。埋葬施設は竪穴式石室２基，土坑（木棺）２基，土坑１基，竪穴系横口式石室１基である。

（５）棺外　棺外出土例は５基に過ぎない。土坑（木棺）・土坑（割竹形木棺）各２基のほか，粘土槨（割竹形木棺）１基である。頭部側外部に付設された浅い掘り込みに鏡や刀子などとともに一括して納められた例が１基あり，ほかの３基は木棺上からの出土である。広島市・恵下第１号古墳は勾玉（翡翠・瑪瑙）＋管玉（碧玉・ガラス）＋小玉（ガラス・滑石）の組み合わせで，右側の頭部～胴部付近と左側胴部付近の棺上に置かれていたものが棺内に落ち込んだ状況を示している。残りは勾玉（瑪瑙）＋管玉（碧玉）を副葬する１基とガラス製小玉単独出土の２基である。このように，棺外から玉類が出土する例は少ないが，勾玉＋管玉，それにガラス製小玉を含む組み合わせが基本である点は棺内副葬例と同様である。

なお，玉類が出土した埋葬施設で人骨を検出した例は13基15体（男性・熟年１，男性・壮年３，男性・年齢不明１，女性・壮年１，小児２，性別・年齢不詳[(3)]７）で，男性骨が多い。埋葬施設は箱式石棺が８基と大半を占める。

以上から，玉類の組成は棺内副葬・棺外副葬を問わず，勾玉・管玉・ガラス製小玉を基本としたものであり，玉の種類に拘らず棺内床面の頭部付近を中心に出土していることが分かる。頭部付近（頭部あるいは足部，頭部～胴部なども含む）出土の例数が延べで，勾玉が19基／52基（36.5%），管玉が22基／58基（37.9%），ガラス製小玉が24基／51基（47.1%）で，このほかの石製・土製小玉，臼玉，棗玉，算盤玉なども例数は少ないが頭部付近出土例が40～60%程度を占める。胴部付近や足部付近の出土例や棺外出土例は10数%以下（10基未満）と少なく，玉の種類も勾玉・管玉・小玉に限定される。

ｃ　<u>玉類の材質</u>　県内例85基の埋葬施設から出土した玉類の材質は，報告書による限りでは硬玉・翡翠（両者はほぼ同一のものとして記載されている可能性が高いが，厳密には異なるものだと思われるので別扱いとする）・瑪瑙・碧玉・ガラス・凝灰岩・緑色凝灰岩・珪質凝灰岩（凝灰岩以下の３者は滑石と同一視されている可能性が高く，また３者のなかでも混同があると思われるが基本的には各報告の記述に従う）・水晶・琥珀・滑石・土・流紋岩・蛇紋岩・材質不明と15通りみられる。勾玉（延べ53基・145点）の材質は，瑪瑙10基・18点，硬玉８基・12点，碧玉８基・11点，滑石７基・77点を主体に，水晶・琥珀・翡翠・珪質凝灰岩・凝灰岩・流紋岩などがある。滑石製勾玉が65点出土している福山市・亀山第１号古墳例を除けば，勾玉は１埋葬施設あたり１～２点の副葬である。管玉（延べ60基・353点＋α）の材質は大半が碧玉（35基・202点＋α）で，このほか凝灰岩・緑色凝灰岩・珪質凝灰岩・蛇紋岩・ガラス・土・流紋岩などである。小玉はガラス（延べ52基・3946点＋α）が大半を占め，ガラス製以外の小玉（延べ14基・2507点＋α）の

材質は滑石・土・碧玉・蛇紋岩などである。臼玉は延べ10基の埋葬施設から計452点出土している。材質は滑石（６基・415点）が主体で，そのほかは凝灰岩・珪質凝灰岩のみである。棗玉は６基の埋葬施設から計57点出土しており，材質的には琥珀・滑石・珪質凝灰岩などである。この他の玉では，算盤玉が水晶（42.9%），丸玉は琥珀（60%）・ガラス（40%）が主体である。

d　玉類を含む副葬品の組成　次に，玉類がどのような遺物組成のなかに位置付けられるかみていきたい。先ず，玉類が単独で出土する埋葬施設は26基ある。種類別の組み合わせでは，勾玉＋管玉＋ガラス製小玉，管玉＋ガラス製小玉，管玉のみ・ガラス製小玉のみの組み合わせが各３例，勾玉＋棗玉，小玉（土製ほか）のみの組み合わせが各２例などである。これら玉類のみを副葬する埋葬施設は箱式石棺が10基（38.5%）と４割近くを占め，次いで土坑５基，土坑（木棺）・石蓋土坑各３基などが主体である。玉類の出土位置は棺内の頭部周辺を含むものが多い。なお，複数の位置で出土した例が５例ある。

玉類＋刀子のみの組合わせは，箱式石棺・土坑（木棺）各３基，土坑２基など10基の埋葬施設から出土している。玉類の組み合わせは様々で，勾玉＋管玉＋ガラス製小玉が主体で，臼玉・棗玉が散見される。玉類の出土位置は頭部周辺，足部周辺の棺内小口付近が主である。玉類＋鉄鎌のみの出土例は３例で，いずれも滑石系石材の臼玉を含む。

次に，これら玉類のみ，玉類＋刀子のみ，玉類＋鉄鎌のみを副葬する例を除いた，玉類にほかの副葬品が加わる組成について，簡単に触れておきたい。先ず，玉類のみに刀子・鉄鎌以外の副葬品が加わる埋葬施設は計19基存在する。副葬品の内容は，鏡11例（57.9%），鉄剣８例（42.1%），鉄鏃５例（36.3%），鉄斧４例（21.1%），鉋・鉄刀・鉄槍・車輪石・銅釧である。鏡や鉄剣の出現頻度が高く，特に鏡のみを単独で伴出する例が６例と目立つ点に注意したい。玉類＋鏡の組み合わせに何らかの有意性を考えておきたい。次に，玉類＋刀子のみに鉄鎌以外の副葬品をもつ埋葬施設は17基で，鉄鏃・鉄剣各７例（41.2%），鉄刀６例（35.3%），鏡・鉋各４例（23.5%），釧３例（鉄釧・銅釧・石釧各１），鉄斧・鋤先・毛抜き・銅鈴が加わる。玉類のみを含む副葬品の組成に較べると鏡の比率がやや低いが，鉄剣・鉄鏃，それに鉄刀を主体にし，また鉋をはじめとする農工具も比較的多い。また，材質が異なるものの釧が３例みられる点も，鏡の存在とともに注意しておきたい。玉類＋鉄鎌のみに刀子以外の副葬品をもつ埋葬施設は５基と少なく，鉄剣２例と釧２例（鉄釧・石釧）のほかは鏡・鉄刀・鉄鏃・鉄斧・鉋・鋤先である。例数は少ないものの，鉄剣などの武器，農工具そして鏡・釧と玉類を含む副葬品の組成に通有のものが一定度揃う。玉類＋刀子＋鉄鎌の組合わせにそのほかの副葬品が加わる埋葬施設は４基と少ない。割竹形木棺を納める埋葬施設が主体で，質量ともに副葬品が豊富な埋葬施設が含まれる。鉄剣・鉄刀・鉋・鑿各３例をはじめ，鉄鏃・鉄鉾・鉄斧・鉄錐・短甲・鏡・鉄槍・鋤先・垂飾・盾・筒形銅器・竪櫛などが加わる。

②刀子

a　刀子の出土位置　県内例97基132点の出土位置と出土状況について検討する。刀子の出土例132点のうち，頭部付近から出土したものが29点，胴部付近が26点，足部付近が27点，出土位置は特定できないが棺内から出土した例が22点，棺外出土例が22点，出土位置が特定できないものが11点で，以下において検討するのは出土位置が特定できる棺内出土例77点と棺外出土例22点の計99点である。先ず，棺内出土例のうち，頭部付近の床面直上で出土したものが19点，床面から一定度（10cm以上）浮いた状態で出土したものが10点である。なお，次の７埋葬施設では複数の箇所から刀子が出土しており，各箇所ごとに別々に検討を加えることにする。

・三次市・上四拾貫第６号古墳（足部３点／棺外１点）
・広島市・空長第２号古墳（頭部２点／足部１点）
・広島市・可部寺山第３号古墳（頭部１点／胴部１点）
・広島市・城ノ下第１号古墳（胴部１点／足部２点）
・安芸太田町・横路小谷第１号古墳第２主体部（頭部１点／足部１点）
・福山市・亀山第１号古墳（胴部５点／足部８点）
・福山市・国成古墳（頭部１点／棺外１点）

被葬者から見て左側に刀子を置くもの６埋葬施設７点，右側に置くもの９埋葬施設11点，後ろ（小口）側に置くもの４埋葬施設６点，出土位置が明確にできないもの４埋葬施設４点である。多くは埋葬施設の長軸に刀子を沿わせているが，刀子を頭部の後ろに置く例のなかに３埋葬施設４点横向きに置く例がある（広島市・真亀第１号古墳，東広島市・蛇迫第２号古墳，府中市・山ノ神第１号古墳２号主体の女性人骨）。切先の向きが分かる例は少ないが，足部側に向くもの，頭部側に向くもの各２例である。同じ場所に刀子２点を置く例が５埋葬施設と多くみられるのも特徴である。

棺内の胴部付近で刀子が出土した例は15埋葬施設20点ある。いずれも床面直上からの出土で，胴部左側に刀子を置くもの９埋葬施設10点，右側に置くもの２埋葬施設２点でいずれも埋葬施設の長軸に刀子を沿わせて置いている。切先の向きは不明のものが大半だが，足側を向くもの４埋葬施設８点，頭側を向くもの２埋葬施設２点と足側を向く例がやや多い。１点ずつの出土が大半を占めるが，広島市・寺山遺跡ｃ主体では２点の刀子を胴部左側に縦に並べており，福山市・亀山第１号古墳では胴部右側に切先を足部方向に向けた刀子５点が束の状態で置かれていた。

被葬者の足部付近で刀子が出土したのは15埋葬施設27点である。出土位置は，足部の左側から出土したのが３埋葬施設３点，足部中央付近から出土したのが６埋葬施設16点，足部右側から出土したのが４埋葬施設４点である。刀子の向きは埋葬施設の長軸に沿って置かれている例が多いが，足部中央から出土した中に横向きに置いた例が２埋葬施設９点（広島市・城ノ下第５号古墳，福山市・亀山第１号古墳）ある。切先の向きが分かる例は４埋葬施設11点あり，埋葬施設の長軸に沿って，切先が足部方向に向くもの２例，足部中央に横向きに置かれたもののうち，福山市・亀山第１号古墳（８点）は左に，広島市・城ノ下第５号古墳（１点）例は右に切先が向く。１点

ずつの出土が多いが（９埋葬施設），２点（広島市・城ノ下第１号古墳）・３点（三次市・上四拾貫第６号古墳，広島市・寺山第３号古墳）・８点（福山市・亀山第１号古墳）と同じ箇所での複数出土例がやや多くみられる。

棺外から刀子が出土した例は22埋葬施設23点で，福山市・吹越第４号古墳（２点出土）を除くといずれも１点ずつの出土で，複数出土例は少ない。出土位置は棺蓋上と棺外周縁とが考えられるが，後者が多い。なかでも，頭部周辺の棺外出土例が多くみられる。これらは頭部を覆う蓋石（箱式石棺・石蓋土坑）の目貼り粘土内に入れ置く例を含め，左側棺外に刀子を置くものが４埋葬施設４点，小口側棺外に刀子を置く例が４埋葬施設４点，右側棺外に刀子を置く例が２埋葬施設２点である。計10埋葬施設10点で，７例が刀子を横向きに，３例が埋葬施設の長軸に沿わせて刀子を置いている。切先の向きは不明のものが多いが，横向きのものは右側へ切先を向け，縦置きのものは頭部側へ切先を向けるもの２例，足部側へ切先を向けるもの１例である。粘土目貼り内に刀子を入れ込むもの（４例）は，頭部の左側と小口側に刀子を置く３例（いずれも箱式石棺）がいずれも横向きに置くが，頭部の右側棺外の１例は埋葬施設の長軸に沿わせて置き，切先を頭部側に向ける。胴部付近の棺外出土例は６埋葬施設７点ある。胴部中央付近から出土した３埋葬施設４点は埋葬施設上面に置かれていたものと考えられる（広島市・弘住第３号古墳＝木蓋が想定される竪穴式石室，同・須賀谷第２号古墳第２主体部＝土坑，福山市・吹越第４号古墳＝木棺）。これらはいずれも埋葬施設の長軸に沿わせて刀子を縦向きに置いている（吹越例は２本並べて）。切先は弘住例・須賀谷例が足部側を向く。左側棺外に刀子を置くものは３例みられるが，右側の例はない。左側棺外に刀子を置くのは広島市・中小田第２号古墳（竪穴式石室），庄原市・犬塚第２号古墳（土坑），福山市・国成古墳（粘土槨・割竹形木棺）で，いずれも棺の縁近くに棺の長軸に沿わせて縦向きに刀子を置く。犬塚例では切先を頭部側に向けている。棺外の足部付近に刀子を置く例は広島市・権地古墳（竪穴系箱式石棺）のみで，左側縁のすぐ外側に，縦向きに刀子を置いている。

刀子を副葬する埋葬施設から人骨が出土した例は計12基13体で，その性別・年齢別内訳は，男性・熟年４，男性・壮年４，男性・成年１，女性・壮～熟年１，女性・壮年１，性別不明・壮年１，性別・年齢不明１で，大半が熟年～壮年の男性（８体・62%）で，女性骨は２体である。

以上のように，刀子は棺外よりも棺内，それも頭部付近に置かれることが多い。埋葬施設別では箱式石棺から出土することが多い（22基・22.7%）が，竪穴式石室（17基），土坑（木棺，20基），土坑（割竹形木棺，13基），土坑（９基），粘土槨（割竹形木棺，10基）などからも出土している。

ｂ　<u>刀子を含む副葬品の組成</u>　刀子のみが出土する例は17埋葬施設19点で，棺内の頭部付近に刀子を置く例が７埋葬施設７点と多い。胴部の左側に縦向きに刀子を置く例が３埋葬施設４点，足部に置く場合が３埋葬施設３点，棺外に刀子を置く例は３埋葬施設３点で，このほか棺内出土例が１埋葬施設２点ある。刀子＋玉類のみ副葬する例は10埋葬施設10点で，棺内頭部付近から主に出土し（４例），このほか棺内胴部付近，同足部付近，棺外などである。これら刀子と玉類の出土

位置の関連性は，頭部付近から刀子が出土した権現第２号古墳ＳＫ４，同第３号古墳ＳＫ１，胴部から刀子が出土した三次市・植松第１号古墳，同・寺津第２号古墳，足部付近から刀子が出土した庄原市・馬立第２号古墳ではいずれも刀子の出土位置付近から玉類も出土しており，刀子と玉類のみを副葬する埋葬施設では，同じ場所に刀子と玉類が置かれていることが多い。刀子と鉄鎌のみが副葬される例は３例あり，曲刃鎌を伴うことが多い。

次に，上記のように刀子のみ，刀子＋鉄鎌のみを副葬する例を除いた，刀子にほかの副葬品が加わる組成について，簡単に検討を加えておきたい（刀子＋玉類のみ，刀子＋玉類＋鉄鎌のみにほかの副葬品が加わる例については玉類の項で既述）。先ず，刀子のみに玉類・鉄鎌以外の副葬品が伴出する埋葬施設は28基あるが，鉄鏃13例（46.4%），鉄剣９例（32.1%），鉄刀６例（21.4%），鉇５例（17.9%）が主で，ほかに銅鏡・鉄斧・鋤（鍬）先・竪櫛がある。刀子＋鎌のみに玉類以外の副葬品を伴出する埋葬施設は13基あり，鉄鏃が10例（76.9%）と大半を占め，このほか鋤（鍬）先５例（45.5%），鉄刀４例（36.4%）が主で，このほかに鉄剣・鉄斧・鉇・砥石・竪櫛がある。農工具や砥石が比較的多くみられる。

③鉄鎌

ａ　<u>鉄鎌の出土状況と位置</u>　県内例43埋葬施設49点の鉄鎌（直刃鎌９・曲刃鎌28・摘鎌７・不明４）のうち，その出土位置が把握できる棺内及び棺外出土例38例について，その出土位置と出土状況を検討する。棺内の頭部側から出土した鎌８点，胴部付近から出土した鎌５点，足部付近から出土した鎌６点，そして棺外・棺上から出土した鎌19点である。なお，大半は１点ずつの出土だが，５埋葬施設では複数（２～３点）の鎌が出土している。広島市・空長第２号古墳では頭部と胴部付近から曲刃鎌各１点が出土し，同・中小田第２号古墳では棺外の同じ場所から曲刃鎌２点と摘鎌１点の形態の異なる鎌が出土している。また，福山市・亀山第１号古墳では棺内の足部から曲刃鎌２点が出土した。三次市・宮の本第25号古墳では箱式石棺の内外から計２点の直刃鎌が，同・大番奥池第２号古墳ＳＫ１（木棺墓）では棺外側辺から曲刃鎌２点が出土した。

棺内の頭部付近から出土した８点の鎌はいずれも床面直上から出土したもので，直刃鎌と曲刃鎌が各３点，摘鎌２点である。埋葬施設別では，箱式石棺４例，土坑（木棺）２例などである。出土位置は頭部の左側に置くもの３例，頭部後ろの小口側に置くもの１例，頭部の右側に置くもの４例などである。頭部付近に置かれた鎌に特徴的なのは，鎌を埋葬施設の長軸に直交させて横向きに置く例が５例と多くみられる点で，ほかの５例は埋葬施設の長軸に沿わせて縦向きに置いている。鎌の切先の方向が分かる例は少ないが，判明した２例では，横向きのものは右側，縦向きのものは足側に切先を向けていた。土坑から熟年・男性の人骨がみつかった福山市・城山第４号古墳では，被葬者の頭部右後ろ隅の床面で横向きにした直刃鎌１点が出土した。

棺内の胴部付近に鎌を置くものは４埋葬施設４点とやや少ない。直刃鎌と曲刃鎌各２点で，胴部左側に鎌を置くものと右側に置くもの各２例で，いずれも縦向きに置き，うち２例は切先を頭部側に向けていた。埋葬施設としては，箱式石棺３基・竪穴式石室１基から出土した。

棺内の足部付近に鎌を置くものは５埋葬施設６点で，亀山第１号古墳例を除いて１点ずつの出土である（直刃鎌１点・曲刃鎌５点）。埋葬施設は箱式石棺３例と土坑（割竹形木棺）・粘土槨（割竹形木棺）である。出土位置は，足部の左側に鎌を置くもの３埋葬施設３点，足部中央に置くもの１埋葬施設２点などで，被葬者の足部右側に鎌を置いたものはみられない。亀山例を除く５点はいずれも縦向きで，切先が足部側を向くもの２例である。

棺外に鎌を置く例が17埋葬施設20点と最も多い。形態別では，直刃鎌２，曲刃鎌15，摘鎌３で，中小田第２号古墳例（曲刃鎌２・摘鎌１）以外はいずれも各１点の出土である。埋葬施設としては，土坑（木棺）が８基と大半を占め，ほかに竪穴式石室３基，箱式石棺２基，石蓋土坑・土坑（割竹形木棺）・土坑各１基がある。出土位置は，大半が木棺外の縁辺付近に置かれたもので，明らかに棺の直上に置かれたと考えられるものは少ない。ただ，東広島市・金口第２号古墳出土例（摘鎌）は石蓋土坑の頭部側の蓋石直上で出土しており，このほか棺蓋の縁辺部付近の上面に置かれたと思われる例が２，３存在する。被葬者から見て左側の木棺外で出土したものが多く，右側から出土したものは５点，足元の小口部から出土したもの１点で，頭部側の小口部から出土したものは皆無である。被葬者の左側棺外に置かれたものの内，頭部付近のもの４埋葬施設４点（曲刃鎌２，直刃鎌・摘鎌各１），胴部付近のもの２埋葬施設４点（曲刃鎌３・摘鎌１），足部付近のもの１埋葬施設１点（曲刃鎌）である。右側棺外から出土したものは，頭部付近のもの４点（曲刃鎌３・摘鎌１），胴部付近のもの１点（曲刃鎌）で，足元中央の棺外で出土した１点は曲刃鎌である。鎌の向きは横向きが５埋葬施設５点（切先は内向き２・外向き２・不明１），縦向きのもの７埋葬施設10点（切先は頭部側３・足部側１・不明４），不明のもの５埋葬施設５点である。

鎌全体で見てみると，埋葬施設別では箱式石棺13基（直刃鎌６・曲刃鎌７・摘鎌１・不明鎌１）と土坑（木棺）12基（曲刃鎌10・摘鎌２）が主体的で，次いで竪穴式石室（直刃鎌１・曲刃鎌４・摘鎌１），土坑（直刃鎌２・曲刃鎌１・摘鎌１），土坑（割竹形木棺）（曲刃鎌３・摘鎌１）が各４基，このほか粘土槨（割竹形木棺）３基（曲刃鎌２・摘鎌１），石蓋土坑２基（曲刃鎌・摘鎌各１），粘土槨（木棺）１基（不明鎌）がある。また，出土位置別に埋葬施設をみてみると，棺内床面出土例では箱式石棺が多いのに対して，棺外出土例は土坑（木棺）や竪穴式石室が多く，箱式石棺は３基と少ない。また，鎌の形態別では直刃鎌は棺内床面出土例が９点中７点と多く（頭部付近３点，胴部付近２点，足部付近・不明各１点），棺外出土例は２点である。埋葬施設別では，箱式石棺５基６点（礫床のもの４基）が主で，ほかに土坑・竪穴式石室から出土している。28点と最も多く出土している曲刃鎌は出土位置の点では棺外15点，棺内床面９点（頭部３点・胴部２点・足部４点）とどの箇所からも出土しているが，ほかの形態の鎌との比較でいえば，棺外での出現比率が高い。特に，土坑（木棺）では棺蓋上に置かれる例が８点と多い。また，曲刃鎌は土坑（木棺）（９基・10点）や箱式石棺（６基・７点）から主に出土しており，竪穴式石室・土坑などからはあまり出土していない。摘鎌は計７点の出土で，棺内２点（いずれも頭部付近），棺外３点（頭部付近２＝蓋石・木蓋上面，胴部左側棺外１）と棺内・棺外を問わず頭部付近から出土している。土坑（木棺）・竪穴式石室・粘土槨（割竹形木棺）・土坑・石蓋土坑などの埋葬施設から

出土しているが，箱式石棺からは出土していない。

b　鉄鎌を含む副葬品の組成　次に，鎌を含む副葬品の組成について検討したい。鎌が単独で出土する例は４例で，曲刃鎌１・摘鎌２の棺内副葬例１・棺外副葬例２及び直刃鎌の棺内・棺外副葬例各１である。鎌＋玉類のみ副葬するものは３例ある。埋葬施設・鎌の形態ともに様々だが，棺内・棺外とも頭部付近に横向きに置かれている。伴出する玉類は滑石系石材（滑石・凝灰岩など）の臼玉を特徴的に伴う。鎌と玉類は刀子と玉類のように必ずしも同じ場所から出土せず，棺内床面の頭部付近から直刃鎌，胴部右側から玉類が出土した権現第２号古墳ＳＫ１例は比較的出土位置が近いが，広島市・恵下第２号古墳例では玉類は棺内であるのに対して，鎌は頭部付近左側棺外から出土している。次に，鎌のみを副葬する例を除いた，鎌に他の副葬品が加わる埋葬施設の副葬品の内容について述べたい（鎌＋玉類のみ，鎌＋刀子のみ，鎌＋玉類＋刀子のみに他の副葬品が加わる例については，玉類・刀子の項で既述）。鎌のみに玉類＋刀子以外の副葬遺物を伴出する埋葬施設は11基ある。鉄斧６例，鉄鏃４例，鉇・鉄剣各３例，鉄刀２例と，鉄斧・鉇などの農工具や鉄鏃・鉄剣・鉄刀の武器類が目立つ。

以上の県内例の前・中期古墳における玉類・刀子・鉄鎌を中心とした副葬品の分析結果から権現第２・３号古墳の計４基の埋葬施設（いずれも箱式石棺）の副葬内容について検討を加えてみたい。

権現例の副葬内容の特徴は，小型農工具（直刃鎌・刀子）＋玉類の組み合わせが基本である点である。玉類は第２号古墳のＳＫ１・４では碧玉製の勾玉・管玉と凝灰岩系石材の臼玉，第３号古墳の小型の箱式石棺（ＳＫ１・２）はすべて凝灰岩系石材の勾玉・管玉・有孔楕円形製品・棗玉・臼玉である。第３号古墳のＳＫ２のみは玉類だけで，ほかの３基はいずれも農工具１点を伴う。ここで注意したいのは，

①農工具＋玉類，玉類のみの副葬内容であること。

②農工具は直刃鎌あるいは刀子各１点で，いずれもかなり小型であること。

③玉類（勾玉・管玉）の石材が第２号古墳では碧玉であるのに対して，第３号古墳では凝灰岩系石材であること。

④玉類には臼玉・棗玉といった出土例が比較的少ない玉を含むこと。

などである。先ず①については，直刃鎌＋玉類のみの副葬例はほかにない。曲刃鎌・摘鎌と玉類のみの副葬例は各１例あるが，権現例を含めて鎌＋玉類の組み合わせでは，いずれも臼玉（滑石・凝灰岩製）を伴う点に注意したい。また，直刃鎌に伴出する副葬品としては鉇・鉄斧といった鉄製工具が多い。その一方で，玉類を伴出するのは海田町・上安井古墳例（管玉＋ガラス製小玉）のみである。次に，刀子＋玉類のみの副葬例も９例とそれほど多くない。玉類のみの副葬例は24例と比較的多い。権現例（第３号古墳ＳＫ２）は凝灰岩系石材の勾玉・管玉を主とする組成で，勾玉は大小三つの形態のものがあり，管玉は長さは0.75～2.9cmと様々だが，径は0.3～0.5cmとほ

ぼ一定で，このような長さにばらつきが大きくても径が一定である管玉は「規格性」を備えたもので，被葬者の着装品の可能性が高いとされる。[4] ②については，先ず直刃鎌の出土例そのものが権現例を入れても計９点と少なく，しかも権現例の長さ6.7cm，幅1.75cm，城山第４号古墳例の長さ7.4cm，幅2.9cmを除けば，長さ10～15cm，幅２～4.3cmと大型である。直刃鎌を副葬する県内例の埋葬施設の時期はほぼ５世紀代だが海田町・上安井古墳例のみ４世紀代である。直刃鎌から曲刃鎌に変換するのは５世紀前葉だが，直刃鎌は５世紀代を通じて残るとされる。[5] 刀子の出土例は132点と多いが，権現例の長さ5.55～6.8cm＋α，幅1.1～1.2cmはかなり小型の部類に入ろう。これらの小型の農工具についてはその実用性が疑われることから，その副葬については，臼玉や棗玉の伴出を含めて葬送儀礼との関わりが考えられる。[6] ③については，第２号古墳では勾玉・管玉＝碧玉製，臼玉＝凝灰岩・珪質凝灰岩製で，第３号古墳ではすべての玉類（勾玉・有孔楕円形製品・管玉・棗玉・臼玉）＝珪質凝灰岩・凝灰岩製と明確に使い分けがなされている。凝灰岩・珪質凝灰岩はそれぞれ軟質と硬質，色調も灰黒色など黒っぽいものを主体に一部に灰白色など白っぽい色調のものもある。この凝灰岩・珪質凝灰岩は見た目や材質が滑石に類似しており，滑石製玉類と同様の使われ方をした可能性が高い。滑石製玉類については，着装品と同時に祭祀具としての機能が考えられている。[7] この副葬に際して祭祀性が付与されたとみられるのは臼玉や棗玉について特にいえる。この解釈に沿えば，第２号古墳ＳＫ１や第３号古墳ＳＫ１・２，特に後者は祭祀性の強い副葬内容と言えよう。第３号古墳ＳＫ２における小型で扁平な勾玉や有孔楕円形石製品の出土も副葬品の祭祀性を跡付けるものと考えられる。

④の臼玉と棗玉といった比較的広島県では出土例の少ない種類の玉を組成に含む点については，県内例で臼玉（452点）を副葬品に含む埋葬施設は８例で，箱式石棺・土坑（木棺）・土坑（割竹形木棺）・粘土槨（割竹形木棺）・土坑である。棺内の主に頭部周辺に副葬されている（６例）。石材は権現例を除けばすべて滑石製である。臼玉を含む副葬品の組成は，玉類のみの１例（勾玉＋管玉＋小玉）を除けば玉類＋鎌（直刃１・曲刃１・摘鎌２）４例，玉類＋刀子・玉類＋刀子＋鎌・玉類＋鏡各１例で，玉類＋農工具（鎌・刀子）を伴うことが多い。これらの臼玉を副葬する県内例の埋葬施設の年代はいずれも５世紀代である。また，権現例の臼玉は篠原祐一氏分類[8]のＡ・Ｂ類にあたり，側面に稜がみられるＡ類が４世紀後葉～５世紀前葉，側面が膨らみをもつものの稜がみられないＢ類は５世紀初葉～後葉とされている。これに従えば，稜が比較的しっかりしたものを含む権現第２号古墳ＳＫ１出土の臼玉が古く，稜があまり明確でないものが主体を占める第３号古墳ＳＫ１の臼玉が若干後出的ということになろう。

棗玉（57点）を副葬する県内例の埋葬施設は６例で，箱式石棺３基をはじめ，土坑・石蓋土坑である。棺内の頭部周辺から出土するものが４例で，棺外出土例はない。石材は権現例以外は琥珀・滑石などである。棗玉を含む副葬品の組成は，東広島市・三ッ城第１号古墳（２号棺・３号棺）例が刀子のほかに鉄刀・鉄剣・鉄鉾・鉄鏃などの武器，竪櫛・銅釧などの装身具といった質量ともに豊富な内容であるのを除けば，玉類（勾玉・管玉・ガラス製小玉・臼玉・算盤玉・平玉）＋刀子や玉類のみ（滑石製の勾玉）といった比較的貧弱な副葬内容である。これら県内例の棗玉

を副葬する埋葬施設の時期はほぼ５世紀代とされている。また，小林行雄氏は，棗玉は４世紀後半～５世紀代の古墳に副葬されるとしている。[9]

以上から，

（１）権現第２号古墳及びやや変容した形ではあるが第１号古墳において，墳丘構築技術の面で小丘と土手状盛土による「西日本的工法」の採用がみられる。この工法は古墳時代前期を中心に中期にかけて行われたとされている。また，この墳丘構造の類似性から第２号古墳と第１号古墳の築造時期は比較的近接するが，第２号古墳がいくらか先行するとみられる。

（２）第２・３号古墳における埋葬施設はいずれも箱式石棺である。第２号古墳では埋葬施設の主軸がほぼ東西方向を指す３基と南北方向を指す２基との間に時期差がみられ，後出的な後者は第３号古墳の２基の小型の箱式石棺と主軸方位が近いことから，構築時期も近接すると考えられる。このことは，副葬品の臼玉にみられる時期差からも言える。

（３）第２号古墳ＳＫ１とＳＫ４，第３号古墳ＳＫ１とＳＫ２では小型農工具（鎌・刀子）＋玉類を基本とした副葬内容である。いずれも被葬者の頭部付近を中心に副葬しており，直刃鎌と刀子はいずれも長さ10cm未満の実用品とはみなし難いミニチュア品である。また，玉類については，ひとつに第２号古墳の勾玉・管玉は碧玉製であるのに対して，第３号古墳の玉類と第２号古墳の臼玉は滑石に似た灰黒色などの凝灰岩系石材製であること，もうひとつは玉類の組成に臼玉・棗玉や扁平な小型勾玉，有孔楕円形石製品といった祭祀性の強く窺われる玉類を多く含む点である。これらのことから，権現第２・３号古墳の埋葬施設の副葬品はいずれも祭祀性が強くみられる内容であることが指摘できる。なお，臼玉の編年によって，第２号古墳ＳＫ１の臼玉は側面の稜を持つものが主体であることから４世紀後葉～５世紀前葉頃，第３号古墳ＳＫ１の臼玉は側面の稜がないものが主体であることから５世紀初頭～中葉頃と考えられる。

これらのことから，権現第１～３号古墳のなかでは，最初に第２号古墳が築造されたとみられる。その時期は５世紀前半を中心に４世紀に遡る可能性もある。第２号古墳の後出的な箱式石棺２基の埋葬はやや遅れて，第３号古墳の築造時期に近いと考えられ，５世紀中葉を中心とした時期であろう。第１号古墳は埋葬施設が失われて明確でないが，その墳丘構造が第２号古墳に類似し，これがやや簡略化したものとみられることから，第２号古墳の構築に遅れるものの５世紀代のなかには納まるものと考えられる。

註

（１）青木敬「前期古墳の構築法と玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究Ⅱ－墳丘編－』 柏原市教育委員会 2002年

青木敬「古墳の築造企画と構築技術」『季刊考古学』第106号　雄山閣　2009年

また，以下の論文を参考にした。

沼澤豊「墳丘断面から見た古墳の築造企画」『研究連絡誌』第60号　財団法人千葉県文化財センター　2001年

泉武「大和における前期古墳の立地と構造」泉森皎編『大和の古墳』Ⅰ　人文書院　2003年

（2）梅本健治「地域性をさぐる～ひろしまの弥生時代～Ⅱ墳墓からみた地域性」『研究輯録』Ⅸ　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1999年

（3）出土人骨の年齢については，小児；6～15才，成年；16～20才，壮年；20～39才，熟年；40～59才である。これは，以下の文献に拠る。

谷畑美帆・鈴木隆雄『考古学のための古人骨調査マニュアル』　学生社　2004年

（4）広瀬時習「玉副葬の意義－前期古墳に見る管玉の副葬について－」森浩一編『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ　1994年

（5）古瀬清秀「農工具」『古墳時代の研究８　古墳Ⅱ　副葬品』　雄山閣　1991年

（6）寺沢知子「鉄製農工具副葬の意義」橿原考古学研究所編『橿原考古学研究所論集』第四　吉川弘文館　1979年

（7）北山峰生「古墳出土の石製模造品」『古墳時代の滑石製品－その生産と消費－』第54回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集　2005年

（8）篠原祐一「臼玉研究私論」『研究紀要』第３号　財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995年

（9）小林行雄「鏡・大刀・玉の謎」『古墳の謎を探る』　帝塚山大学考古学研究室　1981年

図版 1

a　古墳群全景
（空中写真，南から）

b　同上（空中写真，
南東から）

図版２

a　第１号古墳全景
（調査前，北から）

b　第１号古墳全景
（北から）

c　第１号古墳全景
（空中写真，東から）

a　第１号古墳墳丘土層
（東西方向東半，
南から）

b　第１号古墳墳丘土層
（東西方向西半，
南から）

c　第１号古墳墳丘土層
（南北方向北半，
西から）

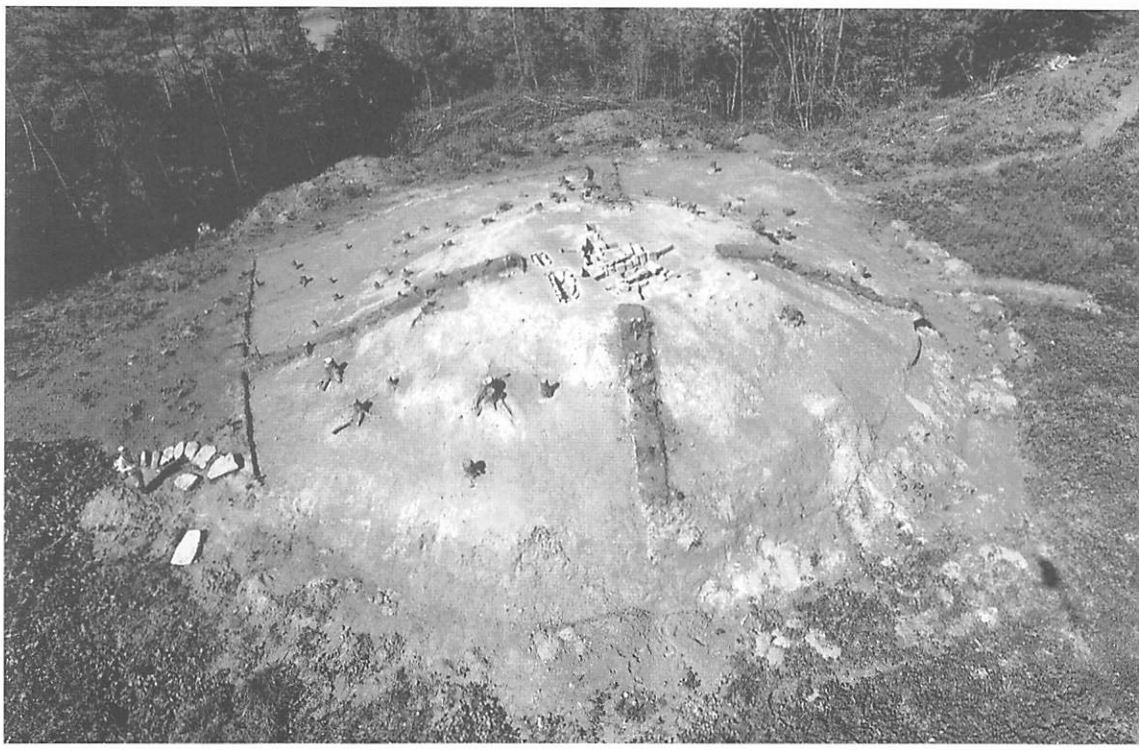
図版４

a　第１号古墳墳丘土層
（南北方向南半，
西から）

b　第１号古墳ＳＫ１
（東から）

c　第２号古墳全景
（調査前，北から）

a　第２号古墳全景
（北から）



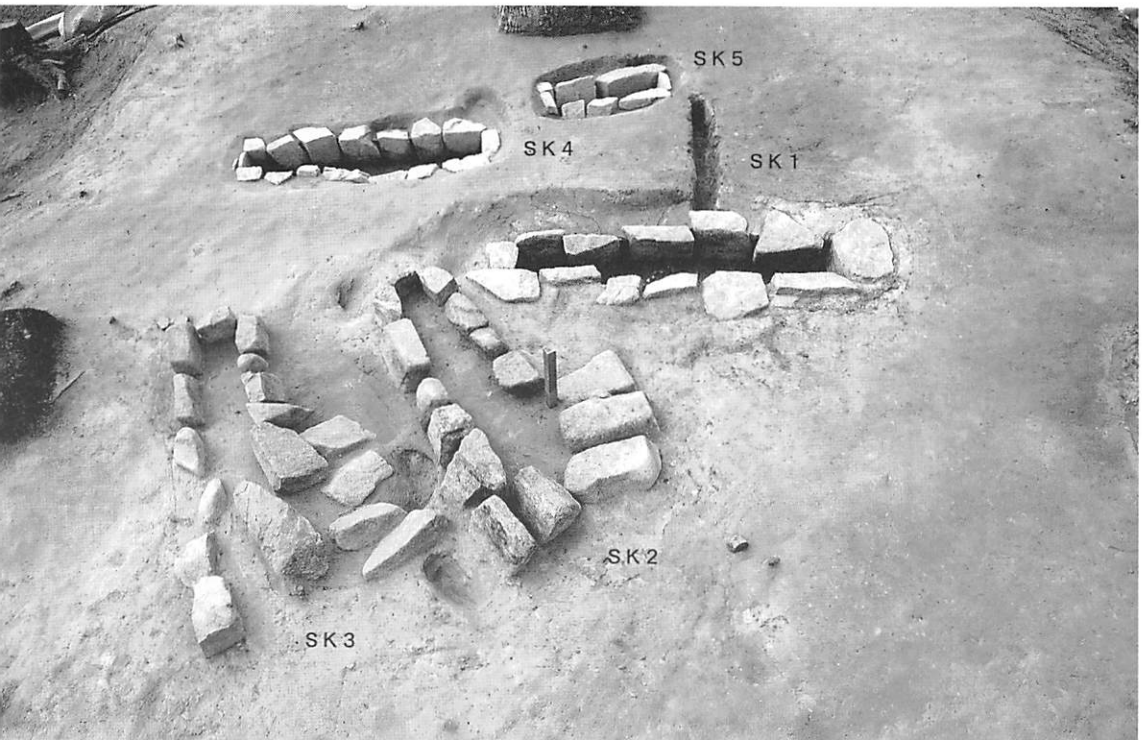
b　第２号古墳全景
（空中写真，東から）

c　第２号古墳墳丘
（南から）

図版６

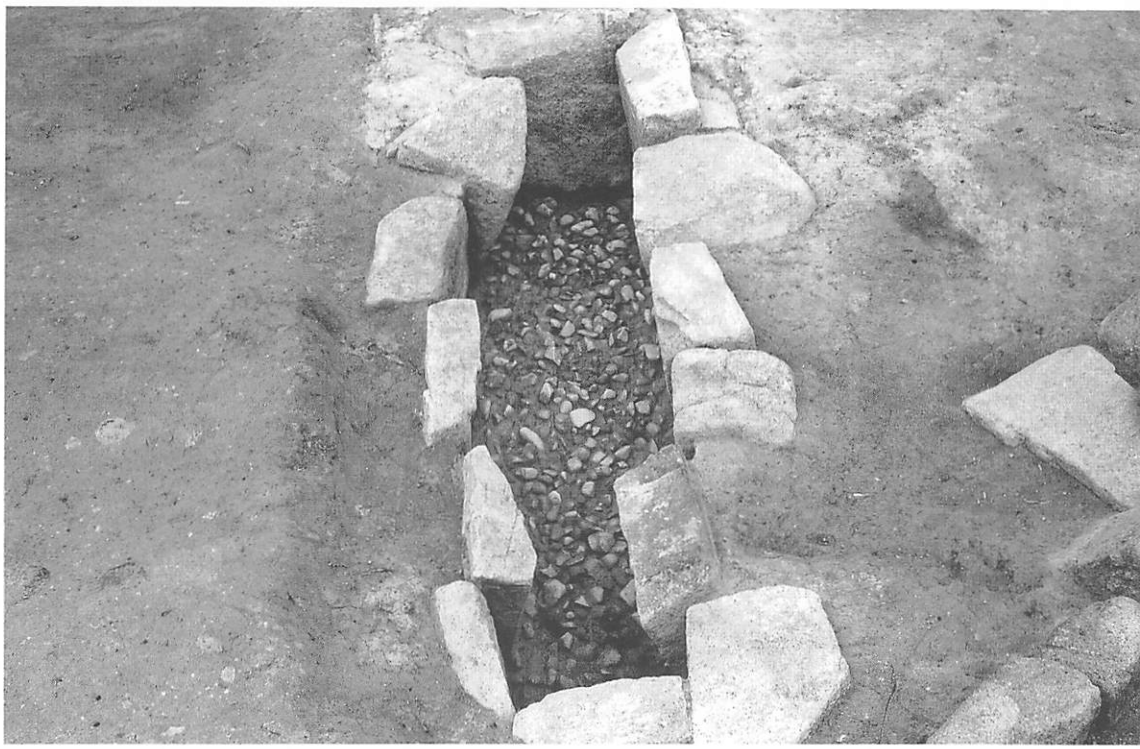
a　第２号古墳墳丘土層
（東西方向東半，
南から）

b　第２号古墳墳丘土層
（東西方向西半，
南から）



c　第２号古墳埋葬施設
群全景
（検出時，北から）

a　第２号古墳ＳＫ１
（北から）



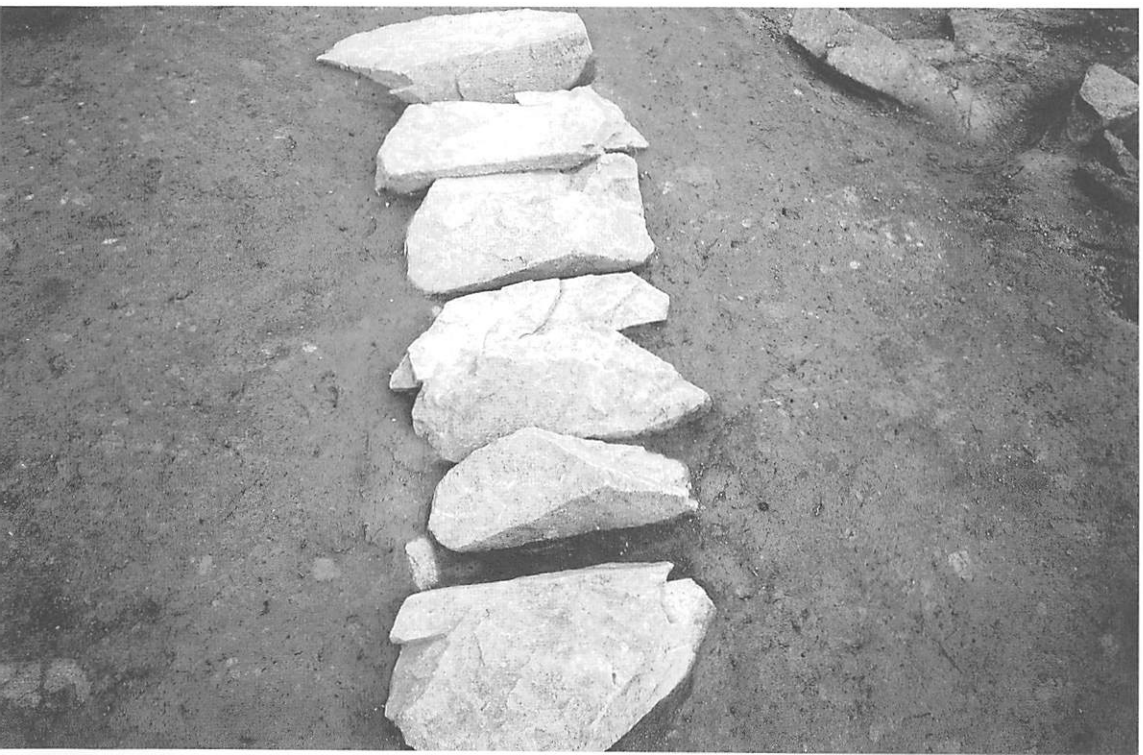
b　同上（礫床検出状況，
東から）

c　第２号古墳ＳＫ２
（西から）

図版８

a　第２号古墳ＳＫ３
（東から）

b　第２号古墳ＳＫ４
（蓋石，北から）



c　同上（蓋石，東から）

a　第２号古墳ＳＫ４
（棺内，北から）

b　同上（棺内，東から）

c　第２号古墳ＳＫ５
（蓋石，北から）

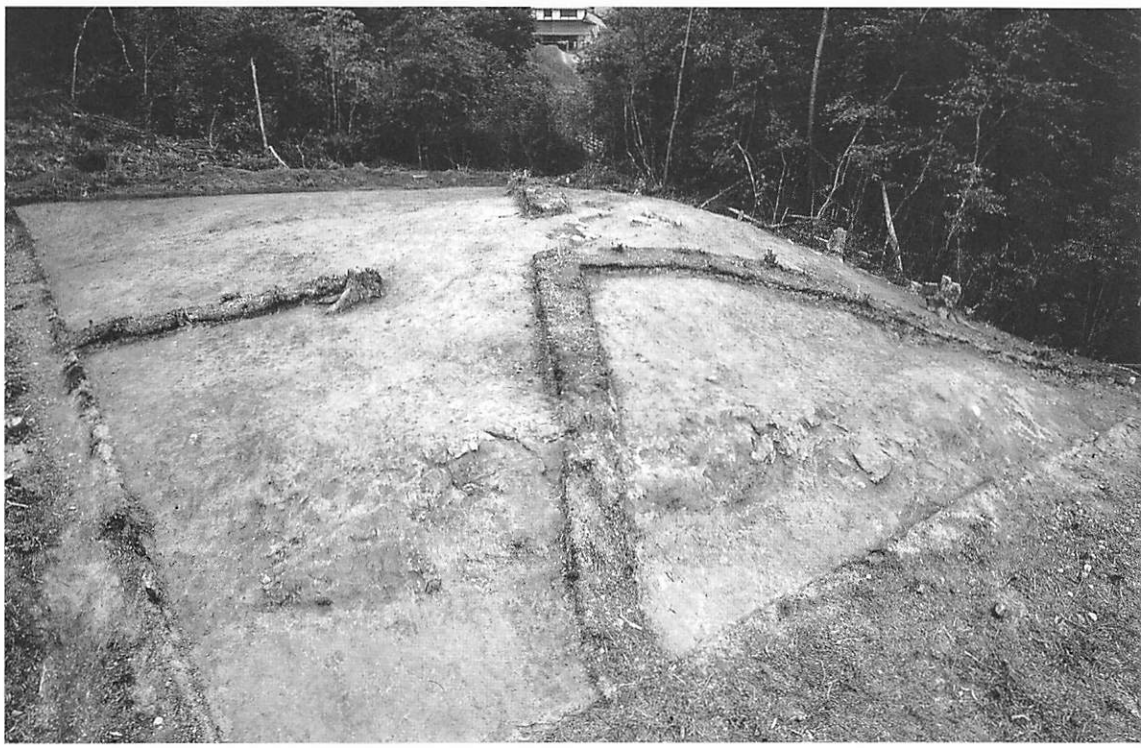
図版10

a　第２号古墳ＳＫ５
（蓋石，東から）

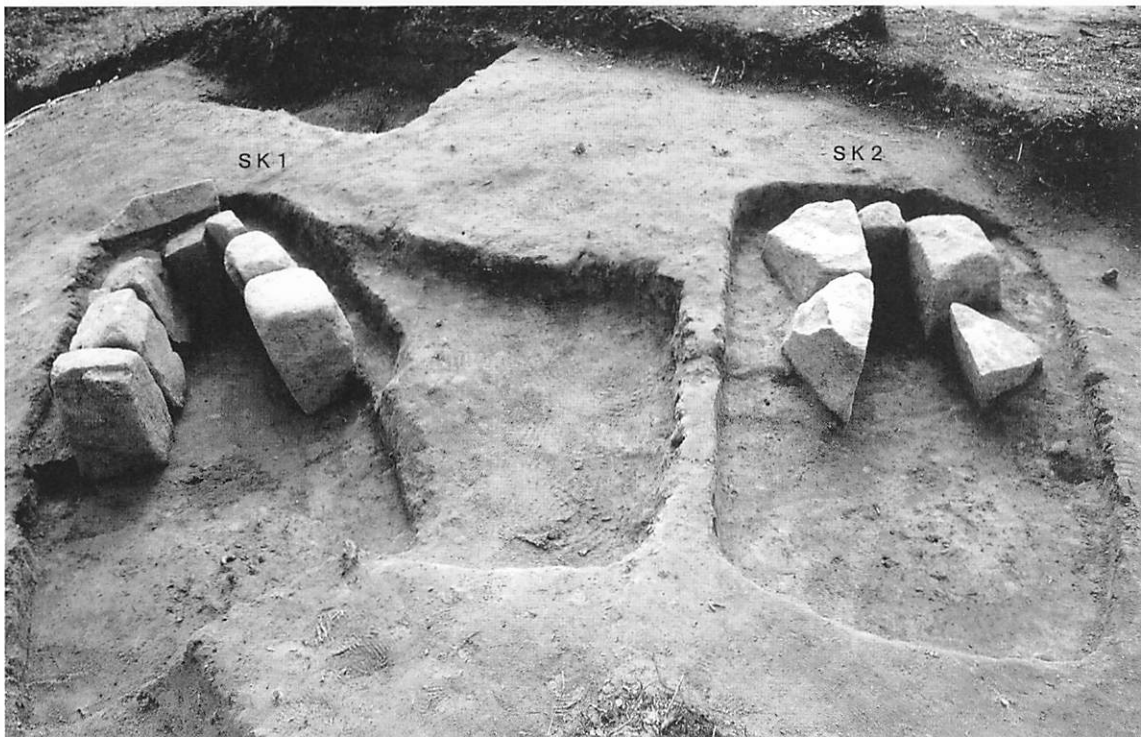
b　第２号古墳ＳＫ５
（棺内，北から）

c　同上（棺内，東から）

a　第３号古墳全景
（調査前，東から）



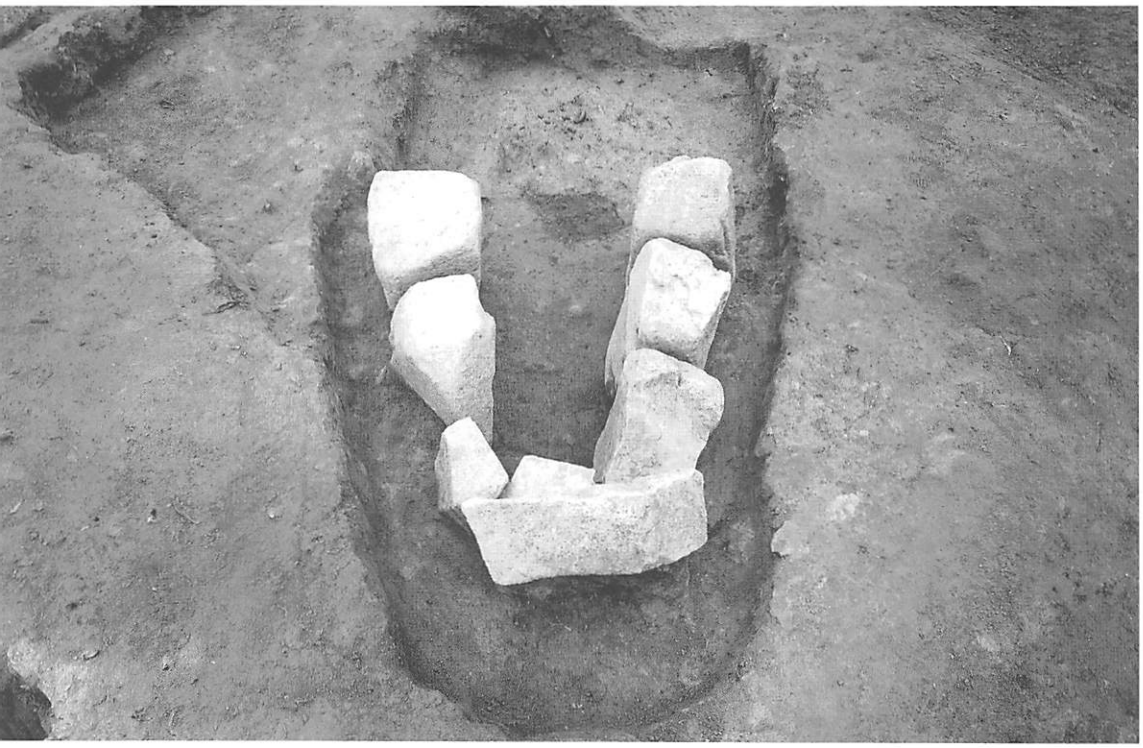
b　第３号古墳全景
（南から）



c　第３号古墳ＳＫ１・２
（北から）

図版12

a　第３号古墳ＳＫ１
（西から）



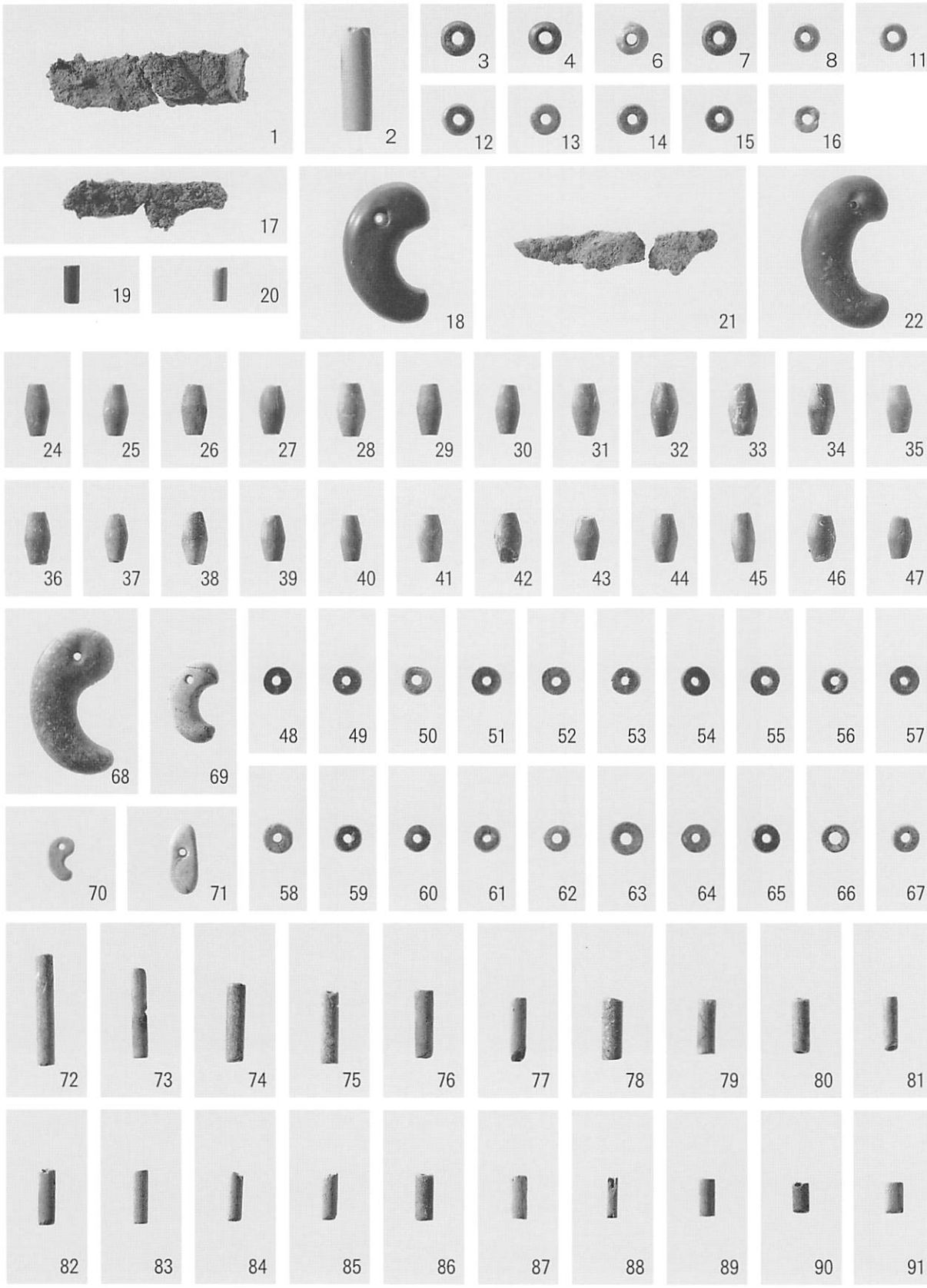
b　同上（南から）

c　同上玉類出土状況
（西から）

a　第３号古墳ＳＫ２
（西から）

b　同上（南から）

c　同上玉類出土状況
（東から）


1
2
3
4
6
7
8
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91

第２・３号古墳出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく
書　　名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻　　次	10
副 書 名	権現第１～３号古墳
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第32集
編 著 者 名	梅本　健治
編 集 機 関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目8-49　　ＴＥＬ　082-295-5751
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごんげんだい 権現第１～３ ごうこふん 号古墳	ひろしまけん みよし し むこうえた 広島県三次市向江田 まちあざごんげん 町字権現	34209	1112 ～ 1114	34° 47′ 47″	132° 54′ 43″	20050711 ～ 20051111	1,300	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る発掘調査

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
権現第１号古墳	古墳	古墳時代	古墳（埋葬施設不明）	なし	中世以降の攪乱（経塚として再利用）
権現第２号古墳	古墳	古墳時代	古墳（箱式石棺）	鉄鎌，刀子，勾玉，管玉，臼玉	箱式石棺５基
権現第３号古墳	古墳	古墳時代	古墳（箱式石棺）	刀子，勾玉，管玉，棗玉，臼玉，有孔楕円形石製品	小型箱式石棺２基

要　　約

南北に長い丘陵頂部に南端から第１～３号古墳が並ぶ。いずれも円墳で，南端にある第１号古墳は直径14m，高さ２mだが，墳頂部が中世の攪乱によって壊されており，埋葬施設は不明である。中央にある第２号古墳は径20m，高さ３mと最大規模の円墳で，墳頂部に箱式石棺５基が築かれている。中心的なＳＫ１は礫床で，棺内から直刃鎌と管玉・臼玉が出土した。ＳＫ４からは刀子と勾玉・管玉が出土した。ＳＫ５は小児墓である。長軸が東西方向のＳＫ１・４・５が先行し，長軸が南北方向のＳＫ２・３は後出する。最も北側に位置する第３号古墳は墳形は不明確だが，頂部で小型の箱式石棺２基（ＳＫ１・２）を検出した。いずれも長軸が南北方向を指し，東側のＳＫ１からは刀子と勾玉・棗玉・臼玉が，西側のＳＫ２からは大小３種類の勾玉と管玉が出土した。第２号古墳出土の勾玉・管玉は碧玉製だが，第２号古墳出土の臼玉と第３号古墳出土の玉類は珪質凝灰岩・凝灰岩製である。権現第１～３号古墳からは土器の出土はなく，築造時期についてはあまり明確でないが，小児墓を含む複数埋葬であることや副葬品が小型農工具（鎌・刀子）と玉類（勾玉・管玉・棗玉・臼玉・有孔楕円形石製品）の組合わせであることなどから，５世紀頃と考えられる。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第32集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（10）

権現第１～３号古墳

発行日　平成22（2010）年３月31日

編　集　財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
ＴＥＬ(082)295-5751　ＦＡＸ(082)291-3951

発　行　財団法人　広島県教育事業団

印刷所　鯉城印刷　株式会社